私たちに しときなさい！

イケダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私たちに　しときなさい！

【Ｎコード】
Ｎ７９７６Ｘ

【作者名】
イケダ

【あらすじ】
仏頂面で女っ気無しの男がなぜか二人の美少女から想いを寄せられることになる微ハーレムな物語

登場人物一覧

≪銀杏高校の生徒≫

★原田（はらだ）　柊兵（しゅうへい）

主人公。私立銀杏高校の二年生。眼光鋭く、不機嫌時には喧嘩っ早くなる性質。

☆風間（かざま）　美月（みつき）

柊兵や英範、怜亜の幼馴染。とても活発、運動神経もいい。柊兵のことが好き。

☆森口（もりぐち）　怜亜（れあ）

柊兵や英範、美月の幼馴染。少々控えめな性格で料理が得意。柊兵のことが好き。

★楠瀬（くすのせ）　慎壱（しんいち）

柊兵の悪友でクラスメイト。スマートな優男。女性の守備範囲は一番狭い。

★真田（さなだ）　尚人（なおと）

柊兵の悪友でクラスメイト。要領が良く、世渡りが上手い。年上&眼鏡女性が好き。

★佐久間（さくま）　英範（ひでのり）

柊兵の悪友でクラスメイトで幼馴染でもある。家は空手道場を経営。グループ中、一番の常識人。

★難波（なんば）　将矢（しょうや）
　柊兵の悪友でクラスメイト。単純な性格のお調子者。実家は蕎麦屋。女性の守備範囲は一番広い。

★本多（ほんだ）　友成（ともなり）
　友好実行委員会？のメンバー。骸骨体系。仇名は“　ウラナリ”。

★橋立（はしだて）　栄（さかえ）
　友好実行委員会？の委員長で冷静沈着な男。滅多に表舞台には出てこない。

≪銀杏高校の教師≫

★毛田（もうだ）　保（たもつ）
　柊兵のクラス担任。気色悪い口調とナヨナヨした仕草が特徴。

☆伯田（はくた）　加奈子（かなこ）
　銀杏高校に勤務する養護教諭。校内一の美人教諭と噂され、スタイルも抜群。

≪その他≫

☆ミミ・影浦（かげうら）

西洋占星術師。朝の情報番組で放映される占いコーナー、【ミミ・影浦の愛の十二宮】の
占い師でもある。柊兵の苦手人物の一人。

※この作品は自サイトより転載中です

プロローグ　―　ここから受難は始まった　―　＜1＞

――　斜に構えた仏頂面。
――　眉間にくっきりと刻まれた二本の深い立て皺。

……はっきり言おう。今日も俺は機嫌が悪い。
仲間内から最近益々キツくなってきているぞ、とはやし立てられている目つきは確かに一段と鋭さが増しているような気がする。それは不承不承ながら認める。

俺の不機嫌の原因はただ一つ。
それはここ数日欠かさず見るようになってしまった朝の情報番組、『モーニング・スクランブル』中に放映される、
【ミミ・影浦（かげうら）の愛の十二宮図（ホロスコープ）】。
こいつが俺の心の平静をいつも乱しやがる元凶だ。

……とはいっても星占いに興味があるわけではない。むしろ占いの類は昔から蛇蝎の如く嫌っている。
“自称”も含めればそれこそ途方も無い数が存在すると思われる占い師共。
奴さん達は明日やほんの一週間先の近未来から、迷う魂が天に還るまでに辿るであろう遠い未来までを、さも親身になっているよう

な物言いで予言する。

しかし俺はその予言を信じない。

「惑う子羊達の足取りがもう乱れないように」

という大義名分の下、占い師共はカードや水晶などのそれぞれが得意とする手段と千里眼を駆使し、より良い人生を送る為の助言とやらをご大層に指南してきやがる。

俺から見りゃあそんなことは余計な世話だと頭のてっぺんから怒鳴りつけてやりたい助言の数々も、悩める者にとっては遥か先の道筋を煌々と照らし出す、“　希望　”　という名の灯のついた特大カンテラに見えるらしい。まったくもってアホらしい。

占い師達が言葉巧みに紡ぎ出す予言の数々は確かにもっともらしい響きに聞こえる。

が、考えようによっては何通りかに解釈することの出来てしまうあんなあやふやな言い草を、どうして世間の奴らは簡単に信じ、そしてまたそれを己の未来の糧にしようとすることが出来るのか、まったくもって不思議でならない。

だがいくらそう苦々しく思っていても、こちらにはそれに科学的に反論するだけの確たる物証が無いのが業腹だ。

どっかの科学者がタイムマシンでも実用化してくれればそれで自分の未来を見に行き、

「おい違うじゃねぇか！」

と奴らの胸倉掴んで怒鳴りつけてやることもできるんだがな。

しかし敵も去るもので（いつの間にか敵扱いだが）、

『　限られたデータのみの科学的根拠だけに思考を縛られ、この殺伐とした時代を孤独に生きていくのでしょうか？　一を三で割るこ

とは永久に出来ませんが、一つのお煎餅を人の手で三つに分けることはできるのですよ 』

とすかさず反撃してくる。よく分からねぇが何か頷けるものがその中には確かに存在して、思わず納得してしまいそうになる。

ま、量りで正確に計測すれば手で割ったその煎餅も完全な三等分ではないだろう。

でも確かに三つに分けることは出来、三人の人間に煎餅を与えてやることは出来るもんな。

……ってなんだよ、もしかして俺も結構暗示にかかりやすい型（タイプ）なのか？

――　人は悩みを抱えると何かすがるものが欲しくなる。それはよく分かる。

そしてそれがヘビーな悩みなら悩みであるほど、尚更占いという物に傾倒し、そこに束の間の安寧を求めて疲弊した心を委ねたくなる気持ちも分かるような気がする。

だがそれがあまりにも不確かな予言（そんなもん）で本当にいいのかよ、と天邪鬼な俺は思うわけだ。

まぁ俺がいくらこんなにひねくれた考えを持っていても、実際の所「占い」というジャンルはこの荒んだ世の中に、どんな強風でも決して揺らぐ事などのない大木の根っこのようにしっかりと定着、繁栄していやがるし、もちろん需要もある。

年末になれば書店には『来年のなんちゃら星人の未来・丸分かり！』なんていう本がうず高く平積みにされ、それなりにバカスカと売れていくのを目の当たりにする光景はもうお馴染みだ。結局はあ

ちらさんの大勝なんだよな。

……少々、暴言が過ぎただろうか。さて、ここからが本題だ。

これだけ占いの類を馬鹿にしまくっているこの俺が、何故【ミミ・影浦の愛の十二宮図】を毎朝欠かさずチェックし、しかもその結果に密かに一喜一憂しているのか？

理由は至極単純明快。

――それが異様に当たっちまっているせいだ……。

「事実は小説より奇なり」とはよく言ったもんだと苦々しく思う。

原田柊兵（はらだしゅうへい）、ここで華麗に敗北宣言だ……。

プロローグ　ー　ここから受難は始まった　ー　＜2＞

つい最近まで、俺にとって朝の情報番組はただの雑音に過ぎなかった。

【　モーニング・スクランブル　】には専属マスコット的なスタンスの奴がいやがって、珍妙な形の目覚まし時計“　モニン君”　とやらが五分置きに教えてくれる現在の時刻、それだけを無意識にその雑音の中から器用に聞き分けて拾い出す。

朝から生真面目なニュースに耳を傾ける気もねぇし、広げたスポーツ新聞を横目に飯を食うからスポーツニュースも必要ない。ましてや芸能人で誰と誰が付き合っているだとかなどのゴシップネタには毛ほどの興味も無い。

「今月オススメのヒット漫画はこれでーす！」

などと自分に興味のある話題が偶然耳に飛び込んできた時だけ、箸を片手に身体を大きく後ろに捻る、そんな毎朝だった。

だから　【　愛の十二宮図（ホロスコープ）　】　なんていう、いかにも女子供のみが喜びそうな下らない星占いなんざ、まさに雑音中の雑音、一言たりと聞きたくない、……はずだったのに、今の俺は毎朝この五分間のコーナーを軽い動揺を抱えながらヘビーチェックしている。

九月十四日、月曜日。午前七時四十八分。

【　ミミ・影浦の愛の十二宮図　】が始まった。いよいよだ。

大きく後ろを振り返り、箸を止め、固唾を呑んで本日の自分の運勢を見る。
この占いはその日の内容によって発表前にＢＧＭが変わる。いい占い内容の時はポップ調、悪い内容の時はベートーベンの運命の曲が流れる。
俺は十月十九日生まれなので該当星座は天秤座になるらしい。牡羊座から始まって七つ目、本日の天秤座の恋愛運命の発表がきた。

『さぁっ、占うよ～ん！』

と叫びながら毎回画面中央に飛び出てくる、この全然可愛くねぇ間延びしたおたふく顔の着ぐるみ天使だけは本気で勘弁してくれ。こいつを見る度に精神不快指数が軽く五倍に跳ね上がる。

……来た。
『さぁっ、次は天秤座だよ～ん！』
のアニメ声と共に聞こえてきたのは軽快なポップ調のメロディだった。

『にゅふふ～♪　とってもいいことがあるかもよ～ん！
異性があなたに急接近！　仲間の協力でさらに新しい展開が！？
流れに身を委ねれば、今日は一日超ハッピーディ！　やったね♪
』

……何が「にゅふふ」だ、何が「やったね」だ。
やたらと感嘆符が出まくりだった今朝の天秤座の占いを見た俺の機嫌はここで一気に悪くなる。
不細工なおたふく天使が先端に星のついた長ステッキを振り回し、『やったね♪　やったね♪』とドスドス足音を立てながらスタジオ

内を所狭しと走り回っている。今すぐ飛び掛って本気でこいつの首を絞めたい。
しかめっ面で茶碗の残りをかきこむと乱暴に席を立つ。
今の予言は「超ハッピー！」どころか、俺にとっては「今日も大変なことが起きます」と公共の電波で宣言されたようなものだ。

浮かない顔で洗面所に行き、もう一度顔を冷水でザッと洗ってとりあえず気持ちを切り替えると、スポーツバッグを肩にかけ家を出た。しかし母親が「柊兵、お弁当忘れてるわよ！」と玄関で叫んでいるので慌てて一度家に戻る。
何やってんだ、俺。相当動揺している。
まさかあんたがお弁当を忘れて行こうとするなんてねぇ、と驚く声を無視し、再び外へと出た。
駅に向かって歩きながら、たった今宣告されたあの予言が今日こそ外れろ、と強く強く祈る。

……実は最近の俺は恋愛絡みで憂鬱なことがある。
だからこそ、本来の自分なら真っ先に情報遮断にいきそうなあんな恋愛占いに耳を傾けるようになったのだ。
そして飯を食いながらなんとはなしに耳に入ってくる天秤座の恋愛占い内容に、

（……おい、もしかしてこの占い、ある意味当たってるんじゃねぇか？）

と俺が気付き出してまだ八日目だが、現在までこの占いの的中率はほぼ百％だ。
怖い。怖すぎる。
なぜなら運命のＢＧＭが流れ、あのおたふく野郎が

『今日は異性とあまり進展がないかも……しくしく、ぐっすん』
と予言した時は俺を悩ますあの二名の元凶共は確かに側に来なかったし、
また、今朝のように、
『ウフッ、いいことがあるかもよ～ん♪』
とあのおたふくが激しく妙な踊りをかました時は筆舌に尽くしがたい凄まじい攻撃を喰らっている。しかも今朝の予言は恐ろしいことに、≪仲間の協力でさらに新しい展開が！？≫などとまでのたまいだしていた。
仲間……？
まさかあいつら、俺を売る気じゃねぇだろうな！？
一抹の不安が胸をよぎる。
とにかく最近のあいつらは少し態度がおかしい。
……いや待て。むやみやたらに仲間を疑うのは良くねぇな。
とにかくあの二名の元凶のせいで最近の俺はこんな風に疑心暗鬼の塊と化してしまっている状態だ。

つい最近まで現在の生活に特に不満は無かった。
勉強は面倒だが、学校はまぁ面白いし、それに学内でつるんでいる悪友もいる。家にも特に問題があるわけでもなく、父親、母親、小学五年の弟一人、という一家四人のありきたりの家族構成だ。
しかし極たまにだが、ふとそんな毎日の日々が退屈で空虚なものに感じ、自問自答することがある。いや、あった、というべきか。

――　俺は毎日こうして無味乾燥な日々をただ繰り返し続けていていいのか？　と。

しかしそれで良かったのだ。

病に倒れてから初めて健康の有り難味を強く実感するように、波乱万丈な現在の日々の中に放り込まれて以来、今は安泰で平穏だったあの頃の日々が恋しく、ただただ懐かしい。凪いでいる海の良さが分からなかったのだ。後悔しても後の祭り。

それに引き換え、もし今の状態を例えるなら、大しけで荒れ狂う海の中に取り残され、渦の中に巻き込まれようとしているボート船が妥当な所か。

しかも救助信号（s.o.s）に応えてくれる奴もいない。それどころか逆にオールを取り上げられている始末。漕げねぇじゃんかよ。

そんな孤立無援の哀れな一艘の難破ボート。それが現在の俺だ。

九月半ばの旋風が電柱脇に溜まった気の早い枯葉を巻き上げる。

スポーツバッグを右肩にかけ、スラックスのポケットに両手を突っ込んで背を丸めてひたすらに歩く。長身のせいで前かがみで歩く癖がなかなか治らねぇ。

遠くに銀杏高校が見えてきた。

……今の俺の願いはただ一つ。

あの恐怖の占いが今日こそ、今日こそ外れること――。

プロローグ　―　ここから受難は始まった　―　＜3＞

「せぇーのっ！！」

下を見て歩いていた為、不覚にも反応が一瞬遅れちまった。両手をポケットに突っ込んでいたのも敗因だ。

後ろから聞こえたその声にギクリとしながら振り返ろう……としたが間に合わなかった。

一気に背中に感じたのはズシリと少々重い感触。だが妙に柔らかい感触が背中に当たる。

「おっはよ――っ！　柊兵！」

「美月ッ！？」

背中にしがみついているある一人の女を見た俺は後ろに向かってそう叫ぶ。

白い歯を見せニッコリと笑い、俺の背中に子泣き爺いのように取り憑いたのは風間美月（かざまみつき）。

スポーツ好きなせいで日に焼けた肌と、背中の中心までの長く麗しい黒髪、そして抜群のキュートな笑顔が最大の魅力（本人談）の、天真爛漫といえば聞こえがいいが、有り体に言っちまうととにかくうるせぇ女だ。

「なっ、何してんだよ、お前は！！」

と叫びながら後ろを向いたせいで前方の防衛面がついおろそかに

なった。重ね重ね不覚。
今度はすかさず俺の胸に目掛けてトンッと何かがぶつかってきた。
感じる軽い激突感。こちらの感触も同じように柔らかい。

「おはよ、柊ちゃんっ」

「れ、怜亜ッ……！？」
今度は真下に向かって叫ぶ。
勝手に胸の中に飛び込み、はにかみながら俺を見上げている女は森口怜亜（もりぐちれあ）。
透き通るような白い肌に黒目がちの大きな瞳、そして薄茶のショートボブが一際可憐で愛くるしい（美月談）、華奢な女。美月に比べると少々控えめな性格だ。

後ろに一人、前にも一人。

二人の美少女（繰り返すが美月談）に抱きつかれ、場所でいうなら三色サンドイッチのど真ん中、頼りない薄っぺらな合成添加物たっぷりのロースハムの位置に置かれた俺は、通りの向こうにまで突き抜けるような大声で咆哮する。

「お前らぁっ！　俺から離れろぉぉぉ――――――ッ！！」

「へ？　なんで？」
俺の腹の底からの絶叫に背中の美月はケロッとしているが、怜亜はほんの少しだけ驚いたようだ。小さな口に手を当ててキョトンと俺の顔を見ている。なぁ、頼むから俺の真下でそんな顔すんな。
「お、お前らな、いい加減にしろよ！　この間転校してきたかと思

ったら俺にベタベタしやがって！」
「いいじゃん、あたし達、白樺（しらかば）小時代のかつての同級生なんだからさ。チクワの友ってやつよ」
「竹馬でしょ、美月」

美月の言い間違いを優しく怜亜が訂正するがそれも激しくどうでもいいことだ。
くそっ、それよりもこの、この前後の柔らかい感触……ッ！　脳内水銀温度計が急激に上昇中。沸点百度は軽く超えていそうだ。
……駄目だ！！　何も考えられなくなってきやがった！！　おかげでただでさえ口が悪いのに余計に拍車がかかる。

「うるせぇっ！　チクワでも竹馬でもどっちでもいい！　たっ……、いっ、いいから俺の側に来んじゃねぇ！」

――　危ねぇ、うっかり「頼むから側に来るな」と言いそうになっちまった。こっちが下手に出てどうすんだ。

「こんな朝っぱらからそれだけ大声出せるってことはちゃんと朝御飯食べてきてるね、柊兵！」
俺の背中から飛び降りた美月は前に回り、怜亜と共に俺の正面に立つ。
「そういえばこの間新聞の記事で読んだんだけど、十代の男の子って朝御飯を食べて来ない人がとっても多いんですって。朝はちゃんと食べないと脳が活性化しないのに……。えらいわ、柊ちゃんっ」
「怜亜！　お前は俺の事を柊ちゃんって言うのも止めろ！」
「だって柊ちゃん……」
「呼ぶなっつってんだろ！」

「ちょっと柊兵！　怜亜をイジめたらあたしが許さないからね！」

ひゅっ、と空を切る音がして美月の正拳が俺の鼻先三寸の所で止まる。
「美月、お前まだやってたのか？」
殴りつける真似をされて反射的に脳内温度が下がり、逆に冷静さを取り戻せた。
「ううん、ここを引越して以来、道場にはもう通ってない。自己鍛錬のみ！！」
こいつはかつて俺と同じ道場で空手を習っていたことがある。
「その割にはいい動きしてるな」
「えーっ！　そう？　ありがとっ！」
俺に対して激怒しかけていたはずなのに、ちょいと褒めてやったらもうニコニコと笑っている。
しっかし昔から変わんねぇよな、その単純な所……。

「柊ちゃん、一緒に学校に行きましょっ」

ほれ見ろ、こっちも全然堪えてねぇし！
また怜亜が俺の名前をちゃん付けで呼びやがったが、もう俺は叱りつける気力を完全に削がれていた。返答する間も与えられず、即座に両腕にこいつらの腕が絡みつき、ずっしりと重力がかかる。
「ではでは、れっつごー！」
能天気な美月の声が気分をさらに落ち込ませる。
覆面パト内に連行される犯人の心境はこういう心境なのだろうか……。

◇　◆　◇

――　クラスを見渡せば何人かは必ずいるはずだ。

“　男の中にいればまったく平気なのに、女の前だと途端にグダグダになる奴　”。

俺はまさにこのタイプだ。

……って自分で言ってて情けねぇな。

仲間の一人によく言われているのだが、それでも女が　【　嫌い　】　のカテゴリーに入っていない所がミソなんだそうだ。ほっとけ。

でもその指摘は確かに当たっているのかもしれない。女は嫌いでは無く、あくまで苦手な存在だ。

周囲の奴らには硬派と思われているらしいが、別に硬派を気取っているわけではない。緊張のあまり、単純に女と何を話していいのか分からなくなるだけだ。

だから仲間とつるんでいる時は、極たまにだが冗談も言い、時には突っ込まれ、口下手なりに口数も増えるのだが、自分から女に話しかけることは一切無い。

逆に女から話しかけられると、≪直径十センチ級の特大正露丸≫を思いっ切り噛み潰したようなしかめっ面になっちまう。

女の他に苦手なのはネコだ。

この小動物が苦手なのも、どことなくネコは女っぽいところがあるせいだと思う。ミャア、と可愛らしく鳴かれ、澄んだ目でこっちを見上げてその何ともいえないすべすべした毛並みを身体になすりつけられでもしたら、背中にゾゾォーッと悪寒が走る。

ネコを愛でる気持ち自体はたぶん俺の根底に脈々と流れているとは思うのだが、その上に、

『悪寒』
『動悸』
『息切れ』
『眩暈』
『冷や汗』

以上の断層が何層にも渡って次々に厚く覆いかぶさっているので、どうしても及び腰になってしまう。
ネコでこれだから女が側にくるとこの症状は更に増し、身体が硬直する。気つけ及び平静を保つ為に、救心一ビンの中身を全部口に放り込みたいくらいだ。

……おい、それよりも美月に怜亜。
お前らが俺を両脇から連行するのはまだ我慢する。耐えてみせる。
だが、だがな！　そんなにぐいぐいと身体を押し付けないでくれ！　腕にな、お前らの片胸が時々当たってきやがるんだっての！

しかしそんな俺の内心の叫びを知ってか知らずか、美月の奴が、
「う～今日は寒いよねーっ！　ねー怜亜、ちゃんとあったかくしてる？　寒かったらさ、柊兵にもっとくっつけばいいよ！」
「えぇっ！」
「じゃっせっかくだからあたしもーっ！」
おいおいおいおいっっ！　お前ら待てってッ！

――　だが容赦の無いWサンドイッチ攻撃再び。

頬を染めてそっと俺に擦り寄り、腕をさらに絡ませてくる怜亜。
二の腕が鬱血するんじゃねぇかというぐらいの力でしがみついて

くる美月。
両腕にでっけぇマシュマロをムギュッと強引に押しつけられたような柔らかい感触がまたしても俺を襲う。
……くそっ、一旦は静まった動悸がまた激しくなってきやがったじゃねぇか！
このままだと次々に襲い掛かる激しい動悸に耐えかねて、その内冗談抜きでぶっ倒れそうな気がする。そんな醜態を晒したら末代までの恥だ。マジで救心が欲しい。今なら一ビン飲み干してみせる。
あぁ畜生、そんなことよりもやっぱり今日もあのおたふく占いが当たりやがったか……。
ミミ・影浦、恐るべし。

……なぁミミさんよ、俺にとっては有難迷惑だが、あんたの恋愛占いとやらがよく当たるのは分かった。大したもんだ。褒めてやる。
だからその占いで教えてくれ。
俺がこの生き地獄から抜け出すには一体どうしたらいいんだ！？

ツインカム・エンジェル！　<1>

朝のＨＲが終わった。
椅子にどっかりと座り、机に頬杖をついて険しい顔で窓の外に顔を向けていた俺に背後から声がかかる。
「柊兵く～ん、今日も君は朝からハッピーなことがあったようだね～？　いやぁ羨ましいなぁ～っ！」
……来やがったな。
悪友メンバー四人の内の一人が早くも登場だ。

――楠瀬慎壱（くすのせしんいち）。通称、シン。

こいつはグループのムードメーカー的存在で、とにかく場を盛り上げるのが上手い男だ。
涼やかな二枚目顔に合わせたロングレイヤーのヘアスタイルが自慢で、後ろから見ると女と間違われそうだが背丈があるので今のところ間違われたことは無いらしい。
俺を一番からかうのがこいつだ。とにかくいじるのが面白いと言う。相手にすると益々いじられまくるのでシンのからかいには無視を決め込むことが多い。
だがそれでも時折堪えきれずに怒りの臨界線（ボーダーライン）を突破しそうになる時があるが、シンはその見極めに非常に長けている男だ。俺の発する霊気を直接肌で感じることが出来るのか、俺がブチ切れそうになる直前でからかうのをピタリと止める。
しかしシンは何度ヒヤリとする場面になっても俺をからかうその危険な遊びを一向に止めようとする気配は無い。こいつはもしかしたら目前にせまる恐怖（スリル）を楽しむのが好きな、真性のマゾ体質なのかもしれないと最近の俺は時々思う。

「なになに？　聞くところによると今朝はあの可愛い美女二人を両手にぶら下げて登校したんだって？　いやぁ～今、この学校で柊兵くん以上の幸福男（ラッキーマン）はいないだろうなぁ～！　俺が断言するよ！」

俺は窓の外に顔を向けたままでシンを無視する。こいつの相手になれば余計に泥沼になっちまうからな。しかし毎朝遅刻ギリギリで来るシンがこんなことを言い出すのは他の仲間の誰かが教えたからに違いない。余計なことをしやがって。

「どうでしたか、美少女二人に挟まれたご気分のほどは？」

無視しているにも関わらず、シンはまだこの話題を続けている。悔しいことにあのおたふく占いもまた的中しちまったし、今朝は久しぶりにキレそうな予感がしてきた。そこで最終警告代わりに横目でギロリとシンを一睨みする。今まで何度も見慣れてきているはずなのに、シンは俺の顔を見て一瞬たじろいだ。やはり今朝は相当ヤバい目つきになっているらしい。

「でっでさ、柊兵くんはこれからずっとあの娘達と一緒に登校するわけ？」

ビビッているくせに最初の出だしをつっかえながらもシンはまだ俺に絡みやがる。

「知らねぇっ！　俺に聞くよりあいつらに聞け！　ついでにもうまとわりつくなって言っとけ！」

と苛立ちを一気にシンにぶつけたが、シンは途端に

「はぁ？」

と素っ頓狂な声を上げた。

「なんでだよ？　勿体無いことすんなよ！　あんなに可愛い女の子

二人から好かれてさ、お前はマジで幸せモンだぜ！　ドゥーユーアンダースタン？　柊兵くん、君は分かってるか？　今置かれているご自分の素敵な立場ってものをさ」
「じゃあお前が代わってくれ」
「ちょい待てよ柊兵！　もしかしてわざと言ってるのかよ！？　お前って意外と性格悪いんだな～！」
シンはそう叫ぶと大袈裟に肩を竦め、両掌を上に向けて腕を二、三度上下させた。オーバーアクションが好きな奴だ。
「いいかい柊兵くん、代われるもんなら今すぐ代わりたいっつーの！　ソッコーで、チョー電光石火で代わってほしいよ！　でもよ、美月ちゃんも怜亜ちゃんも、お前しか見てないじゃんか！　あーあ本当にいいよな～、あんな可愛い幼馴染二人から想われるなんてさ～！　俺も真実の愛を探しに旅立とうかなぁ……」
そこへすかさず割り込む低い声。
「いや、幼馴染というのは少々違うな、シン」
――佐久間英範（さくまひでのり）。通称、ヒデ。
あくまで俺らグループの中での話だが、一番の常識人だ。
百八十四センチのがっしりとした身体とその濃い顔つきのせいで、二十代半ばに見られることも多々ある。
高校生とは思えないその落ち着きは、シンに言わせるとすでに「老成」の域に到達。父親が空手の師範で道場を経営しているので、幼い頃から拳法を嗜んでいるせいもあるかもしれない。俺も小学二年の時からその道場に通っているので、高校に入ってからつるむようになった今のメンバーの中でヒデだけとは小学生時代からの腐れ縁だ。
俺とシンのすぐ横で腕組みをしながら話を聞いていたそのヒデが会話に割り込んできた。余計なこと言い出すんじゃねぇぞ、ヒデ。

「へ？　幼馴染じゃないの？」
「シン、前にも話したと思うが、美月と怜亜、柊兵、そして俺が白樺小で同じクラスになったのが小学四年の時だ。その時からの付き合いだからで幼馴染っていうのとは少し違う」
「だって小学四年なら九～十歳あたりだろ？　その辺りなら充分幼馴染の定義内じゃん」
「そうか？　俺は幼稚園ぐらいからの付き合いが当てはまるものだと思っていたが。柊兵はどう思う？」
「知らねぇっ！　どうでもいいっ！」

「ははっ、今朝は一段と機嫌が悪いね、柊兵」

とそこにまた俺らの輪に加わってくる爽やかな男が一人　。
「僕、今朝ここから柊兵が登校するのを見てたんだけどさ、もう少し歩くスピード落としてあげなよ。あの娘達、ずんずん歩く柊兵の腕から降り落とされないように必死にしがみついてたよ？」
こいつが情報源（ソース）か……。――　真田尚人（さなだ なおと）。

俺らの中で一番世渡りが上手い。
中性的なその笑顔と自分のことを「僕」と言う優しい口調は年上女の母性本能をくすぐる大きな武器だ。そのせいかこいつの知り合いの女は見事に年上ばかりだ。女の遍歴は非常に偏っていると言わざるを得ない。
俺らのグループは学業、素行の面で教師からの呼び出し率が高いことでも有名だが、その中で尚人だけは例外だ。頭の良いこいつは教師の覚えもめでたく、職員室への入室率は断トツで低いのも特徴だ。ちなみにシンと出身中学が同じで昔から二人でよくつるんでナンパに繰り出していたらしい。

「ほら睨まない、睨まない。柊兵もさ、そんな世間を警戒しまくる

ハリネズミみたいな顔してないで、もっと自然な顔してなよ。悪くない顔してんのにさ、絶対損してるよ」
「う、うるせぇ」
尚人はメンバーの中で一番人当たりがいいのでこいつと話す時が一番調子が狂う。
“　気立ての優しい綺麗な女を男に転向（コンバート）させたら尚人になった”、というのがこの男に対して一番しっくり来る説明のような気がする。だからこいつから微笑みを浮かべて話しかけられると、それが俺にとってどんなに怒髪天を衝くような内容でも怒りが天を震えさせることはない。ったくいいんだか悪いんだか。
尚人から顔を背けた途端、男にしては少々甲高い声が場に挟まる。
「なぁなぁ柊兵、でさ、お前はどっちが本命なわけ？　さっさと決めろよなぁ！！」

――　難波将矢（なんばしょうや）。

グループの中で一番のお調子者。
そしてメンバーで唯一兄弟姉妹がいないせいか、どこか呑気で坊ちゃん的な所がある。
良くも悪くも我が道（ゴーイング・マイウェイ）を行く男だ。
実は尚人の次に童顔の男なのだが、それを嫌っている将矢はこの銀杏の校風が比較的自由なのをいい事に、髪を脱色（ブリーチ）しまくっている。俺ら五人の中で一番背が低いこともかなり気にしているようだ。男は見てくれじゃないと思うんだがな……。
その将矢がまたしてもやかましく叫ぶ。
「なぁマジで早く決めてくれって柊兵！　で、残った方をこの俺がパックリといただくっ！！」

俺の交感神経のあちこちに埋められている激怒地雷源を踏みつけたのはこの日もこいつだった。
将矢はとにかく場の空気が読めない男なので、こいつが俺をネタに口を出すとそれは大抵俺の大いなる怒りを呼び起こすことになる。そう考えると、俺が憤怒の形相になる前にシンが紙一重の所で毎回それを上手く回避するのは、やはりシンの才能なのだろう。ま、羨ましくも有難くもなんともないがな。
それよりも将矢だ。
俺の視線は完全に将矢を照準（ロック）固定する。攻撃（アタック）開始。

「ぐぁぁぁあああぁぁ――ッッ！！」

無言で椅子から立ち上がり、将矢の首にスリーパーホールド。
思わず出たこの技、昨夜読んだ昔のプロレス漫画の影響か。
しかし面白いくらいに綺麗に決まったな。気を良くし、さらにきつく締めつける。と同時に苛々していた気持ちが少しずつ霧散していく。将矢に感謝だ。
頚動脈を締められ、青い顔で空中をかきむしっている将矢を憐憫たっぷりの視線でシンが眺める。
「あーあ、将矢はストレートに言い過ぎ。ほんと下手だなぁ、柊兵をいじるのが」
「まぁ今日はもうその辺にしとけ柊兵」
金のヘッドを抱えていた腕をヒデに軽く掴まれた。
「見ろ、将矢はすでに宇宙（そら）に逝きかけてるぞ」
ここで将矢に死なれても寝覚めが悪い。渾身のスリーパーホールドでだいぶ怒りを放出できた俺はあっさりと獲物を放擲することに

した。
教室の床にバタンとうつ伏せに倒れ、ヒクヒクと床で蠢めく無様な将矢の側に心配そうな顔で尚人がスッと膝をつく。優しいもんな、尚人は。

「……なんかこの動き、理科の実験でカエルを解剖して電流を流した時の動きによく似てるね」

おいおい尚人、見かねて心配したんじゃないのかよ？　まぁやったのは俺だが……。
「いいかお前ら、こんなふうになりたくなければもう黙れ」
将矢を除いた全員に改めて最終通告すると、残りのメンバーは神妙な顔で全員一度だけ首を縦に振った。
なかなか素直じゃんか。今日の俺は余程危ないオーラを発しているらしい。こいつらの従順さにとりあえず納得した俺はドサリと椅子に腰を下ろし、再び仏頂面で外を眺める。

……後で知ったことなのだが、もしこの時、後ろの教室内を振り返っていたら俺の運命もまた少し変わっていたのかもしれない。
あの恐怖のミミ・影浦の占いも半分は外れ、俺の溜飲も多少は下がったかもしれない。
でもこの時の俺は知らなかった。
俺の背後でシン達が神妙な顔をとっくに止め、お互い目配せをしながら肩を震わせ、声を殺して笑っていたことを。

・―――・―――・―――・―――・―――・―――・―――・

―――・―――・

昼休み。昼食の時間だ。
俺達は天気が晴れの場合は必ず外で昼飯を食うことにしている。がやがやとやかましい教室より、気持ちのいい青空と風の下で食うほうが百倍美味く感じるからだ。
場所は校舎裏のケヤキの大木の下。
以前、この場所は争奪戦が激しい場所だったようなのだが、俺らがここで弁当を食い出すようになって自然と他の奴らはこの付近に足を向けなくなった。

……まぁ、その理由はなんとなく分かる。
図体のでかい男共がわらわらと五人も群れて、しかもその中に目つきの悪い俺や、更に大柄のヒデ、金髪頭の将矢などがいれば、普通の奴なら触らぬ神になんとやらで、因縁でもふっかけられないように自己防衛に走るのも頷ける。
ま、こっちにしてみりゃあ、こんないい場所を俺らだけで独り占めできるので願ったり叶ったりだ。
九月半ばに入り、何気なく見上げた空がまた一段と高くなっていることに気付く。
ケヤキの葉も少しずつ枯葉に変わり、風も段々と薄ら寒くなってきている。あともう一ヶ月もしない内にここで昼飯を食うのもしばらくはお預けだろう。
「いや～しかし今日はいい秋晴れだねぇ。飯も食ったし、午後の授業に備えてシェスタでもしませんか、皆の衆？」
一番初めに飯を食い終わったシンが芝生の上に大きく足を投げ出

して昼寝の提案をした。
「いいな」
「僕も依存無し」
「寝ようぜ、寝ようぜ！」
ヒデ、尚人、将矢がすかさず同意し、弁当箱を片付けると俺以外の全員が芝生の上にさっさと身体を横たえる。
「あれ？　柊兵は寝ないのか？」
胡坐をかいたまま動かない俺をシンが促した。
「いや、別に寝てもいいけどよ……」
「じゃあほらほら横になって横になって！　食後のくつろぎは重要ですよ柊兵くん！」
シンに急かされ、両腕を頭の後ろで組み、それを枕代わりにして俺もとりあえず仰向けになった。
なんとなくだが今のこの展開がなぜかとってつけたような展開に感じたのは気のせいか？
だがこうやって食後に寝るのは誰かが言い出してたまに起こる展開なので俺もそれ以上は深く考えずに、上空に斑点状に広がる鰯雲を視界から遮断することにする。
すぐに周りは静かになった。
昨夜、深夜二時過ぎまで部屋で格闘漫画の二度読みなんて馬鹿な事をしていたせいであっという間に睡魔に襲われ始める。たぶん五人の中で一番最初に意識を失ったのは俺だ。
……というか、意識を失ったのは実は俺だけだった。

ツインカム・エンジェル！　<2>

――　夢を見た。

ネコに襲われる夢だ。

元々夢見が悪い方なのか、俺は昔から毎夜見ている夢を滅多に覚えていない代わりに、記憶に留まる夢はほとんど悪夢という悲惨な体質だ。

今回俺のレム睡眠がご丁寧に見せてくれやがった悪夢（ナイトメア）は、よりにもよって真っ白いネコが俺にその身体を摺り寄せてくる夢だった。

逃げ出したくてもなぜか俺の身体はまさにこれから人体実験される生贄（モルモット）のように、手術台に革のベルトで手足をしっかりと固定され、身動きが一切出来ない状態になっている。

白ネコはニャーニャーと甘ったるい声で鳴きながら、まず俺の腹の上にヒラリと飛び乗った。

「あ、あっちに行けって！！」

首にも革ベルトを巻かれているがそれがぎりぎりと喉仏に食い込むのも構わずに、必死に四十五度まで頭をもたげて怒鳴りつける。

しかし白ネコはまだ子猫のせいか全然ビビる様子を見せず、相変わらずみーみーと鳴きながら俺の顔目掛けて一直線に身体の上をトコトコと軽快に歩いてくる。

「くっ、来るなぁ――ッ！！」

一歩一歩近づいて来るたびにどんどんと大きくなる、つぶらなネコの瞳に悪寒が走る。

ついに白ネコは首元にまで来ると、絶妙のマウンテンポジションからじぃっと真下を見つめ、
「んにゃっ」
と鳴いた後、その小さい舌でぺろぺろと俺の顔を舐め始めた。
ぎゃぁあああぁぁぁぁッ！！　やっ、止めろぉぉぉぉぉ――ッ！！
必死に顔を背けてもネコの奴は俺の顔を舐めるのを止めない。とうとう口までガッツリと舐められた。
おい、ファーストキスがよりによってネコかよ……と、この時まだ夢の中と気付いていない俺は色んな意味で気が遠くなる。
その時、ふと気付いた。
……この感触、全然ネコの舌っぽくねぇぞ？　ざらざらしてねぇし。
どっちかっていうと人間のある部分の感触に近いような気が……。

・――――・――――・――――・――――・――――・――――・――――・

――　俺の意識は一気にここで覚醒した。
目を開けた時のこの光景を俺は墓場まで忘れないだろう。
俺の顔の上に二人の女の顔があった。説明するまでもなく美月と怜亜だ。熟睡していた俺はこいつらに同時にキスされていたのだ。
上空から何やら激しいシャッター音。

ニヤニヤと下卑た笑い顔を浮かべたシンが、デジカメを俺らに向けて何度もシャッターを押している。

「あ。柊兵、起きちゃった。ね、シン、ちゃんと撮れた？」

俺から口を離した美月が上を振り返って聞いている。っつーか美月はなんでシンを気軽に呼び捨てにしてんだ？

「バッチリっすよ、美月ちゃん！」

片目をつぶり、グッと親指を突き出すシン。後で絶対に殺す。

怜亜も唇を離し、「楠瀬さん、どうもありがとう」と丁寧に礼を言っている。

おいおい、こいつら、いつのまに仲良くなってたんだ？

……本来の俺なら二人の女に同時にキスされている事を知った時点で、動悸が激しくなり呼吸困難でも起こしかねなかったが、自分が理解できる範疇のレベルを飛び越えた状況だったために思考はその活動を緊急停止していた。

その後、ようやく白濁していた思考が活動を再開すると、混乱は逆上へ向かって一直線の経路（ルート）を突き進み出す。

今の状況を把握した俺の目に怒りの色が表れ始めた事に気付いたシンが素早く釘を刺してきた。

「言っとくけど柊兵、俺らに怒るのは筋違いだからな？　俺らは美月ちゃんと怜亜ちゃんに頼まれて、仕方なーくやったんだからな。そこんとこよろしくっ」

「そうよ、柊ちゃん。悪いのは全部私たち。だから怒るなら私たちを怒ってね」

すぐ側の至近距離で怜亜が両手を合わせて頼み込んでくる。バカ野郎、女をどつけるかっての。

「皆、どうも協力ありがとうね！　これでまず今年の目標の一つは

達成よ！」
美月の声高らかな勝利宣言に男共が「おぉ～！」と感嘆の声を上げながらパチパチと手を叩く。
目標ってなんだよ、おい！
「ねぇ怜亜、ちゃんと同時に半分こずつに出来て良かったよね！」
「えぇ！」

――　だからなんのことなんだっての！

左袖で乱暴に口を拭い芝生から素早く身を起こすと、まずは周りを囲んでいるシン達を、次に両横にいる美月と怜亜を無言で睨み付けた。
しかし美月はへへへっと得意げに胸を逸らし、怜亜は柔和な顔で微笑んでいる。
この銀杏高の女達の中で俺の睨みに全然ビビらないのはたぶんこいつら二人ぐらいだろう。
「あのね柊兵、あたし達決めたんだ。これから柊兵のことは何でも半分こしようって！　ねっ、怜亜？」
「そうよ、柊ちゃん。美月も、私も、柊ちゃんのことが大好きだからなんでも半分こなの。でね、今回は柊ちゃんとの初めてのキスを半分こすることにしたのよ」

……全然意味分かんねぇ！

「だからぁ、柊兵の唇を真ん中から半分に分けて、左の口角までをあたし、右の口角までを怜亜って決めて、今日のお昼に奪いにきたんだ！　ヒデやシン達に協力してもらってね！　まぁでも二人で同時にキスしたから口の端になんとかぎりぎり触れたくらいだけどね」
……そうかっ、だからシンはさっき急に昼寝をしようなんて言い

出しやがったのかっ……！

「でもいいじゃない。それでもちゃんとキスできたわ。あ、楠瀬さん、カメラありがとう」

怜亜がシンからデジカメを受け取ろうとした所を横からすかさず横から奪い取る。

「あん、柊ちゃん返して」

「おっ、お前ら！　俺にもうまとわりつくんじゃねぇって言っただろッ！？」

「でもあたし達は柊兵のことが好きなんだからしょうがないじゃん！」

「だっだから、おっ俺の都合も考えろ！」

「だって柊兵、彼女いないんでしょ？　ヒデから聞いたよ？」

「だから私たち、柊ちゃんを仲良く半分こしようと思って……」

おい、だからその≪半分こ≫、っていう思考がそもそもおかしいだろ！？

そう言いかけてふとあることを思い出す。

――　美月と怜亜の父親は同じ製薬会社に勤めている。

だから小学生の頃、美月と怜亜はその製薬会社が契約しているマンションに住んでいた。要は社宅みたいなもんだ。

同じ建物に住み、同じ年で同じ性別。こいつらが親友になるのもまぁ当然の成り行きみたいなものだったのだろう。

事実、こいつらは友達というよりは姉妹……、いや、同い年だから双子のように育っていた。

こいつらはいつも一緒だった。

俺は小学四年の時に転校してきたこいつらと同じクラスになって、その後の小学校を卒業するまでの三年間、ヒデと四人でそれなりに仲良く遊んでいたような気がする。中でも美月は俺やヒデと同じ道場に通い始めたのでよく一緒にいた。

しかし中学にあがる年の三月に、美月と怜亜の父親に同じ都市への転勤辞令が出て、こいつらはまたも仲良く引っ越していったのだ。
転勤先が同じ場所だったので、中学以降もこいつらはずっと仲良しこよしをしてきたらしい。そして今年の九月に親達の転勤期間が終わり、美月と怜亜は半月前に再びこの街に帰ってきて、この銀杏高校に編入してきた、というわけだ。

そういや、小学生の時、よくこいつらは何でも半分に分けていたな。
それは美月と怜亜にしてみれば双子のように育った親友として当たり前の行為なのだろう。

……しかし男まで半分に分けようだなんて頭おかしくねぇか？

ツインカム・エンジェル！　<3>

「柊ちゃん、お願い、カメラ返して……」

怜亜がうるうるとした瞳ですがるように俺を見ている。

……ヤバい、また調子が狂う……！

「か、返すが、中の記憶（メモリー）は消す！」

怜亜は本当の女の分だけ、尚人よりも激しく調子が狂っちまう。羞恥写真を消そうと削除キーを探す俺の腕に美月が齧りつく。女のくせにすごい力だ。

「あぁっ止めてよ柊兵！　永遠の乙女の思い出になるあたし達のファーストキスのメモリーショットなんだからぁ！」

「知るか！」

――　なんだ、お前らも初めてだったのか……。実は俺もそうなんだよな。死んでも言わねぇけど。

「いいじゃないか、柊兵。黙って渡してやれよ。男ならそんな写真一、二枚撮られたぐらいでうろたえるな」

むずがる赤子をなだめるような口調でヒデが横から口を出してくる。

「さっすがヒデ！　もっと柊兵に言ってやってよ！」

美月がヒデをけしかけている。

両手を胸の前で組み、悲しそうな瞳で俺を見ている怜亜の側に尚人が近づき、

「はい怜亜ちゃん」

とその目の前にスッと携帯電話を差し出した。

「ほら大丈夫、今の本番前の口慣（ウォーミングアップ）らしなら僕もこれで一枚撮ったか

ら。これ、すぐに怜亜ちゃん達のケータイに送るよ」
「えっ、本当ですか？　嬉しい！」
慌てて横目でディスプレイを覗くと、寝ている俺の頬に両側から幸せそうに口付けをしている美月と怜亜の横顔がどでかく飾られている。これ以上無いぐらいの羞恥写真じゃねぇか……。

「おっ、お前らなぁ！」

本気で頭に沸騰した血が集まり出した俺に「まぁまぁ落ち着け柊兵くん」と笑みを浮かべたシンが近づいてくる。このだらしのねぇシンの顔。この顔は絶対に何か企んでいやがる顔だ。間違いない。
咄嗟に身構えた俺を横目にシンはまた大げさな素振りで大きく両手を広げた。
「さぁ美月ちゃん、怜亜ちゃん！　どうぞ俺らにすべてお任せ下さい！　可愛い女の子二人がその可憐な胸にずっと秘めてきた夢を今ここで華々しく成就させる為、俺ら正義の戦隊がこれからお手伝いをさせていただきます！」
……正義の戦隊って何だ。それじゃあ俺はこれから成敗される悪役（ヒール）か？

「じゃあ皆いいなっ！？　レディッ、GOッ！！」

突然シンが俺の両腿の上にガバッと馬乗りになる。そして俺の下半身の動きを封じると続けて叫んだ。
「ヒデ！　腕ッ！」
「おう任せろ！」
ヒデの太い腕ががっしりと俺の二の腕を掴み、俺の上半身は再び芝生に押し付けられた。
「うぉわっ！？」
「尚人は頭だ！」

「了解っ！」
横から伸びてきた尚人の手が俺の両耳をがっしりと万力のように固定する。
「将矢は柊兵からカメラ取り上げろ！」
「イエッサー！！」
ヒデに腕を押さえつけられているのでカメラはあっさりと奪われた。
感心するぐらいの巧みな連携プレー。さすがつるみだして二年目突入だな。頭に血が昇っているつもりだったが、こいつらの阿吽の呼吸に感心している俺もまだ結構冷静かもしれん。
「うわ～スゴーイ！　鮮やか～！！」
「柊ちゃん、捕まっちゃった！」
俺の側で美月と怜亜が手を取り合ってきゃいきゃいと喜んでいる。
たちまち俺はさっき見た悪夢の中のように、両手足の自由を奪われた生贄（モルモット）に逆戻りした。
「は、離せって！　てめぇらっ、後で覚えてろよッ！？」
身をよじってそう怒声を上げるが誰も聞いちゃいねぇ。
さすがに男三人に全力で押さえつけられれば逃げ出すことも叶わなかった。

「さぁさぁではどちらのお嬢様からにしましょうか？」

俺の脚の上にいるシンが美月と怜亜に向かって尋ねている。
ここまできてやっと俺はこれから自分の身にどんな災いがふりかかろうとしているかをうっすらと理解し始めていた。
ミミ・影浦の占いで出ていた≪仲間達の協力で起こる、とってもいいこと≫とは……！
「美月からでいいわ」

怜亜が微笑みながら順番を譲っている。
あぁ、やはりこいつも昔から全然変わってねぇな……。こういう時必ず先に一歩引くのが怜亜だ。自己犠牲精神が強いんだよな、こいつ。昔から自分一人が貧乏くじを引くと分かっていてもためらわずに引きに行く性格だった。
「ん～そぅお？　ファーストキスは一応同時に出来たし、じゃあお言葉に甘えて！！」
美月がよいしょっ、と言いながら俺の腹の上に跨る。
スカートが大きくひらめき、慄いた俺は即座に腹筋に力を入れた。間髪入れずに胃の真上にドスッと勢いよく美月が座り込む。
「ぐぉわぁっ！」
「うわっ、柊兵のお腹、すごく硬い！」
当たり前だろ、普段から影で鍛えてんだからな。それよりもうちょい遠慮して座れよ。ついさっき食った弁当がリバースしたらどうすんだ。
「へへ～、まさか今日一日で一気にここまで進めるとは思わなかったよ～！　じゃあ風間美月、参りますッ！」
参ります、ってこれから組み手練習するわけじゃねぇんだからよ……。
腹の上から俺を見下ろす美月は太陽のような輝く笑顔で俺に向かって顔をほころばせている。
……どうでもいいがこいつ、胸でけぇ……。
下から見ているとそれが一層よく分かった。胸元の赤のリボンが垂れ下がることが出来ずにその上に乗っている。
小学校を卒業する頃はまな板みたいな胸だったくせに、その後の四年間、美月の成長細胞は童話、『アリとキリギリス』の蟻のようにコツコツと額に汗水垂らして懸命に働き、食料の代わりにせっせと大量の脂肪を溜め込んでここまでこいつの胸を見事に膨らませた

らしい。
しかしよくここまで育ったもんだ。少々感動した。
……いや待て、感動している場合じゃねぇ！
そのでかいゴム鞠二つを標準装備した美月が俺に向かってぐいと顔を寄せて……。

「やっ、やめろぉおおおぉぉぉぉぉ――ッッ！！」

叫ぶだけ結局全て無駄。この状況で哀れな生贄（モルモット）が縛めから解き放たれる可能性など一切ありはしなかった。

「んーっ♪」

唇に柔らかい感触が再び当たる。しかもかなり強引に。脳天が痺れる。
美月がますます強く唇を押し付けてきたので、伏せられたその長い睫と黒髪が俺の上頬にかすかに触れた。組み手でヒデから頭部にまともに蹴りを喰らっちまった時より今の方が脳の衝撃が強いのはどういうことだ？
「おい将矢、カメラカメラ！　撮れ撮れ！」
「イエッサー！！」
シンに促され、目線を合わせるために芝生に腹ばいになった将矢が、俺と美月が唇を合わせている横顔をデジカメで何度も撮影している。
……これは悪い夢だ。悪夢だ。さっきのネコの夢が現実で、こっちが夢であってくれ……！

「はい！　いいよ怜亜！　次は怜亜の番！！」
約十秒近く俺に唇を押し付けていた美月が俺の腹から下り、怜亜を促す。
頬を赤らめた怜亜は小さく頷き、耳横の髪に手をやると、しゃなり、と俺の側に擦り寄ってきた。
しかし前から思っていたが本当にこいつはネコみたいな動きをする奴だ。

「柊ちゃん……」

怜亜は脚を崩して横座りになると、全身を投げ出すように俺の身体にもたせかけ、そっと覆いかぶさってくる。潤んだ瞳の怜亜の顔がゆっくりと近づき、香水か何かのいい匂いが鼻腔をくすぐりだす。
……うわっ、やべッ！　心臓の鼓動が勝手に早まってきやがったッ！　俺のこの拍動、くっついている怜亜に直に伝わっちまってるんじゃねぇか！？
美月のムードゼロのモーションと違い、怜亜のこれは最早立派な反則技だ。引きつった顔で硬直する俺の頬に優しく両手を添え、怜亜が顔を寄せてくる。いい形をした桜色の唇がどんどんと接近してきて……。
ちょっ、ちょっと待て！　待てって怜亜！　せっ、せめて心の準備をさせてくれッ！

――　しかし容赦無く再び柔らかい感触。
柔らかさの中にも美月と怜亜のそれぞれの唇は感触が違った。
美月の唇は温かくて怜亜のは少しひんやりとしている。決して強くはないが、ぴったりと唇を押し付けてくる怜亜のそれは、母犬が子犬をいとおしむ様な保護的な優しさを感じた。……だがどっちにしても心臓が締めつけられるように痛いことには変わりない。キュ

……救……心……！

「うぉぉー！　いいね、いいねぇ！　月９のラブシーンみてぇだ！」

そんなに連写したら壊れちまうんじゃねぇかと心配するぐらい、デジカメラのシャッターを切りまくりながら将矢が興奮した声を上げる。……おい、男三人がかりで体中を拘束されたこんな状態でやるラブシーンなんかあるのかよ……

怜亜はたっぷり十五秒近く俺から離れなかった。

息が苦しくて、マジで甘い拷問を受けているような気分にさせられる。

やがて怜亜は聖母のような慈愛に満ちた顔で俺から優しく唇を離した。酸欠で頭がくらくらする。

「満足しましたか？　お嬢様方？」

シンの言葉に美月と怜亜が「うんっ！」「えぇ！」と満面の笑顔で答えている。

和やかな雰囲気漂うこの場の中で俺一人が即死（デス）状態。今にも本気で死にそうだ。

「そりゃあ良かった。じゃあ早速次の用意だ。いいか、皆？」

何ッ、まだ俺に何かする気かよっ！？

焦る俺を尻目にシンが全員を見渡してカウントダウンを始める。

「いくぞぉーっ！　３、　２、　１、ＧＯーッ！！」

――　次の瞬間、俺は自由の身になった。

シン達が押さえつけていた俺の身体から手を離し、一目散に逃げ

出したのだ。
全員脱兎の如くこの場から走り出している。むろん、マジでブチ切れ五秒前の俺の攻撃から安全な場所に退避するためだ。
それにしてもあいつら逃げ足だけは本当に速いな……。
美月なんかは男共にも負けていない。運動が苦手な怜亜だけはヒデが手を引いて走ってやっている。

「先に教室に帰ってるぜ、柊兵く～ん！」
「またね、柊兵～！」
「ありがと、柊ちゃん！」
「へへっ、いい写真撮れたぜ～！」
「後で見せてくれな、将矢？」
「あっ僕にも！」

口々に好き勝手な台詞をのたまいながら奴らはあっという間にいなくなった。
一度はふらつきながら上半身を起こしたが、結局バッタリとまた芝生に倒れこむ。
ＨＰはすでにゼロ。マイナスかもしれん。
ＭＰもさっきの強制接吻（フォースインパクト）で綺麗に残らず吸い尽くされた。このまま昇天（ジ・エンド）か？
魂の抜け殻、憔悴の躯状態で早秋の高い空を見上げながら俺は複雑な気分になる。

……なんであいつら、俺がいいんだ？

昔小学校時代の同級生だったってだけで、中学時に転校して以来、俺は美月や怜亜と一度も会っていない。あいつらから毎年欠かさず

年賀状は来ていたが、俺は筆不精なせいもあり一度も送り返していない。
それなのに美月と怜亜は俺がこの高校にいることを知っていた。
そして十一日前に隣のクラスに転校してきたあいつらは真っ先に俺に会いに来た。

あれは忘れもしない九月三日。
いつも通り教室内で不機嫌な表情で外を眺めていた俺の目の前に「久しぶり！」と突然現れ、放課後に俺を体育館裏に呼び出したあいつらはいきなり告白してきやがったんだ。

「柊兵！　あたし、あんたの事が好き！」
「私も柊ちゃんのことが大好きっ」
「だ・か・らっ♪」

この後、美月と怜亜が唄うように口にしたハモリ音は衝撃、ただその一言に尽きた。

「二人一緒に彼女にしてちょうだいっ！！」

……後日、【モーニング・スクランブル】の公式サイトにアクセスし、『ミミ・影浦の愛の十二宮図（ホロスコープ）』の過去の占いを密かに調べてみた。

不細工天使のミニイラスト付きの九月三日の天秤座の恋愛運は、

【天変地異が起こるくらいの劇的な出会いが
あなたの頭上に華麗に華咲くことでしょう！】

だった。

……ミミ・影浦、あんたは
マジで凄いよ。脱帽だ……。

所詮この世は男と女　【前編】

『♪ぼぉ～くらぁ～のぉ～愛はぁ～～こぉのぉ世界ぃぃ中でぇ～、誰にぃも邪魔ぁさせぇ～やぁしなぁぁぁぁぃぃぃぃぃぃ～～！　だからぁぁぁぁ～～今すぐぅぅキスうぉお～してぇぇ～～！』

「よっ将矢ッ！　この大統領ッ！　キスしろキス！！」
「へぇ～将矢って歌上手いんだね！　ね、怜亜？」
「えぇ、こんなに上手に歌う人初めて見たわ」
『いやいやいやいや～、そんなことないッスよ～！　だはは～！！』
シン、美月、怜亜に次々に煽てられ、調子に乗った将矢の天狗声がマイクを通して何倍にも増幅されて俺の鼓膜にガンガンと響く。おかげで元々不機嫌な顔が更に暗鬱になる。

ここは銀杏高校からほど近い場所にあるカラオケボックスだ。
このさざめく防音密室の中で、俺は相も変わらず仏頂面で腕組みをし、安っぽい革張りソファに気だるく身を沈めきっていた。
数あるアミューズメントスポットの中でカラオケボックスが俺は一番嫌いだ。
で、何故その俺が今そこにいるのかというと、

……またこいつらに嵌められたのだ。

笑いたきゃ、笑え。
一日に二度も同じ面子に一杯食わされた俺を、心の底から嗤笑しろ。
昼に全員で示し合わせてあれだけの謀略を俺にしたシン達は、自分達の身の安全を危惧したのか、目に怒りの光を残したまま教室に

戻って来た俺に即座に陳謝し始めた。そして、

“　もう自分達は充分に反省している　”

“　魔が差したんだ　”

“　今日の放課後に詫びの印に四人で上手いモンを奢る　”

“　頼む、どうかそれで許してくれ！　”

とコメツキバッタのようにペコペコと何度も謝ってきたので急に馬鹿らしくなった俺は「分かった」と答え、それを受けたのだ。今思えばおめでたいにも程があるのは認める。

――　放課後、俺は四人にこのカラオケボックスに連れ込まれた。そういや、「最近はこういう所でも結構美味いメニューがあるんだ！　たらふく食ってくれ！」と、妙におかしなテンションでシンが熱弁していたな。

扉（ドア）の一部分がガラスになっているのは室内で良からぬ事をさせないための店側の防止策だとは思うのだが、食い物を適当に頼んだ数十分後、ガラス部分の向こう側に紺のハイソックスを穿いた細い女の足が二人分見えた時、俺はまた自分が罠に陥れられた事を悟る。そしてすぐに扉が勢いよく開き、

「じゃあぁぁーんっ！　遅くなってごめんねぇ！」

「お掃除当番が長引いちゃって……あらっ柊ちゃんどうしたの！？　気分でも悪いの！？」

ソファでがっくりと頭を垂れている俺に怜亜が駆け寄ってきた。

……お前らのせいだろうが。

「柊兵のことだからお腹減りすぎて具合悪くなったんじゃなーい？」

美月が呑気な口調でそう言い放った後、さも当然のように俺の横

にドサッと座ってきやがった。シン達がニヤニヤとしまりの無い顔で朗笑しているのがムカついてしょうがねぇ。
　そこへ再び入り口のドアが開き、光合成一切無しの暗室で育ったモヤシみたいな貧相な体格の店員が、「お待たせしました」と棒読みの口調で注文した食い物を室内に運び、テーブルの上に次々と並べ出す。
「ほら柊兵、食べ物が来たから元気出しなさいよ！　あ、皆サラダ取ってくれてないでしょ？　じゃあサラダ追加注文しま～す！」
「かしこまりました。大根サラダ、グリーンサラダ、シーザーサラダ、トマトサラダ、ミモザサラダがあるのですが、どれになさいますか？」

　無表情で追加オーダーを受けるモヤシ店員。
　こいつに恨みは無いが、八つ当たりでその逆三角形の細顎に思い切り掌底を喰らわせたい気分だ。

「う～ん、どれにしよっかな～…よーし！　シーザーサラダと、トマトサラダと、ミモザサラダッ！」
　……おい、そんなに食う気か、美月。
　内心でそう思ったことが視線にまで出ちまったようだ。
「あぁ～！　柊兵ってば今さ、『よくそんなに食うな』って思ったでしょ！？　サラダだから大丈夫だもん！」
　オーダーを受けたモヤシ店員は一礼後、幽霊のように出て行き、美月の言葉を聞いたシンが意外そうな声を出す。
「えっ美月ちゃん、まさかダイエット中なの？」
「うん、ちょっとだけ節制中なんだよね」
「何言ってんのさ。全然太ってないじゃん」
「ううん、ここで気を抜くと一気に来るのよ、あたしの場合」
「もしかして怜亜ちゃんもダイエット中？」
「いえ、私は特に……」

「怜亜がダイエットなんかしたら倒れちゃうわよ！　こんなに細いのに！　ね、柊兵？」

なんで急に俺に振るんだ。

無言でそっぽを向く。本意では無かったにせよ、つい数時間前にそれぞれ唇を合わせた女が両脇にいるのでいたたまれないことこの上ない状態だっていうのによ。

今月の新曲配信リストからどの曲にするかを決めかねていた尚人が、リストから視線を外さないままでそんな俺を一笑する。

「ははっ、柊兵、マジで怒ってるっぽいね」

やっとこいつらがこの話題を出してきたのでそれまで黙り込んでいた俺はここぞとばかりにすかさず激高し始めた。

「当たり前だっ！！　おい、てめぇら！　一体何度俺を騙したら気が済むん」

「あぁーっ！！　ヒデ！　それ俺の分の春巻きじゃんっ！！」

「甘いな将矢。この世は弱肉強食。それが自然の理（ことわり）。よって早い者勝ちだ」

「お前に情けは無いのかよ！」

「無いな。特に男には」

「ひでぇ！！　」

「ねぇ美月、このバームクーヘンのプチケーキ、美味しいわ。ちょっと食べてみて」

「じゃダイエット中だけどちょっとだけ……。あ！　ホントだ！　なかなかイケるじゃない！　もうちょい生クリームあれば完璧！」

「そうね、フルーツも添えてあればもっといいかもね」

……またしても誰も聞いてねぇし……。

「さぁ、ここいらで我らが柊兵くんも一曲どうだい？」

シンが俺に向けてマイクを差し出したがうっかり熱湯に触れたかのように慌てて手を引っ込める。眉間を射抜くような俺の威嚇視線にビビッたせいだ。するとこのやり取りを見ていた美月がケラケラと笑い出す。
「あ～柊兵はダメダメ！　いくら言っても絶対歌わないよ！　だって柊兵ってすっごく音痴なんだもん！　ねっ、怜亜！」
「え？　そそっ、そんなことないわよ？」

……怜亜の奴、今一瞬どもったな。嘘のつけない奴だ。

「小学生の時の話なんだけどさ、音楽の時間とか皆で斉唱したりするじゃない？　柊兵って絶対歌わないの！　クラス合唱コンクールの時も結局最後まで歌わなかったし。そうだよねヒデ？」
美月に同意を求められ、将矢から強奪したピリ辛特大春巻きを箸に挟みつつヒデは鷹揚に大きく頷いた。
「あぁ。半端じゃ無い音痴だからな柊兵は。俺もこいつとは長い付き合いだが、今まで柊兵が歌を唄ったところを一度しか見たことがない」

それを聞いたシンが急に興味深々の顔つきになった。また俺をおちょくるネタを探すつもりなのだろう。

「ヒデ、そんなにすごいのかよ、柊兵くんの歌声は？」
「あぁ、正直突き抜けてるな。その様子を上手く説明するのは難しいが……」
「じゃあ、あたしが的確に教えてあげるーっ！！」
焦った様子の怜亜を左手で制し、トマトサラダを食いきった美月が陽気に叫んだ。
「もうね、本当にスゴイよ！？　とにかくね、メロディの中で合っている音程がほぼゼロなの！　どのフレーズにも一個も無い、と言

い切ってもいいくらい！」
「でっでもね美月、そこまで完全に音を外して歌えるのも逆に才能よ！　ねっ、柊ちゃん？」

――　怜亜、お前のそれはフォローしているつもりなのか。

突如ここで甲高い声の大音量が響く。
マイクのボリュームをＯＮにしたままで将矢が俺を茶化してきたのだ。
「だはは～っ！　要は柊兵の唄はジャイアン・ソングってことなんだなぁ～っ！」
……この発言の十五秒後に将矢はこのカラオケボックスの床でまた痙攣するはめになったことは言うまでもない。
そんな将矢を見下ろし、「しっかし本当に要領の悪い奴だなぁ」とシンが小さく呟く。そして痙攣しながらもいまだマイクを離さない将矢の手からそれをさっさと取り上げ、懲りもせずに満面の笑みで再び俺に差し出す。
「なるほどね。道理で今までカラオケ行くか、っていう話になる度に柊兵くんが嫌な顔になっていたのかがようやく分かったよ。俺、是非お前の唄を聴いてみたくなったぜ！　なぁ柊兵くん、今ここで一曲歌ってくれよ？」
「断る」
「そんなこと言わないでさ～」
「断るっ！」
俺の怒号がマイクを通して室内を一瞬の内に駆け巡った。
「ちぇっ、ノリの悪い奴だなぁ。まぁ柊兵くんだからしょうがないか」
つまらなそうな声を上げ、シンはマイクをオフにしテーブルの上に置くと制服のジャケットから煙草を取り出した。
シンが選んだこの部屋は喫煙ルームなので当然のように灰皿も置

いてある。臆病さがその全身に滲み出ている小心者のモヤシ店員は、学生服の俺らが喫煙ルームを選んでも何も言わずに無表情でこの部屋に案内したのだ。
青いライターの火が俺の視界に入った瞬間、それまでソファに深々と身を沈めていた俺はグイと身を乗り出し、煙草を咥えたシンの口から黙ってそれをむしり取る。

「何すんだよ、柊兵！？」

一驚したシンがポカンと口を開けている。
そうだよな、今までお前が煙草を吸っていてもこんな真似をしたことなんて無かったよな。そりゃ驚くだろう。
「……シン、ここで煙草を吸うな」
「何でだよ？」
「空気が悪くなる」
「何だよ急に。お前だってたまに俺と一緒に吸ってるじゃんか？」
「……いいからここでは吸うな。どうしても吸いたかったら外に出て吸ってこい」
俺はそうぶつ切りに言葉を終わらせると握り潰した煙草をゴミ箱に放り投げ、再び不機嫌な顔でソファに深く腰を落とした。

「そうだよシン、柊兵の言う通り！　吸いたかったら外に行って！」

アボガドをフォークに刺したままで美月がソファから立ち上がり、強い口調で俺に同意する。
「あ、そっか、美月ちゃん、煙草の煙ダメなんだ？」
「ううん、あたしじゃない。怜亜なの」
美月は怜亜に目をやる。それは大切な妹を心配する姉のような視線だった。シンの横に座っていたヒデがあぁ、と急に何かを思い出したように声を上げる。

「そうだ、怜亜は喉が弱かったんだったな」
「そうだよ。だから怜亜に煙草の煙とか埃っぽい場所はタブーなの。だからシン、外で吸って」
「ごめんなさい、楠瀬さん……」
申し訳なさそうな視線をシンに向け、済まなそうに怜亜が謝っている。
怜亜、お前やっぱりまだ治っていなかったのか……。
「あ、そういう理由ね。ごめん、気が利かなくて！」
慌てたようにシンは煙草を制服の上着ポケットに突っ込んだ。
「でもさっすが柊兵だね！」
美月が嬉々とした声で俺の右肩を容赦ない力でバシバシと叩く。
「怜亜の喉のことまだちゃんと覚えてたんだ？　あたしより早くシンの煙草に反応してたもんね！」
「ありがと、柊ちゃん……」
俺を見つめる怜亜の愛慕がたっぷりこめられた視線に気付かない振りをして、横を向くとぶっきらぼうに「別に」と呟く。
ここで面目躍如しようと思ったのか、シンが再びマイクを手に立ち上がった。
「よしっ！　じゃあたった今、痺れるようなカッコいいところを見せてくれた柊兵くんに、俺からこのメッセージソングを捧げます！
尚人、先に歌ってもいいか？」
「いいよ、シン」
尚人が配信曲リストを差し出す。しかしシンは「あ、もう決まってるからいい」と断ると、タッチパネル式端末でコードを素早く入力する。
――　数秒後に流れてきた曲は超ド演歌だった。
「皆様、今宵は目一杯楽しんでおられるでしょうか？　本日ここで皆様にある重大な事実をお伝えしたいと思います！」

演歌の前奏部分の間をうまく利用し、シンはわざとらしいほどの高いテンションで即興で考えた前振りを饒舌に語り出す。

「え～、今まで女の話をしていても一切加わろうとせず、俺らの中で唯一女性に苦手意識を持っていた柊兵くんでありますが、この見目麗しい二人の天使が遥か彼方の天空から舞い降りてきてくれたおかげで、とうとう柊兵くんにも遅い春の目覚めが到来したようでございます！　あぁ素晴らしきかな、“　青い春　”　と書いて青春！　ワタクシは柊兵くんのこの性の目覚めを一友人として非常に喜んでおります！　おめでとう、柊兵くん！　本当におめでとう！　ではいよいよ大人の階段を登り始めようとしている柊兵くんに、友であるワタクシ楠瀬慎壱から謹んでこの曲を贈らせていただきます！　そう曲はもちろん、『　所詮（しょせん）この世は男と女　』！！　ではごゆっくりとご堪能下さい！」

そしてシンは朗々とド演歌を歌いだした。……中の歌詞を俺をからかう単語すべてに置き換えてな。

一体幾つ出ただろう。

陰鬱助平（ムッツリスケベ）、　童貞野郎（チェリーボーイ）、　乳星人（バストマニア）、　尻偏愛（ヒップフェチ）、　白衣執心（ナースフェチ）……等、一度もつっかえる事なく流暢に歌う完璧なその替え歌に、男共は拍手喝采の嵐、抱腹絶倒の渦。

一方、美月と怜亜は呆然と頬を赤らめて俺とシンの顔を交互に見ている。

……シン、お前は帰り際に絶対殺す。

……

所詮この世は男と女　【後編】

「あ～面白かった～！　特にシンのあの演歌は凄かったよね！　あたし食べていたアボガド噴き出しちゃったもん！」
「柊ちゃんのお友達って楽しい人ばかりよねっ」
薄暗くなってきた秋の夕暮れ空の下、俺は黙々と早足で歩く。
両腕には必死にしがみつくこいつらの重力がしっかりとかかっているが、この重さに微妙に両腕が慣れてきているのが小癪に障っていた。

「でもさっ、柊兵って童貞少年（チェリーボーイ）だったんだね！！」

……こめかみに青筋が立ったのが分かる。畜生っ、シンの野郎、明日は必ずぶっ飛ばす！
二時間後にいざ解散となるや否や、いつもの危険回避本能を遺憾なく発揮したあの優男は逃げるように一番最初に夕闇の中に消えていきやがった。
ヒデ、尚人、将矢は美月と怜亜に気を使ってさっさと三人で帰っちまい、残った俺はこいつらを無事に家に送る役目を押し付けられる羽目となる。
非常にムカつくが、この辺りは歓楽街も近いためあまり治安のいい場所ではない。こいつら二人をここにほっぽり出して一人で帰るほど俺も人でなしでは無いので、やむなくこいつらを家まで送ることにする。
「でも良かったよね、怜亜！　柊兵が他の女の人とまだエッチ経験無くてさ！」
おい、まだその話題を引きずってるのか、美月！？　こんな場所でそんなデカい声を張り上げてはしたねぇことを叫ぶんじゃねぇ！

しかも怜亜！　お前も頬を赤らめてこくこく頷いてんじゃねぇっての！
「えぇ本当に良かったわ！　柊ちゃんが他の女の人のものになってなくてっ」
うあああぁぁ！　確かにこいつらの言ってる事は合っている！
合っているんだがいたたまれない！
「う、うっせぇな！　お前ら、シンの言ったでたらめを勝手に鵜呑みにすんなっ！」
……ばっ馬鹿か、俺！　思わず強がっちまった！　で、でも仕方ねぇだろ、男から見栄と誇りを取ったら一体何が残るって言うんだ！？
しかしこの一世一代の強がりはこいつらにとって効果覿面だったようだ。両脇の幼馴染たちは途端に顔を曇らせ、それぞれ俺の腕から手を離す。
「じゃ、柊ちゃんは他の女の人とエッチしたことがあるのね……」
「そっかー……、柊兵はやっぱり経験あるんだー……」
く……っ……！
怜亜の寂しそうな横顔に良心がキリキリと痛む。その物憂げな儚い表情に心臓が急激に激しく高鳴り出した。
美月も同じような顔で細く吐息を吐いている。普段爆弾みたいにうるせぇ女が急にしおらしい面を見せてきやがると、それはかなりの威力で男心の鐘をぶち鳴らすことを俺は今初めて知った。
……どうする？　こいつらに今のは嘘だってバラしちまおうか……。
悩む俺の左横で怜亜がフイと顔を上げ、キッパリとした口調で言う。

「でも美月。もう済んじゃっている過去の事を気にしてもしょうがないわ。それにそんなことをいつまでも気にしていたら柊ちゃんに嫌われちゃうもの」
「……そうだね！　これから柊兵にそういう女が近づかないようにすればいいだけの話だもんね！」

……おい、立ち直り早いな、お前達……。

「そうよ美月。大事なのはこれからのことだもの。だからこの先もし柊ちゃんに近づく女の人が現れたらその時は……ねっ」
「そうそう！　前に決めたように二人で完膚なきまでに目一杯叩き潰しちゃおうねっ！！」

……しかも恐ろしいな、お前達……。正直少々鳥肌が立っているんだが。

「しゅーちゃん♪」
「しゅーへい♪」

目一杯の甘ったるい声で美月と怜亜が再び抱きついてくる。俺は小さくため息をつくと歩くスピードを少しだけ落とした。
道なりに立ち並ぶオレンジ色の外灯にぽつぽつと暖かな光が灯り始めている。
橙色に照らされた美月と怜亜の楽しそうな顔を視界の隅にそれぞれ収め、ついに意を決してボソリと尋ねてみることにした。
「……なぁ、お前らがこっちに戻ってきてからずっと聞きたかったんだけどよ……」
「なに？　柊兵」
「なぁに？　柊ちゃん」
「……俺とお前らは小学校を卒業してから今まで一度も会ってもい

ないし、特に連絡も取ってなかっただろ？　それなのに久々に会ったばかりでなんでいきなり俺のことが好きになるんだよ？」
急に右腕に力強い重力がかかった。
「いきなりじゃないよ、柊兵！」
そして今度は左腕だ。
「そうよ柊ちゃん！　私たちはずっとずっと柊ちゃんのことが好きだったの。その気持ちが今まで変わらなかっただけ。それだけよ」
「……」
その答えに俺は黙り込んだ。
……ということは何か？
こいつらは小学生の頃から俺が好きで、引越しで離れても俺のことがずっと好きなままで、ここに戻って来てもまだ好きだ、ということか。マジかよ……。

・――――・――――・――――・――――・――――・――――・――――・――――・

わずか数度の狂いも無いくらいにきっちりと真正面に顔を向けたが、それでも両横の女二人の頭は嫌でも視界に入ってきちまう。
美月の長い髪が斜め前から吹いてくる風に流されて右肩にかけているスポーツバッグに何度も当たり、沈みかけた夕日の色を吸った怜亜の短い髪が小さな頭のてっぺんで丸い光の輪を作っていた。
「柊兵、あたしと怜亜はね、小学生の頃、二人とも柊兵のことが好

きだったんだよ。でもお互いの事を気にかけて告白できなかったんだ」
「ここを引っ越すことになって、新しい街に行った後、美月とよく柊ちゃんの話をしたわ。そして柊ちゃんに対してお互いに遠慮していたこともそこで初めて知ったの」

俺が急に黙り込んだせいなのか、こいつらは更に詳しく自分達の気持ちを語り出してきた。

「で、あたし達はその時決めたんだ。お父さん達の転勤期間は四年って聞いていたから、またこの街に戻って来て、その時になっても柊兵への想いが変わっていなかったら今度はちゃんと告白しようねって。あ、それとあたし達ね、引っ越しても時々ヒデとは連絡取ってたんだよ？」
「何ぃっ！？」

――　ヒデの奴、俺にそんなこと一度も言ったこと無かったぞ？

「ヒデちゃんから中学や高校の柊ちゃんの様子を時々聞いていたの。高校に入って今は楠瀬さん達と仲良くしていることも事前に教えてくれていたから、私たち、あの人達ともすぐに打ち解けられたものね」
「あたしなんて初対面でいきなりあの三人を下の名前で呼び出したから、シンとか最初驚いてたよね！」

……なんてこった。しかしヒデの奴、なんで俺に黙ってたんだ？

「柊ちゃん、私たち、銀杏高校に編入してすぐに柊ちゃんに会いに行ったでしょ？　あの時、教室の一番後ろで窓の外を退屈そうに見ていた柊ちゃんの横顔を見て、柊ちゃんへの気持ちが全然変わって

いないことを確信したのよ」
「そう、怜亜の言う通りっ！」
ここで両腕に今までで最高の重力がかかる。さすがに重い。
「……だ、だからってよ、なんでそこで“　二人同時に彼女にしてくれ”　なんてクレイジーな思考に辿り着けるんだよ？」
「だぁって、あたしと怜亜は親友だもん！！」
「今まで何でも半分こにしてきたからっ」

……出たな、≪半分こ≫。
俺には恐怖の鍵言葉（キーワード）だ。

「だ、だからよ、どう考えてもおかしいだろそれは。大体な、二股かけて付き合ったとしたって、それが未来永劫続けることができる関係だと思ってんのか？」

――　理路整然と鋭い所を衝けたな。
そう思ったのだが、すぐにこいつらの思考の方が遥かにぶっ飛んでいることを嫌というほど俺は思い知らされる。

「そう！　その点があたし達もネックだったのよ！　だから考えたんだっ、いい解決策を！　ねーっ怜亜！」
「えぇ！」
「な、なにをだよ？」
……なんだ？　すげぇ、すげぇ、嫌な予感がする……。
「あのね！　あたし達のどっちかが将来政治家になってね、この日本に『一夫二婦制』を導入するんだ！！」
「フフッ、そうなったら素敵よね。何も問題は無くなるもの」

――　おいおいおいおい！　待て待て待て待て！
こいつら、完全に着眼点がずれてるって……！

「お、お前ら、頭大丈夫か……？」
「少なくとも柊兵よりは頭いいと思うけど？」
「そんなにおかしい？　柊ちゃん」
「政治家になって一夫一婦制を一夫二婦制に変えるだと？」
「あ、逆もだよ？　女の人が二人のダンナさんを持ってもＯＫバージョンの『一婦二夫制』もね！」
「そうね、やっぱり男女平等じゃなくっちゃね」

ヤバい、こいつらについていけねぇ……！　頭を抱えようとしたが、両脇にこいつらがぶら下がっているのでそれすらも叶わない。

「へへ～、それならすべて解決する問題でしょ？」
「でもその法令成立はまだ時間がかかるから後回しにして、先に二人一緒に柊ちゃんの彼女にしてほしいの。私たちの望みは今はそれだけよ。だから私たちにしておいて！　ねっ、柊ちゃんっ」
「そうそう！　おとなしくあたし達にしときなさいって！」

――　脳内でくわんくわんと梵鐘がわんないているようなエコー音が断続的に響いている。
脳が震え、思考能力完全に停止。こいつらの頭ん中　完全に沸いてんじゃねぇのか？

……なぁミミ・影浦、あんたなら一体この場でどう言えば上手く事が収まるか分かるか？
とりあえず明日のおたふく占いは運命のＢＧＭが流れてくれることを、頭上に瞬き出した宵の明星に向けて俺は痛切に願った。

未来を見通す“　稚い淑女”　<1>

最近の俺は考え込むことが多くなった。悩みがあるとこんなにも気が重くなるものなのか。
とんでもねぇ思考回路を持つ、押しかけ女房気取りの幼馴染二名に十一日前から振り回され続け、ここしばらく精神力のチャージメーターは【RED（ゼロ）】が点灯し続けている。予備のバッテリーなどあるはずも無いのですでに極限状態だ。

今朝のおたふく占いは、昨夜願をかけたあの一番星がいい仕事をしてくれたのか、待ち望んでいた運命のBGMが流れた。これで今日一日の俺の身の安全は保障されたようなもんか。
だがもし今日あいつらがまた俺に特攻をかけてきたら、占いは俺が気付いた九日目にしてとうとう外れることになる。こんなもんを気にしている自分に腹立たしさを感じているので、外れて欲しい気持ちもあった。

――　今の俺はどっちの運命を望んでいるんだ？
今日の占いが当たるようにか？
それとも外れるようにか？
分かんねぇ……。

「柊兵、今日は元気ないね」
尚人が俺の顔を覗き込む。
「疲れてんだろ、色々と」
お前が言うか、シン！？
「……シン、昨日はあの下らない歌で散々俺を馬鹿にしてくれたな。後で校舎裏に来い。今度は逃がさねぇぞ」

「おー、怖い怖い」
またしても大袈裟に肩を竦めやがって。“　怖い　”　と言いつつその声の八割は笑い声が含まれていやがる。
「柊兵くんのお仕置きは本気で天国に行っちゃいそうなんで遠慮しておくよ」
「お前に断る権利は無い」
「ふーん……。じゃあいいよ、俺これからますます美月ちゃんと怜亜ちゃんのために粉骨砕身しちゃうぜ？」
ウッと言葉に詰まる。
シンの暗躍がこれ以上激化したら本気で自分の身がどうなるか分からん。
「この間は自然に柊兵くんが眠ってくれるように場を作ったけどさ、今度は強制的におねんねしてもらって、そのままホテルにでも放りこんじゃおうかなぁ？　介抱はもちろんあの天使達にお任せして」
「お、お前の力で俺に勝てると思ってんのかよ！？」
「チッチッ、野蛮な柊兵くんはなんでも力で解決できると思っているから性質（タチ）が悪い。強制的、って言っても別に腕力だけじゃないじゃん？　方法はいくらでもあるさ、例えば飲み物にこっそり眠り薬を入れてそれを柊兵くんに飲ませちゃうとか」

……こいつならマジでやりかねん。
うっとおしい長髪を掻きあげ、目の前で悪魔の微笑みを浮かべるシンを腹立たしげに睨みつける事しか俺に残された選択肢は無かった。

「でもさ、安心しろよ。あの子達も“　皆にばかり頼っていられない　”　って昨日言ってたし、後は自分達で何とかするんじゃないの？　だからこれからは傍観者で行くつもりだぜ、柊兵くんが俺に乱暴しなければさ。……あーあ、しかし羨ましいねぇ。俺も真実の愛が欲しいよ」

畜生……、どうやら今回もシンも見逃すしかないようだ。
それよりも今シンが言った、「後は自分達で何とかする」と言ったあいつらの言葉がずっしりと脳内に居座り始めたせいでまた気分が重くなった。
そんな憂鬱な俺の鼓膜に、何の前触れも無くある名前が飛び込んでくる。

「ねぇ、今日ミミ・影浦が来るの何時からだったっけ？」

――　何ッ！？
クラス内のどこかから聞こえてきたその声に俺はガバッと顔を上げた。
教室内をぐるりと見渡すと、入り口付近で四、五人の女共が顔を寄せ合い、何かを見て騒いでいる。
「んっと、三時だって！」
「え～！　じゃあ学校終わってから行ったら間に合わないんじゃない？」
「でもほら、占いは三時から四時半までって書いてあるよ！　だからHR終わってからソッコーで走れば間に合うって！」

――　その後の俺の行動はほぼ無意識に、そして本能的に行われたものだった。

「おい、どこに行くんだ柊兵？」
椅子から立ち上がった俺にシンが声をかけてきたが、返事をせずに一枚のチラシを見て嬌声を上げている女共の側に近寄った。
「は……原田……くん……？」
女共が一様に俺を見上げて怯えた顔をしている。クラスの女と会

話などほとんどしたことの無い俺が急に無言で近寄って来て、険しい顔で見下ろしたのでビビっているらしい。
「ちょっとそれ見せてくれ」
机の上にあったチラシを勝手に取り上げた。蛍光ピンクの縁取り文字が目に突き刺さる。

『あの【モーニング・スクランブル】の星占いで大人気のミミ・影浦さんが、このエスタ・ビルであなたの恋愛運を占ってくれます！』

ミミ・影浦がここに来るのか……。
「は、原田くんも占いに興味があるの……？」
女共の一人がためらいがちに問い掛けてきた。ハッと自分を取り戻す。
「あっ、あるわけねぇだろ！」
そうぶっきらぼうに言い捨てると唖然とする女共の中心にチラシを乱暴に投げ捨て、足音荒く再び席に戻った。
「……なぁ今の見たか？　挙動不審もいいとこだぜ？　なんかかなりヤバ気じゃないか、今日の柊兵くん」
「もしかしたら昨日解散した後、あの娘達に何かされたのかもね」
「なぁ尚人、それってどんなことだよ？　俺、なんだかわくわくしてきた！」
「気持ちは分かるが今は聞けないぞ将矢。間違いなく殺される。長年ダチをやってる俺が保証する」
会話は丸聞こえだが今は怒鳴る気力も起こらない。俺の後ろでこそこそと話し続けているシン達を無視し、どんよりと厚い雲が覆われている空を投げやりに眺める。

――そして美月と怜亜はこの日、俺の前に姿を現さなかった。

・――――・――――・――――・――――・――――・――――・

……何をやってるんだろう、俺は。

壁際に置かれたヨーロピアン調の洒落た白いベンチに深く腰掛け、目の前に広がる光景を見ながらそう自問自答する。

ここはエスタ・ビルの七階だ。

このビルはファッション関連のテナントが主に軒を連ねていて、女が好んでよく来る場所らしい。クラスの女共のやかましい嬌声の中でよく名前が上がっている。

俺が現在いるこの七階はファンシーショップが中心のフロアのようだ。

あちこちの店に大小様々の人形が乱雑に並ぶ中、あのおたふく天使のヌイグルミを見つけてまた胸糞が悪くなった。しかし何度見ても不細工極まりない奴だ。

こうして各店舗ごとにパステル調のふわふわした妙ちくりんなグッズやら飾りやらを無秩序にディスプレイしている光景を眺めていると、色とりどりのドロップやゼリービーンズをこの空間一帯に豪快にぶち撒けているような錯覚すら起きてくる。

――　そんなパステルワールドの中に真っ黒な異端物が紛れ込んでいた。

数十メートル先にある何やら怪しげな黒いミニチュアテントがそれだ。

両脇のテナントが普段そこに商品を展示しているはずのスペースを強引に撤去させ、無理矢理設営したと思われるそのテントは少々肩身が狭そうにひっそりと佇んでいる。例えるなら、きらびやかなパーティ会場の派手なドレスの女達の中に、喪服の女がポツンと一人混じっているようなものだ。

テントの右前には手製の看板が置かれてある。

たぶんこのビルの関係者が急いで作ったものなのだろう、分厚いダンボール地に赤の極太サインペンで、『↑ミミ・影浦さんの愛の星占い会場はここです！』と手書きで書かれてある。

時間が無かったのかどうか知らないが、それにしてももうちょいマシな看板を作ってやれなかったのか。

黒テントをしげしげと眺める。

占いが終わる四時半過ぎに合わせてここに寄ってみたのだが、予想以上にミミ・影浦は人気のようだ。まだテント前には数人の女が列を作り、自分の未来を占ってもらおうと従順に待機している。

現在、このフロアにいる人間のほとんどが若い女だ。おかげで学生服姿でベンチに座っている俺は一際浮いて見える。しかし女達は俺を不審人物扱いにはせず、逆に同情するような目でこちらをチラッと一瞥していく。恐らく占い好きな女に学校帰りに無理矢理拉致され、そいつの占いが終わるまで手持ち無沙汰で待っている、哀れな男に見えているのだろう。

畜生、誰がそんな格好悪い真似をするかよ。

だが不審人物に見られるよりはマシなので、人待ち顔で多少の演

技はしておくことにする。

――　さらに三十分が経った。

最後の迷える子羊がようやくテントから出てくる。

自分が進むべき羅針盤の針が指し示す方向を教示してもらったらしい。晴れ渡った顔で出てきたそのラストの子羊は、今にもスキップしそうなほどの軽い足取りで下りエスカレーターの方角に消えていった。

その直後、テントの側にヒマそうに突っ立っていた従業員が動き出す。

そいつがすぐ奥の従業員通用口を開けて「終了っ」と小さく叫ぶと、たちまち中からわらわらと大勢の男の従業員が出てきて、テントの解体を始めた。

中から運び出される数脚の椅子、丸テーブル、照明スタンド、何本もの鉄パイプ、そして黒い布。瞬く間に黒テントはそこから姿を消した。

そしてそのテントのあった場所に代わりに現れた一人の女に目が釘付けになる。

……こいつがミミ・影浦か？

予想とはだいぶ違った。

俺のミミ・影浦の予想パターンは二通りあった。

まず、一つ目は妖艶な美女。

年齢は二十五歳前後。ボディスタイルも完璧な、色香で男を垂らしこむのが得意そうな感じの女。

もう一つ考えていたパターンが老婆。

年齢は六十を軽く超えていてあと数年で本物の魔女に等級変化（クラスチェンジ）しそうな容姿の婆さん。

しかしミミ・影浦と思われる人物はこのどちらでも無かった。かすりもしていない。

一言でいうとフランス人形と日本人形を足して二で割ったみたいな女だった。

手も足も異様に小さく、もちろん背も低い。百五十センチあるかないかぐらいだろう。中学生ぐらいか？

金髪に近い色の髪全体に幾つも大きな巻き毛を作っているので頭が大きく見える。だがそれに反比例して顔は小顔なのでますます人形っぽい。ここまではフランス人形だ。

どこが日本人形なのかというと顔の作りだ。

顔は純和風的で切れ長の目で、鼻筋は通っているがどちらかというと低め。

西洋と和風をミックスさせようとしたがどこかちぐはぐ、そんな印象だった。

しかしこの女の場合はそれがミステリアスでどこか人を惹きつけてやまない雰囲気を作り出すのに一役買っている。占いなんて職業を生業にしているのだからさぞかし都合がいいことだろうな、と頭の片隅で考えた。

その時だ。

黒のローブを肩からすっぽりとかぶった、多分ミミ・影浦と思われるその女は俺の方を一瞬見た。

目が合った。

逸らせなかった。

しばらく見つめ合った。

向こうが笑った。

何かを呟いた。
読唇術をマスターしているわけでもないのに向こうが何て言ったのかが分かった。

「あなた、背中を押してほしいのね」

この小さくて奇妙な女は確かにそう言った。そう言いやがったんだ。

未来を見通す“　稚い淑女”　＜2＞

……何をしているんだろう、俺は。
ついさっきも同じようなことを言ったような気がする。
場所は変わってここはエスタビルの七階から八階へと続く階段の踊り場だ。屋上扉は施錠されているようだし、この階段は従業員専用なので今のところ周囲には誰もいない。

――　俺とミミ・影浦らしき女以外は。

「久しぶりだったわ！　あれだけ無遠慮に男の子からジロジロ見られたのって！」
女の声の表現法の一つに“　鈴を転がすような”　というのがあるが、こいつの声はまさにそれだった。聞いていると心臓の裏側を軽く撫でられているような、妙なこそばゆさを感じる。
年齢はたぶん俺より年下だろう。なのになぜか目上を気取った口調にカチンとくる。

先ほど占いを終えたこの女は七階のフロアで俺に向かって妙なことを呟いた後、側にツツッと近寄って来た。そして強引に手を取り、「ちょっとこっちへ来て」と言うと俺の承諾も得ずにこの踊り場まで半ば強引に引っ張ってきたのだ。
こんなチビっ子にこれ以上舐められるわけにはいかない。不機嫌さを露にした声で牽制する。
「あんたさ、なんで俺をこんな所に連れ込んだんだ？」
「連れ込んだ？　嫌な言い方ね」
そう言いつつもチビ女は楽しそうに笑う。細い首にかけていた大小様々なペンダントがその笑い声に合わせてしゃらしゃらと軽快な

音を立てた。
「だってあなた、私に会いに来たんでしょ？」
「だ、誰がだ！」
「嘘をつかないでっ。目を見れば分かるんだからっ」
意志の強そうな切れ長の目が俺を射抜く。その強烈な炯眼で思考を勝手に見透されそうな気がして、わずかだが身を引いちまった。
「本当はもう今日の占いは終わりなんだけど、特別に見てあげるわ。あなたが今日最後のお客様よ」
「いらねぇよ！」
「どうして？　あなた悩みがあるんでしょ？」
「無い！」
「じゃあどうしてあのベンチから私の事をずっと見ていたの？」
「そ、それは……」
下から問い掛けてくる涼やかな声に上手く返せる答えが思いつかなかった。

……俺は何をしに、ここに来たんだろう？

「……ふぅん、なんだか最後に大物さんが来たようね。ちょっと待っててくれる？」
チビ女は俺の返事を待たず、下の階に下りて行ってしまった。七階の従業員通用口の扉が開いた音がしたかと思うと、またすぐに閉じられた音が鳴る。
やがて、よいしょ、よいしょ、という声が一段下から聞こえてきた。
踊り場の手摺から下を覗いてみると、折り畳んだパイプチェアと商売道具が入っているらしい大きな黒鞄を抱えてチビ女がよろよろとふらつきながら昇ってくる。何やってんだ、あいつ。

やがて俺が上から身を乗り出して自分の様子を見ていることに気付いたチビ女は、階段の途中で足を止めてパイプチェアーを差し出した。
「ねっ、これをそこまで持って行ってちょうだい！　あなた、レディにこんな重い物二つも持たせて平気なの？」
冗談じゃねぇ、なんで俺がそんなことをしなきゃなんないんだ。その椅子はあんたが勝手に持ってきたもんじゃねぇか。そう思ってそっぽを向いた瞬間、

「ほらぁーっ！　早くしなさぁーいっ！！」

「ぐわっ！」
慌てて両耳を押さえた。
場所が場所だけにデカい声を出すとそれが大きく反響しやがる。こいつの声があまりにやかましいので仕方なく要求通りに椅子を踊り場にまで運んでやった。すると早速チビ女は屋上に続く階段の方角に向けてパイプチェアーを広げる。
「はい、じゃあなたはそこに座ってね！」
「なんで俺がここに座らなくちゃいけないんだよ」
「だって立って話してたら話しづらいでしょ？　あなたと私はこんなに背が違うんだから。だからこうやってずっと上を見て話していると首が疲れるの。分かる？　あなたも男の子ならもう少し女性に気を使うべきね」
「……なぁ、俺に何の用なんだ？」
「え？　あなたが私に用があるんでしょ？　占って欲しいんでしょ？」
「だからさっきも言ったろ？　あんたに占って欲しいことなんて無……」
「あぁ、もういいわっ！　まずはとにかく座りなさあああぁーいっ！　首が疲れるのおおおぉーっ！」

「うぉ！？」
またしてもこの空間に鼓膜直撃の破壊音がガンガンと響き、俺は顔をしかめた。
次の雄叫び口撃に備えてまたこいつが小さな口を目一杯開けかけたので、忌々しいが渋々パイプチェアーに腰を落とす。
「そうそう、それでいいの！」
座った俺を見届け、チビ女は屋上に続く三段目の階段に座る。しかしまだ俺との目線がいい位置に来なかったのか、慌ててもう一段上に上がった。少し上から俺を見下ろす位置に座り、やっと満足そうな顔を見せる。
「さぁ、まずあなたの名前は？」
「だから、占って欲しくないって言ってるだろ」
「……」
いつまでも頑なに占いを拒み続ける俺に、チビ女は少し気難しそうな顔になってとうとう黙り込んだ。明らかに気分を害しているその顔を見て、自分があまりにも冷たい態度を取りすぎていることに気付き、少しだけ後悔の念が起こる。

「……あんた、ミミ・影浦？」

勝手に決め付けていたが、そういえばこの小さな女がミミ・影浦かどうか確かめて無いことに気付く。こんなにちびっこいし、もしかしたら助手とか弟子の可能性もある。
すると階段に座っていた女は口を尖らせたままで頷いた。やはりこいつがミミ・影浦で間違いないようだ。予想と全然違ったな。
「俺は原田柊兵。……言っておくが占って欲しいわけじゃないぞ？ただ、こっちだけ名を言わないのも礼に失すると思ったから名乗っただけのことだからな」
「ふぅーん。はらだ、しゅーへい君かぁ……」

君付けで呼ばれてムカついたがグッと堪える。さん付けで呼べよ。

「ねぇどうして占って欲しくないの？　私の占い、インチキだと思ってる？」

一段上の場所からミミが俺の方にグイ、と身をかがめてくる。お互いの鼻の頭が今にもぶつかりそうになったので慌てて後ろにのけぞった。

「あら、もしかして照れちゃってるの？　キミ、今時の男の子にしては珍しくシャイなのねっ」

ミミはクスリと笑うとそのちっこい手で俺の鼻をツン、とつついた。

途端に心臓をガツンと一発殴られたかのような衝撃。

……何っ！？　鼓動が早まってきてるだと！？　たっ、確かに女とはいえ、なんでこんなチビっ子に……。

動揺を必死に押し隠す。

と、とりあえずこいつに何か言わねぇと……。でも何を言えばいいんだ？

“　占いはまったく信じてねぇけどあんたの星占いはなぜか恐ろしいくらいによく当たって、正直かなりビビッている所なんだ　”

……とでも言えばいいのか？

そんなみっともねぇ事、口が裂けても言うわけにはいかない。考えあぐねている内にミミがまた口を開く。

「だってあなた、私が占った女の子達の付き添いで来ていた訳でもなさそうだし、どうしてあのベンチから私の事を熱い眼差しでじっと見ていたの？　……あ、そっか！　もしかして私のファン？」

「違う！」

どうでもいいが論理が飛躍する女だ。
「それもそうよね……。私、メディアにまだちゃんと顔を出したことないし……」

――　訪れる沈黙。

何か言わないと帰るにも帰れなさそうな雰囲気に、仕方なく話題を振る。
「……あのさ、『　モーニング・スクランブル　』　のあんたの星占いって、的中率は高いのか？」
「エ？」
切れ長の目を瞬き、ミミは唐突に不機嫌な顔を止めた。
「そうね、なんて説明すればいいかしら……。あの占いは万人向けの占い、プレタポルテなの」
「な、何？」
ヤバい、こいつの言っている意味がいきなり分からん。
だがそれは俺の反応を見たミミにも伝わったようだ。ミミは少し考える素振りを見せた後、俺が理解し易いよう、優しく噛み砕くように詳しく説明を始める。
「つまりね、あれは多くの人に当てはまるように作られた占いなの。ただの吉凶判断で、服で言えば高級な既製服。だからその日、その日であつらえた既製服はたくさんの人が身に着けることができるけど、既製服故に日によってはどうしてもそれが身に着けられない人もいるわ。だから占いが当たる日もあれば当たらない日もあるでしょ？　でももちろん私があつらえている服が毎日のようにとてもよく似合う人も中にはいるのでしょうけどね」
ミミは一段上の場所から笑った。
切れ長の目のせいで冷たい印象を与える顔が、一瞬和らいで見える。

「でもね、既製服だけじゃなくて特別にあつらえた高級注文服もあるのよ？　いわゆるオートクチュールね。それが個人的十二宮図（パーソナルホロスコープ）。これはその人の運勢だけを占う、独創的（オリジナル）な占いよ」
「オリジナル？」
「そう。ねぇ柊兵君、この世の中には何十億っていう人々が存在しているでしょ？」
「あぁ」
「でもそれだけの数の人間がこの地球上に存在していたとしても、柊兵くんも私も、その何十億分の一の中でちゃんと独立した一個の生命体だわ。だから柊兵くんの運命も、私の運命も、それぞれ違ったものでなくてはならないの」
　優しく教えてもらっているのに早速混乱してきた。
……要は『モーニング・スクランブル』のおたふく占いは万人向けの占いだから信憑性はイマイチだと言うことが言いたいらしい。少々乱暴な解釈かもしれないが内容は概ね合っているはずだ。
「だからね、柊兵くん個人のもっと詳しい未来を占うには出生天宮図（バースチャート）を作成しなくちゃいけないの。これを作るには柊兵くんの生年月日、出生時刻、出生地のデータが必要なのよ。柊兵くん、今それが分かる？」
「だっ、だから、いいって！　占ってくれなくても！」
「あなたの悩みは何？」
「悩みも無い！」
「嘘っ！」
　ミミはまた先ほどと同じ炯眼をまた容赦なく俺に浴びせる。
「最初にあなたの顔を見た時、すぐに思ったわ。あぁ、この人何か悩みがある。それを私に取り払って欲しがってるって。あの朝の占

いを気にしているってことはもしかして恋愛絡みの悩み？」
「あのなぁ……」
「いいから最後まで言わせてっ！」
ミミは鋭く言い放った。こんなちびっこい女なのになぜか言い返せない。
“　歯向かう敵の気力を一瞬で無効化しちまう強者のオーラ　”
というものがあるのだとすれば、こいつは間違いなくそれを持っている。
「柊兵くんが占って欲しくない、って言うならもう無理には言わない。その代わり教えてよ。じゃあ占っても欲しくないし、私に興味があるわけでもないのに、どうしてあなたはあそこにいたの？」
「そ、それは……」

どもり、黙り込んだ俺をミミも同じく黙って見つめる。
またしばらく続く沈黙。
……しゃあねぇな……。
根負けした俺は意を決して本音をぶちまけることにした。

「……あ、あのさ、気を悪くしないでほしいんだけどよ」
「うん」
「俺から見るとさ、占いなんてやつはどうにでも解釈できるようなあやふやで不確かな言葉で適当なことを言って、ただ相手を煙に巻いているようにしか見えないんだよな。占いなんて胡散臭いもんの代名詞だと思ってんだ」
ミミは不思議そうな顔でおとなしく聞いている。
「だけど、あのあんたの星占いがさ、毎日すげぇ当たり続けてるんだよ。今日で九日目……、いや途中で土日を挟んでいるから正確には七日間、ピタリと当たってんだよ。で、たまたまあんたが今日このビルに来るって知って、なんだその、ちょっとあんたがどんな占い師か見てやろうかって野次馬根性が出たんだと思う」

的中し続けるこいつの占いにビビッていることはもちろん伏せておく。当然のプライドだ。
ミミは納得したようなしてないような微妙な顔で膝の上で頬杖をつき、しばらく俺の顔を穴の開くほどじっと見つめていた。　そしてようやくおもむろに口を開いたかと思うと、

「あなた、可愛いわねっ！　私のタイプかもっ！」

とまた鼻をチョンと軽く突つかれた。
な、なんだとっ！？
一瞬絶句した後、本気で頭に血が昇り出す。
年下のくせに男に向かって“　可愛い　”　だーぁ！？
ちっくしょう、いくら占い師だからってもう許せねぇっ！
ミミに向かって一発怒鳴りつけてやろうとした時、この摩訶不思議な空気を持つ女は転がる鈴の声で一言、俺に向かってこう言った。

「ねぇ柊兵くん、私と付き合ってみる？」

未来を見通す“　稚い淑女”　＜3＞

両頬をモミジみたいなちっこい手が挟み込み、顔を強引に上向きにさせられた。

「柊兵くん、もっとよく顔見せて！」

うぉっ、さっきよりも顔が近いっ！

興味津々のこいつの瞳孔がわずかに開いたのまで肉眼で確認できちまうぐらいの距離だ。

……しかしつくづく自分が情けない。なぜなら現在の心拍数がすでに平常時の倍になっているからだ。いくら女が苦手だからとはいえ、こんなちびっ子すらも駄目だったとは……。立ち直れないくらいのショックに打ちのめされる。

「うふふっ、そんなに緊張した顔しないでよ！」

引きつっている俺の顔を見て、ミミは心底おかしそうにケラケラと笑った。

「今のはジョーダンよ、ジョーダン！　あなた可愛いからちょっとからかってみちゃったっ！　ねぇねぇ、もしかして柊兵くんって女の子にあまり慣れてないの？」

「うっ、うるせぇ！　余計な世話だ！」

怒鳴りはしたが、今のが冗談だったことに本気で安堵する。

「よしっ、じゃあ本題に入りましょ！　柊兵くんの話はよく分かったわ。でもあの占いは所詮はプレタポルテだしね。世の中には偶然も多いし、たまたま連続してピッタリ当たっちゃっただけじゃない？　明日はきっと外れるわよ」

「おい、占い師が“　明日はきっと外れる　”　なんて言っていいのかよ？」
「えぇ！」
　遥か下の階で扉の開閉音が聞こえ、それによって発生した突風が階下から吹き上げてくる。その風が金の巻き毛を大きく波打たせる中、ミミは悠然とした態度で首を縦に振った。
「だって占いって決して絶対的なものじゃないもの。それに現実ってたった一つのものじゃなくて、見る角度を変えれば幾通りもあるものでしょ？　だから詳しく柊兵くん個人の運命を知るためには出生天宮図（バースチャート）を作らなくっちゃ。生年月日と出生地は分かってるだろうけど、出生時刻を知ってる？」
「んなもん知らねぇよ」
「やっぱり普通はそんなこと知らないわよね。母子手帳にはちゃんと記載されていると思うけど、今自分の母子手帳なんて持ってないでしょ？」
「持ってるわけねぇだろうが」
「そうよねぇ……。出生時刻が分からなくても一応作る事は出来るんだけど、正確なチャートに比べるとハウス解釈の精度は格段に落ちちゃうし……」
　ミミは困り顔で小さなため息をつく。
「ねぇ柊兵くん、ちなみにお誕生日はいつ？」
「……十月十九日」
「ふーん。じゃあ天秤座（ライブラ）ね」
「ライブラ？」
「天秤座の学名よ。リブラとも言うわ。……うん、柊兵くんは結構ストレートに特徴が出ているかも」
「どういう意味だよ？」
「あのね、＜サインの法則＞っていうのがあってね、この世に生まれ落ちた時に太陽がどの星座にいたのかでその人の性格や運命って決定するの」

ミミの背筋がさらに一層伸びた。
コホン、と軽く咳払いをし、この小さな占い師は長々と余計な講釈を勝手に垂れ始める。

「天秤座の性格はね、天秤という名の通り、元々バランスと社交性に優れていて、理性と感情の間に上手に均衡を取るの。だからたくさんの人との関わりを通して生きていく星座。多くの人間関係を通じて人生が発展してゆく星座。でも人の好き嫌いは十二星座中、一番ね。クールな面と強さを持つけど、意外とケンカっ早い所もあるわ。あっ、でも争いごとは幸運を遠ざけちゃうから気をつけてね。そして欠点は、虚栄心が強くって、八方美人で、ナマケ癖があること。それと十二星座中、最も美しいものを与えられていると言われているから整った顔立ちの人が多いのも特徴よ」

ミミは俺の顔を再びまじまじと見た。

「ほーら、やっぱり結構当たってそう！　あなた、目つきはあまり良くないけど顔立ちは整っているし、とても綺麗な目をしているわ。この星座の人の身長は概して高くって、若い時は痩せ型でスマートな人が多いし。明朗で快活なタイプが多いんだけど、でもそこはちょっと違ってそうね……。そうそう、この星座の人ってエクボを持っている人も多いわ。柊兵くんある？　ちょっと笑ってみてよ！」
「死んでもごめんだ」
「ケチねぇ……。あ、、それと悩みの原因の女の子って何座？」
「知らん」
「えっ、好きな女の子の星座知らないの？　冷たいのねー。……
…あっ、そうか！　じゃあ柊兵くんはもしかして逆に迷惑してるとか？　その女の子に？」

返答に詰まる。

「……あ、あぁ……」

たっぷり間を置いてから俺はようやくそう答えた。

そして返事を即答出来なかった自分自身に驚く。もしかして俺は……？

「ちなみにその迷惑している女の子の性格って快活？　それとも控えめかしら？」

「……どっちも当てはまる」

「ふぇっ？」

俺の答えにミミは素っ頓狂な声を上げた。

そしてしばらく目を瞬かせて考えていたがやがて状況が飲み込めたらしく、口に手を当てて意味深に笑う。

「あらあら大変ねっ」

半分小馬鹿にしたようなその仕草にまた頭に血が上った。

「……あんたなぁ、占い師だからってよ、妙に上から見下すようなその物の言い方止めろよ。俺より年下だろ？　目上への礼ってもんを知らねぇのか？」

その時もともと上がり気味だったこいつの眉が更に吊り上る。

「私があなたより年下ですってー！？」

ミミは気色ばんだ顔で横に置いてある黒鞄に手を伸ばす。その中から財布を取り出し、一枚のカードを引っ張り出すと黄門の印籠ばりのパフォーマンスで俺の目の前にそれをズイ、と振りかざした。

「私、二十六歳なんだけどっ！？」

「何ッ！？」

驚愕の声を上げ、鼻先に突きつけられている運転免許証に目を凝

らす。免許証に写っている小顔の女の髪は黒髪だが、間違いなくこの女だ。
『影浦深美』という氏名欄の横に生年月日が記載されており、俺より十年早い生年だった。このちびっ子が俺より十歳も年上だと？
「私って背が低いからどうしても幼く見られちゃうのよね。六年前にヨーロッパに占星術を学びに行ったことがあるんだけど、初等科の小学生と間違えられたこともあるわ」

当時の辛酸体験を思い出したのか、ミミはフンッと鼻を鳴らす。

「……俺、最初あんた見た時中学生かと思った」
「若く見られるのは女にとっては確かに喜ばしいことだけど、かといって若く見られすぎるのも困りものよ」
ミミは面白く無さそうな顔でゴールドラインが入った免許証を無造作に財布に戻す。そしてそれを再び黒鞄の中にしまおうとしたが、ケースの中を見て何かを思いついたようだ。
「今ここで出生天宮図も作れないし、これであなたを占ってあげるわ！」
黒鞄の中から出したタロットカードを見て俺は呆れた声を出す。
「あんた、星占いの他にそれもやるのかよ？」
「ふふっ、占星術の前は少しだけこれにハマッていたの。こっちは本職じゃないから遊びでちょっとしてみましょっ！」
完全にこいつペースで物事が進み出している。
カードを左脇に置いて黒鞄を閉じると、ミミはその鞄を俺の膝上にドサリと乱暴に投下しやがった。
「おいっ何すんだよ！？」
「テーブルが無いからこれをテーブル代わりにするの。ちょっと重いけど我慢して！」
またしても俺の意向は完全に無視だ。
タロットカードが黒鞄の側面上に置かれ、ばら撒かれる。すぐに

キューピー人形のような小さい手が右回りに回り出し、カードを混ぜ始めた。
たっぷり二十秒以上はかき混ぜていただろうか。それが終わるとカードを一束に集め、今度はシャッフルを始める。手馴れているとすぐに分かった。カードが自らの意思で勝手に舞っているようだ。
「はい、これを三束に分けて」
ミミが俺にカードを押し付けてきた。やらないと帰してもらえそうにない。渋々三つの束に分けて黒鞄の上に置く。すぐにそれはミミの手によって一束にまた重ねられた。
そしてミミが厳かに命令する。

「……さぁ、あなたの未来よ。一枚引いてちょうだい」

なんだ、妙に緊張してきやがる。こいつの真剣な声に感化されたのだろうか。
「引いたら動かさないでそのまま平行にカードをひっくり返して」
言われた通りにカードを開けた。
そのカードを見たミミが「正位置で【恋人(ラヴァーズ)】ね！」と驚嘆の声を上げる。
俺から見ると逆さまの絵柄になっているが、カードの上半分には、神なのか悪魔なのかよく分からないでっかい羽の生えた魔物らしき生き物が君臨し、カードの下半分には全裸の男が立っている。男の両脇には同じく全裸の女が二人。つまり男は二人の女に挟まれている絵柄だ。
カードの解説が始まる。
「このカードの意味はね、＜恋愛＞、＜誘惑＞、＜三角関係＞。そして、＜二つの道のどちらかの選択を迫られる＞という意味なの。もしかしたらこれは、近いうちに柊兵くんに何か決断が訪れるって前触れかもね」

――　決断？　選択？　どういう意味だ？

「二者択一の意味を持つカードだから単純に考えれば二人の女の子のどっちかを選ぶ、ってことなんだろうけど……」

ミミはそのカードを手に取り、真剣な眼差しでじっと見つめる。まるでそこから発する、鼓膜では聞き取ることの出来ないカードの啓示を聞き取ろうとしているかのようだ。

「でも柊兵くんは迷惑しているんだもんね、その女の子達に。……そうね、じゃあもしかしたら、この先あなたの前に現れる選択肢によっては、その女の子達を遠ざけることが出来るかもしれない」

「どういう意味だよそれ！？」

「う～ん、具体的には上手く言えないけど、近いうちに柊兵くんとその女の子達の間で何かトラブルが起きるのかも。そしてその時柊兵くんが取る行動でその子達との関係が変わるのかもしれない」

トラブルが起きるかも、なんてミミは言うが、あいつらとはしょっちゅうトラブってる。……というか、俺が一方的に翻弄されている。

じゃあ何か？　この先、またあいつらが俺に何かしてきた時、思い切り突き放せばもうつきまとわれなくて済む、ということなのか？

「ミミさ～ん、どちらにおられるんですか～？」

下の階から男の声が聞こえてきた。

「あ、いけない。ここの責任者の人だ。私もう行かなくっちゃ。あ、でもこの椅子どうしよう……」

「俺が戻しておくから早く行けよ」

「あらそう？　ありがと！」

四段上の階段から下りてきたミミは、椅子から立ち上がろうとした俺の肩をそのちっこい両手で軽く押さえた。

「最初見た時から思ってたけど、あなた結構優しい所あるわよね。だからもっと柔らかい表情をするように心がけなさい。その目つきでだいぶ損してるわ。分かった？　はい、分かったらお返事は？」
　またしてもその上段からの物言いに引っかかりそうになったが、（こいつは二十六、二十六、二十六……）、と何度も呪文を唱えて怒りを抑える。
　急いでいるせいかミミは結局俺の返事を待たず、タロットカードを慌しく片付けはじめた。
　そして黒鞄を閉じる前に、中から妙に分厚い一冊の本を取り出す。
「これ、私が書いた本なの。特別にタダで柊兵くんにあげるから今度読んでみて。出生天宮図の作成の仕方もここに紹介してあるから、今度自分で作ってみるといいわ」
　胸元に強引に押し付けられた本の背表紙には、『愛と幸せに満ちた惑星の上で』　と書かれてある。驚く事に広辞苑に匹敵するくらいの分厚さだ。
「い、いらねぇよ！」
「フフッ、遠慮しなくていいのよ」
「マジでいらねぇって！」
「あなたとはまたどこかで出会えるような気がするし、じゃあそれまで貸してあげるっ」
　ミミは俺に広辞苑もどきをさらにグイと押し付け、黒のローブと金の巻き毛をなびかせながら風のように階段を駆け下りていく。
「おっおい、待てって！」
　手摺から身を乗り出して必死に呼び止めるも、ミミは足を止める素振りすら見せなかった。代わりに笑いかけられる。
「柊兵くん、あなたに大宇宙（マクロコスモス）のご加護がありますように！」
「だから待てっての！　これを持ってけ！」
「あ、言い忘れてたわ。あなたの星座と愛情が芽生えやすいハッピートライアングルは双子座（ジェミニ）と水瓶座（アクエリアス）よ。ではごきげんよう♪」

……畜生、行っちまいやがった。
踊り場に一人取り残され、押し付けられた本を片手に小さく舌打ちをする。
脳内に今しがたミミに言われた怪しげな予言が蘇り、強制的に俺のテンションを最低ラインにまで押し下げていた。
本当に近いうちにそんな二者択一が俺に訪れるのか？
で、もし予言が当たったら、その時の俺はどういう態度を取るんだ？
あいつらを冷たく突き放すのか？
自由になる為に？

本の黒表紙を燦然と飾っている青く丸い地球の写真を眺め、ひたすらに考える。
だが脳味噌をいくらフル回転させて考え続けても、今の俺はまだその答えを自らの中に見つけ出すことは出来なかった。

・―――・―――・―――・―――・―――・―――・―――・―――・

実は今日は週に一度の空手の稽古日だった。
他の門下生達はとっくに帰り、いつものように俺とヒデだけが道場に残っている。これから組み手をやろうってわけだ。しかしさっきからヒデの顔に浮かんでいる薄ら笑いが気に食わねぇ。何か俺に言いたそうな顔をしてやがる。イラつく気持ちを封じ込め、上体を約十五度傾けて立礼。礼から直るとさらにヒデの口角が上がっているような気がした。

「……なんだよヒデ。勝負の前にニヤニヤしやがって」
「悪いが今日は余裕で勝てると思ってな」
「なに？」
「稽古に遅刻してくるわ、おまけに集中力は散漫だわ、そんな状態のお前に負けたら俺は今日限りで空手を止めてもいい」
言葉だけではなく、表情にまで漂うヒデの余裕とその挑発に、増勢したアドレナリンが体内を瞬時に駆け巡る。
「何だとっ！？　よく言った！　じゃあお前が空手を止めたらこの道場は代わりに俺が継いでやるから有難く思えッ！！」
「ご随意に」
怒気を帯びた声と物静かな声が交錯した後、道場の中に針が落ちる音も聞き取れるような無言（しじま）が訪れる。
今の俺が集中力散漫だと？　ぶっ倒した後で「さっきの話は無かったことにしてくれ」と泣きを入れさせてやる……！
こいつとやる場合に気をつけるべき点は、素早い足裁きと体裁きで懐に飛び込まれた後の回し蹴りだ。ヒデの回し蹴りは予備動作は大きいが体がデカい分、相当な破壊力を持つ。まともに喰らえば吹っ飛ばされちまう。
ジリジリと間合いを詰め、正面にいるヒデを鋭く見据える。
こいつとはしょっちゅう組み手をしているのでお互いの癖は知り尽くしている。相手の実力が分かっている分、当然弱点もすべて曝け出しあっている。だが、だからこそ戦う方策が見えてくる。
俺の得意技は出会いの中段逆突きだが、相手がヒデならたぶんこの動きは読まれるだろう。なら、その前に鋭く見えづらい前蹴りをノーモーションでぶち込むことに決めた。重心を体の中心よりやや前寄りにし、寄り足で間合いを詰める。
喰らえっ！！
だが俺の動きにヒデは素早く反応してくる。ふくらはぎの内側部分を左腕の肘で内から外へと下段払いで払われた。払った際の腰のひねりを利用して、ヒデの右拳の正拳が唸りを上げて襲ってくる。

「ぐっっ……！」
鳩尾に鈍い痛み。……畜生、逆突きを極(き)められた！
ヒデは突いた右拳をすぐに引き、残心を取っている。完全に間合いを取られちまったか……！
勝負の行方を大きく握る鍵はカウンターだが、先に自分の間合いを取ることができた方がその後の勝負はかなり有利なものになる。間合いを取られるとそれがプレッシャーになり、苦し紛れな動作が出てきやすくなるからだ。動作も大振りなものになりがちで相手に動きを読まれやすくなってしまう。
加速と体重が最も乗った状態でヒデが素早く踏み込んできた。一気に勝負を決める気か！？
突きは何とかかわせた。だが体さばきでバランスを崩しちまった。体が開き、前足の爪先がヒデの正中線から外れる。すぐに反撃できる態勢を取れなかったその隙をヒデが見逃すはずもない。

――　来るッ！！

内心でそう叫んだのと同時に、ヒデ得意の背足を使った横からの回し蹴りが飛んで来た。
……痛(っ)！
バランスを崩した俺はその蹴りを入り身で流しきれなかった。側頭部に軽い衝撃が走る。顔面目掛けて飛んで来た蹴りをかろうじて背腕で受けたが踏ん張りきれなかった。

「勝負ありだな」

拳を下げ、仁王立ちになったヒデが目を細めてニッと笑う。パワー負けし、左後方に尻餅をついちまった俺は沈黙で答えるしかない。
……畜生、これだけあっさり勝負がついたのは久しぶりだ。
「心ここにあらずの浮ついたお前に俺が負けるはずないだろ？　お

前、今日の稽古に遅刻してきたが、どこに行ってたんだ？」
「……ヤボ用だ」
ミミ・影浦に占ってもらってたなんて死んでも言えねぇ。
「美月達とどこかに行ってたのか？」
「違う」
「何だ違うのか」
道着の黒帯に手をかけ、ヒデが近寄ってくる。ヒデは俺の前に来ると腰を下ろした。
「なぁ柊兵、美月と怜亜にあまり冷淡な態度を取るな。可哀想だろ」
「……ヒデ、お前、今まであいつらとずっと連絡取っていたって本当か？」
「あぁ。美月達が引っ越して二ヶ月くらい経った頃かな、電話が来てな、たまにお前の様子を教えてくれって言われたんだ」
「なんでその事、俺に黙ってた？」
「言わないでくれって頼まれた。お前、そういうの嫌がりそうだからってな」
「……」

肩を大きく上下させて息を吐く。
嫌われないために俺に直接連絡をしないで、ヒデを通して俺のことを知ろうとしていたあいつらの胸中を考えてみる。
……何だ、この気持ちは……？

「それでさ、お前の写真も時々送ってたんだ、あいつらが欲しがるんでな」
「勝手なことしやがって」
「そう言うな。そうだ、それで参ったことが一つあったよ。中学の時、修学旅行や体育祭の写真をクラスで回覧していただろ？　俺、あいつらの為にお前が一人で映っている写真全部に二枚の焼き増しを申し込んでたんだ」

「何！？」
「そしたらな、そのお前の単独写真を映ってもいない俺が、しかも毎回必ず二枚注文するもんだからさ、俺、お前に気があるとクラスの一部で思われちまってたみたいでさ、あれには本気で参ったよ。しかも俺とお前は中学の時はいつも二人でつるんでたろ？　だから柊兵も実は内心満更でもないと思われてたみたいだぜ」
ヒデはそう言いながら苦笑いをしたが急に愉快になってきたのか、今度は大声で笑い出す。
……おい、つーことは何か？　俺とヒデはクラスの奴らからホモと思われてたってことなのか！？　勘弁してくれ！
「その事を美月と怜亜に愚痴ったらよ、“　柊兵に女の子が近寄りづらくなってラッキー！　”　って喜んでんの。まったく憎めない奴らだよ。……お、柊兵どうした？」
「頭が……」
「あぁさっきの蹴り、お前咄嗟に背腕で受けたとはいえ、もろに入ったからな……大丈夫か？」
「いや、そうじゃなくてよ……」
頭を大きく垂れ、さっきよりも深くため息をつく。
（　柊兵くん　あなたに大宇宙（マクロコスモス）のご加護がありますように――　）
別れ際にそう囁いたミミの声がどこかから聞こえたような気がした。

訪れた二者択一　【前編】

あの摩訶不思議女の占いから六日が経った。
週の始まりの月曜ってやつはどうしてこういつもブルーな気持ちにさせるんだろう。

最近、『愛の十二宮図（ホロスコープ）』を俺は真剣に見なくなっていた。
理由はまたしても単純で、六日前から占いがまったく当たらなくなったからだ。
ミミ本人に会い、タロットとはいえ直接占ってもらったせいなのかどうなのかは分からない。とにかくプレタポルテとやらの星占いは当たらなくなっていたのだ。

「つきまとわれて迷惑なの？」

六日前、エスタ・ビルの階段の踊り場でのあの質問をつい肯定しちまったのをテレパシーでも使って感じたのか、次の日から美月と怜亜は一切俺の前に姿を現さなくなっていた。
だからあの不細工なおたふく天使がいくら「今日はいいことあるよん！」とか「今日は全然ダメぴょん←」などと騒いでも俺の毎日は全く変わらなかった。本来ならおたふく占いは運命のＢＧＭを毎日流していなければおかしいことになる。
以前のような元通りの静かな毎日を手に入れ、俺の心は清々しさに満ち溢れている……はずだ。

テレビ画面の中ではおたふく天使がいつも以上に騒いでいる。
なんでも今日からもう一人新しい着ぐるみキャラが増えるらしく、そいつは女の天使でおたふくのガールフレンドという設定らしい。

チッ、着ぐるみのくせに色気づきやがって。
飯を食い終わって席を立つ時にチラッと画面を横目で見ると、げんなりするぐらいのおかめ顔の、これまたかなり不細工なピンク色の着ぐるみが画面上でタコ踊りをかましている。
おたふくにおかめか、お似合いだな。
そんな益体もない事を考えながらスポーツバッグを手に外に出る。
週の初めの今日はこの秋一番の冷え込みだと特大温度計の横でアナウンサーが叫んでいた。寒風に身を縮めながら学校へと向かう。
もちろん背中にも腹にもあいつらの突撃を喰らうことのないままで。

・――――・――――・――――・――――・――――・――――・――――・――――・

「外で弁当を食うの、今日で終わりにしないか？」
シンが震えながらそう切り出し、全員がそれに同意する。
確かに今日は本当に冷えている。これでこのケヤキの木も半年先までしばらくは一人ぼっちだな。
「そういえばさ、最近、怜亜ちゃん達を全然見かけないよね」
ふいに尚人がそう言い出した。
非難がましそうな目でシンが俺を見る。
「柊兵があんなにつれない態度をとり続けるから、あの子達、こい

つを見限っちまったんじゃないか？　俺さ、ここ数日、隣のＤ組を休み時間に毎回覗きに行っているんだけど、美月ちゃんも怜亜ちゃんも教室にいないんだよなぁ。他の女の子に聞いてみたら来ているのは間違いないみたいなんだけどさ。どこに行ってるのかなぁ……」

……こいつ、休み時間に度々姿を消していると思ったらそんな事をしていたのか。毎度の事ながら勝手な真似しやがって。

「なぁ、柊兵。お前、次の授業終わったら急いで見に行ってみろよ」
「なんで俺があいつらの様子を見に行かなきゃならねぇんだよ」
「気にならないのか？」
「やっと元通りの静けさを取り戻して喜んでいる所だ」
「はぁ～……。お前はこの世で一番の大馬鹿者だと今ここで断言するよ」
「勝手に言ってろ」
俺とシンのやり取りを聞いていた尚人が口を挟む。
「もしかして柊兵も年上が好きなの？　良かったら僕の知り合い紹介しようか？」
「い、いるか、そんなもん！」
「同い年、年上がＮＧなら守備範囲けっこう狭いよね。まぁ僕も人のことは言えないけどさ。あ、ちょっと待って。ということは柊兵はロリータ？　まさか男色家じゃないよね？」
「んなわけねぇだろッ！！」
この発言が尚人ではなく将矢なら間違いなく制裁を加えているところだ。そこにその将矢がちゃっかりと名乗りを上げる。
「なぁなぁ尚人、じゃあ柊兵の代わりに俺に紹介してくれよ～！俺、年上のお姉さんがすっごく好みなんだ！」
そんな将矢を横目で見ていたヒデがフッと鼻で笑う。
「よく言う。将矢は女なら誰でもＯＫじゃないか」

――　どうでもいいが話題が俺から微妙にずれてきている。しかしいい傾向だ。しばらく放っておいて成り行きを見守ることにしよう。

「しかし嫌味だねぇ、ヒデのその笑顔！　さすがこのメンバーで唯一彼女がいる奴は違うなぁと思うよ」
シンが肩をすくめ、ヒデの余裕を羨ましがる。
「確かに今彼女がいるのは俺だけだが、柊兵以外はただ彼女がいないってだけで普段女と色々遊んでいるじゃないか。特にシン、お前がな」
「おっとヒデ。悪いがそれは大きな間違いだ。一番は尚人ですよ？」
「失礼だなぁ、シン。僕は遊んでないよ、いつも真剣さ」
「俺も真剣ですが？」
「ははっ、毎日ナンパばかりしてるくせによく言うよ」
「お前だってしてるじゃんかっ！」
「最近してないよ？」
「どうせここ二、三日の話ってオチだろーが！」
「おいおい、ケンカはやめろよ」

この場に漂いだした不穏な空気を察したヒデが割って入る。

「大体最初は柊兵を責めていたはずなのになんでこんな展開になってるんだ？」
「何言ってんだ、ヒデ。元はといえばお前と将矢が俺達の会話に絡んできたのが発端だろ？」
「そうだよ！」
逆に責められ出したヒデと将矢は顔を見合わせた。
「おい将矢、俺らが原因だとよ」
「そうなのか？　っていうかさ、元はといえば怜亜ちゃん達を毛嫌いする柊兵が悪いんだよ！　俺らのせいじゃないぜ？　……あ！

そうだ！　俺、前から皆に聞きたかったんだけどさ、皆は怜亜ちゃん派？　それとも美月ちゃん派？」
芝生に足を投げ出していたシンが突然ガバッと立ち上がる。
「おー将矢、それナイス質問！　実は俺もそれはかなり気になってたんだ！　じゃあ言い出した将矢から元気に行ってみよー！」
「ＯＫ！」

シンの音頭で将矢、尚人、ヒデ、と時計周りに強制カミングアウトが始まる。

「へへっ、俺は怜亜ちゃんだ！　ああいう守ってあげたくなるような子に俺は弱い！」
「お次は尚人！」
「僕も怜亜ちゃんだな。元々しとやかな女（ひと）がタイプだから。怜亜ちゃんが四、五歳年上だったら柊兵を差し置いて絶対にさらいに行ってたね」
「しっかし尚人の年上好きは筋金入りだな……。さぁ次はヒデだ」
「なに俺か？　俺、彼女いるんだぞ？」
「例外は認めない。彼女がいなかったら、と仮定して答えるように！」
シンは右手をピストルの形にし、ヒデに向かって撃つ真似をする。指名をいう名の空砲をくらったヒデは目を閉じると静かな口調で答えた。
「……美月だな。実は小学生の時、美月が好きだった」
「ヒデ、それマジッ！？」
「あぁ。まぁでも昔のことだ」
「へぇ……。あ、じゃあ次は俺か。なぁなぁ皆の衆、“　どっちも好み　”　はアリですか？」
「それはズルイぜ、シン！」
「ダメだよ」

「認められんな」
三人に一斉にダメ出しをくらい、シンは照れ笑いを浮かべながらまた芝生に腰を下ろした。
「やっぱダメか……。でもまだあの子達のことよく知らないしなぁ。見かけはどっちも可愛いしさ、となるとやっぱ重要なのは性格とかフィーリングじゃん？　でも今の時点で俺の直感がビンビンに反応しているのは美月ちゃんだな。あの陽気な性格、俺と合うような気がする。……ということはこれでちょうど二対二か。じゃあいよいよ残りは……」

全員の目が俺に集まる。
当然の如くフイと顔を背け、「答えると思ってんのか？」と吐き捨てた。全員が噴き出している。

「でもマジであの子達どうしたんだろうなぁ。顔見ないとなんか寂しいよ」
D組の窓を見上げ、シンが呟いた。
そこに昼休み終了のチャイムの音が高らかに鳴り響き、行くか、というシンの声で俺達はノロノロと芝生から重い腰を上げた。

・――――・――――・――――・――――・――――・――――・――――・

飯を食って眠気を催してきた。
ちょうどいい、次は気の弱い俺らC組の担任、毛田の古典だから思い切り寝てやろう、そう思いながらポケットに両手に突っ込み、

グループの最後尾を歩いていた俺の腕がグイ、と後ろに引かれた。
あまり強い力ではない。振り返った俺の顔が固まる。
「柊ちゃん……！」
今にも泣きそうな顔で怜亜が俺の腕を掴んでいた。
細く白い指が紺のジャケットをしっかりと握りしめている。
「ど、どうした、怜亜？」
その顔に心配したのか、それとも久しぶりに怜亜を見たせいなのかは分からないが、自分でも驚いたぐらい俺の声は穏やかだった。
「美月が……」
目に浮かんだ涙で怜亜の瞳が揺らいでいる。
「美月がどうした？」
「お願い、一緒に来て！」
怜亜が俺の手を取り、走る。
走ると言っても怜亜の走る速度は俺には小走りでも遅いくらいだ。
「あ、怜亜ちゃんだ！　おい柊兵、どこに行くんだ！？」
後ろからシンの声が追いかけてくる。
「先に行っててくれ！」
振り返りそう叫ぶと、怜亜に手を引かれるまま廊下を進む。
着いた先は一階の保健室だった。
「失礼します」
と言い、怜亜が保健室の扉を開ける。
中には銀杏高校一の美人で有名な、養護教諭の伯田加奈子（はくたかなこ）さんが少々困り気味の顔で椅子に座っていた。
ウエスで眼鏡のレンズの曇りを拭いていたらしく、入ってきた怜亜を見て慌てて元通りに眼鏡をかける。
「森口さん、風間さんのお家の人に連絡はついた？」

「いいえ。美月のお母さん、お買い物に行っているみたいで電話は留守番電話になってました」
「そう、困ったわねぇ……。あら、原田くん、まさかまたケンカしたんじゃないでしょうね？」
長いポニーテールを揺らし、伯田さんが俺の方に目を向けながら強い口調で詰問する。
「いや」
返事はその二文字で事が足りた。
「……ならいいけど。去年のような鮮烈なデビュー戦はもう絶対に止めてよ？」

――　普段風邪一つ引かない丈夫な俺が、この美人教諭に何故名前を知られているのか。

答えは去年この銀杏高校に入学してすぐの頃、俺は乱闘事件を起こしたことがあるからだ。
……とは言っても別にこちらから仕掛けたわけではない。
当時三年だった数人の不良崩れが俺の目つきが悪いと難癖をつけてきたのだ。要は生意気そうな新入生の俺を締めたかったらしい。
その時ヒデもその場にいたが、「お前が売られたケンカだし一人でやれるだろ？」と言って先に帰ってしまった。一見薄情そうだが、でもそれは逆で“　その人数ならお前なら間違っても負けないだろ？　”という意味合いだ。
何人いただろう。四人か？　五人か？
覚えてないがとにかく全員叩きのめしちまった。
俺らが乱闘しているのを見かけた生徒が教師に通報し、伯田さんも救急箱片手に慌てて飛んできたのだ。そして一週間の停学になりそうになった所を、
「あの乱闘は原田くんが因縁をつけられて自分の身を守るために仕

方なくやった正当防衛です」

と証言してくれた生徒がいたらしく、急転直下で俺は何とか無罪放免になった。

だがそれ以来、教師陣には素行を厳しくチェックされるようになっちまったがな。

そして俺はほとんど無傷だった分、伯田さんにはこってりと叱られた。当時の俺は激しく硬直し、その叱責に無様なオットセイのようにあうあう、と曖昧に返事をしていたのを覚えている。

「ちょっと、ちゃんと聞いてる？　原田くん」

「あ、あぁ」

「“　あぁ　”　じゃなくて“　はい　”　でしょっ」

はぁ、と伯田さんのため息が漏れる。

一方、その伯田さんに久しぶりに対面し、話しかけられた俺は自分のある変化に気付いた。

女が苦手な俺が、つい最近まで半径一メートル以内で面と向かい合うと一番硬直していたのが実はこの人物だった。

しかし今の俺は伯田さんの前でも何とか平静を保てている。これは美月と怜亜の今までの度重なる激しい特攻で、俺にも女に対する多少の免疫がついたということか？　いや、それとも……。

「返事はきちんとしなさい。何度も言ってるのにホントに君って子は……」

うざったい小言が続く。だが、

「伯田先生！」

と怜亜が一歩前に出てその先を遮った。こいつにこんな強引なところがあったとは。少々驚いた。

「これから柊ちゃんに手伝ってもらって美月を病院に運びます。美月のお家には私がまた後で連絡を入れますから。いいですよね？」

そう怜亜に言われ、伯田さんは少し考えた末に同意した。
「そうね……あんなに熱があるんだから早く病院に連れて行った方がいいわよね」
「じゃあ柊ちゃんお願い！」
状況もまだ俺によく説明しないままで怜亜が俺の手を引っ張る。
どうやら美月は熱を出したらしい。ベッドの周りを覆っていた安っぽい白のカーテンが怜亜の手で大きく開け放たれる。

中のベッドで美月は目を閉じていた。はぁはぁと荒い息と真っ赤な顔で。

「熱が三十九度近くもあるの。体育の授業の後、いきなり気分が悪いって言い出して……」
美月を見下ろす俺の横で怜亜が沈痛な顔で呟く。その後ろで伯田さんが薬品庫から何かを取り出し始めた。
「もしかしてインフルエンザにかかっちゃったのかしら……？　流行にはまだ早いけど、急激に熱が出ているし、可能性も無いわけではないわね。でももしそうなら早く病院へ連れて行ってお薬を出してもらわないと」
「お願い、柊ちゃん、一緒に美月を病院まで連れて行って！」
「分かった」
素直に頷く。
いつもの元気さなんて微塵も感じさせず、こんなタコみたいに真っ赤な顔で苦しそうな息づかいの美月を放っておくことなんてさすがに出来ない。
「もしインフルエンザなら感染力が強いから、気休めだけどこれつけておくわね」
伯田さんの手で美月にガーゼのマスクがつけられた。両頬から顎までが白いマスクですっぽりと覆われる。
「さ、じゃあ原田くん、この子を背負って」

「美月、これから柊ちゃんが病院に連れてってくれるからね」
ぐったりとした美月は返事をしなかった。相当辛いようだ。
怜亜と伯田さんが二人がかりで美月にカーディガンを着せる。そしてその身体を起こすと、ベッドの端に座った俺の背に美月を乗せた。
「原田くん、大丈夫？」
返事の代わりに頷くと俺は美月を背負い、ベッドから立ち上がる。前にこいつにいきなり背中に飛び乗られた時は少々重いと感じたが、きちんと背負うとその身体は意外にも軽かった。
自分もカーディガンを羽織ると怜亜は伯田さんの方を振り返る。
「じゃあ、先生。後は任せて下さい」
「頼むわね」
「はい」

俺と怜亜は校舎から外へと出た。
さすが今朝のテレビで今年の秋一番の冷え込みだと言っていただけのことはある。風がさらに勢いを増し始めていて、その日の木枯らしはかなりの冷たさだ。
だが美月の身体から発せられる高熱で、俺の背中だけは熱いくらいに温かった。

訪れた二者択一　【後編】

「怜亜、お前は来なくてもいい。伝染(うつ)るとヤバいし、寒いから教室に戻ってろ」

美月を背負い直した後、肩越しに振り返り、そう告げる。だが怜亜は強く首を横に振った。

「ううん、行く！　だって美月のお母さんに連絡しなくちゃいけないし」

あぁそうか……。なら仕方ねぇか。

「どこの病院に行けばいいんだ？」

「ここから一番近いのって向坂(さきさか)病院じゃない？」

「げ、あそこのヤブか」

「何言ってるの。私達小さい頃は病気になったらみんな向坂先生の病院にお世話になっていたじゃない」

「でも多分もう相当の年だぜ、あの爺さん。美月の診察中にそのままポックリ逝ったら洒落になんねぇぞ」

「もう柊ちゃんたら……。失礼よ、そんな事言っちゃ」

一応俺をたしなめはしたが、怜亜自身も不安になったのだろう。その場で少し考えている。

「でも大きな病院だと待ち時間が長そうだし……。早く美月を診てもらいたいからやっぱり向坂先生の所にしましょ。ね、柊ちゃん？」

「分かった」

そうと決まればもう迷わない。美月を背負って小走りで駆け出す。

はぁはぁと背中から断続的に聞こえてくる美月のくぐもった吐息が胸を締めつけた。

もうちょいだからな、頑張れよ、美月……！

「しゅ、柊ちゃん」

数分後、後ろから俺の後を追って走っていた怜亜が息を切らせて足を止めたので、俺も立ち止まった。

「私走るの遅いから、柊ちゃん先に行って。早く美月を連れてってあげて。私も後から行くから」

「分かった。じゃ先に行ってるぞ」

怜亜がそう言い出してくれて助かった。正直もう少し早く走りたかったところだ。

その場に怜亜を残し、走り出す。

角を二度曲がった後、病院まではずっと登りの坂道だったが、スピードを落とさずに登りきる。さすがに少々息が切れた。

やがて坂の向こう側に病院の看板が見えてくる。

「美月、病院に着いたぞ！」

そう声をかけたがやはり背中から返事は戻ってこなかった。

坂を登りきってすぐの場所にある「向坂病院」と看板のある小さな個人病院に駆け込む。待合室にいるのは老人ばかりで、病院独特の消毒薬系の匂いが鼻をついた。健康優良児の俺には少々苦手な匂いだ。

受付に走り寄ろうとしたその時、診察室から出てきた鬼瓦（おにがわら）を顔面にベタリと貼り付けたかのような形相の桑原（くわばら）婦長に出くわす。

おい、まだいたのかこの婦長（ババア）……！

美月を背負い、スリッパも履かずに中に飛び込んで来た俺をみて鬼瓦は状況を察したようだ。女とは到底思えぬドスの利いた声で「急患かい？」と尋ねてくる。

「あぁ。インフルエンザかもしれないって保健の教師が言ってた」

「そりゃマズいね。婆さん達に感染したら大変だ。こっちに連れておいで」

お前も婆さんだろ、と内心でツッコみつつ、後に続く。
小さなベッドが一つだけある隔離スペースに俺らを迅速に誘導すると、鬼瓦は次の命令を下した。
「さっさとそこのベッドに下ろしな」
……なんつー言い草だ。本当にこいつは看護師か。
海賊船の鬼船長にこき使われている愚鈍な手下のような心境になる。とにかく言われた通りに美月をゆっくりと下ろし、ベッドに横たわらせた。

マスクをつけ、目を閉じ、意思の無い人形のような状態の美月。
爆弾みたいにうるせぇ、いつもの元気な様子は微塵も感じられない。まるで別人のようだ。
フフンフンフン、と気色の悪いフシをつけながら鬼瓦は手馴れた様子で美月のカーディガンを脱がし始め、俺を相手に愚痴りだした。おかげで隔離室から出て行きそびれる。
「しかし今時の娘は本当に発育がいいねぇ……。あんたもそう思わないかい？　もし私らの若い頃にこんなでかい胸の娘がいたら目立って目立ってしょうがなかったろうよ。サラシは必需品だったろうね。……どぉっこらしょぉぉっと！」

うぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！？
鬼瓦の渾身の気合と共に美月のシャツが大きく開けられた。
目に飛び込んできたそれを見て、真っ先に思いついたのは、恭しい桐の箱に入れられたマスクメロン二玉。推定だがサイズはたぶん2～3Ｌクラスに相当するに違いない。
美月はどうやら着やせするタイプらしく、肉眼で見たその贈答用の肌色メロンは俺が予想していたよりもさらに大きかった。
……どうでもいいがここに救心は置いてあるか？
鬼瓦がいるので何とか必死に平静を装っているが、そろそろＭｙ

心臓がデッドライン限界だ。向坂のジジィの前に俺がポックリ逝ってどうする。

「今先生を呼んで内診してもらうからあんたはもう出ておいき。急患を運んできた苦労に免じて特別にここまではサービスで見せてやったんだからありがたく思うんだね。このままそこでこの娘っ子の診察を見たいんだろうがそうは問屋が下ろさないよ。ヒヒッ」

振り返った鬼瓦が魔女のような笑い声を上げてニタァ、と笑う。

……チッ、胸クソ悪ィ！　てめぇの胸でもねぇくせに何がサービスで見せてやっただ！

「だっ誰が見たいか！」

「ハッ、本当は見たくてたまらんくせにやせ我慢すんじゃないよ。あたしはちゃーんと分かってるんだ。お前ぐらいの年の男の頭ん中は、四六時中夢の中でも女の乳のことしか考えてないもんさ。そういうもんさね」

勝ち誇ったようなその顔に向かって、「このくそババァ！」と叫びたいのを何とか飲み込む。このババァ婦長の恐ろしさを子供の時からよく知っているからだ。

この鬼瓦顔でニヤリと不気味に笑い、

「ヒヒヒッ、クソ坊主、覚悟はいいかい……？」

と、太い注射器片手にペタペタとナースサンダルを鳴らしてにじり寄ってくる当時の姿は、幼い頃テレビで見た、唸るチェーンソーを手にしたあの殺人鬼（ジェイソン）と真正面からタメを張るぐらいの強烈なインパクトだった。思えばよくトラウマにならなかったもんだ。

しかし一方の鬼瓦は俺のことを全然覚えていないようだ。そういや最近病院（ここ）の世話になったことなんてねぇしな。

「桑原さん、急患はこっちかい？」

カーテンが揺れ、その隙間から向坂のジジィがふらふらと現れた。頭髪は真っ白で身長は昔に比べて十センチ以上小さくなっている。
チッ、思ってた以上によぼよぼしてやがる……。こんな老いぼれに美月を任せて大丈夫か？
「この娘っ子ですよ」
と鬼瓦に言われ、ジジィはベッドに目をやった。
「おぉ！」
ジジィがベッドに寝かされた美月を見るなり感嘆の声を上げる。
そして感動なのか老衰なのかは知らねぇが、ふるふると震えながら「ごっつぁんです」と美月の胸の上で中央、右、左、と続けざまに手刀を切った。……おい！　なに考えてんだ、このくそジジィ！
しかしジジィは相変わらず「こいつは見事だ。生きててよかった」と手刀を繰り返している。
いっそのこと俺がこの場でジジィを冥土に送ってやろうかと思ったが、鬼瓦に急き立てられた。
「さぁさぁ部外者はあっちの待合室でおとなしく待っといで。それとこれをお履き」
ババァのくせにぐいぐいと凄まじい力で背中を押され、鬼瓦の言う通りに渡されたスリッパを履くと美月を隔離室に残して待合室に戻ることにする。
……まぁとにかくこれで俺の役目は無事に終わったな。
暇になったのですぐ横にあったマガジンラックから週刊誌を取り出し、長椅子に腰をかけてパラパラと眺め出す。そろそろ怜亜も来る頃だろう。

二十分後、入り口のガラス扉がキィと開く音がした。怜亜が来たか。
しかし入ってきたのは怜亜ではなかった。でも見知った顔だった。

慌てたようにガラス扉を押して入って来たのは美月の母親だ。久しぶりに見たな。手に保険証を持っているところを見ると、あの後怜亜がまた連絡を入れたのだろう。看護師の誘導で隔離室の中へと消えて行く。

よし、これで美月はもう大丈夫だな。良かったな美月、ゆっくり休め。

そう思いながら再び雑誌に視線を落とそうとして気付いた。

……しかしそれにしても怜亜、遅くねぇか？

学校からここまでは大して遠くない距離だ。事実、俺はすぐに着いたしな。

美月の家に連絡を入れていたとしてももうとっくに来てもいい頃だ。第一、美月の母親はもうここに来ている……。

「！！」

一筋の戦慄が背中を走り抜ける。顔から一気に血の気が引いていくのが分かった。こんなに焦燥感が湧き起こるのはいつ以来だ！？

雑誌を横に投げ捨てて長椅子から立ち上りダッシュしようとした瞬間、左膝をマガジンラックにぶつけたせいでそいつは騒々しい音を立てて派手に倒れる。その拍子に綺麗に陳列されていた様々な種類の雑誌が我先にと飛び出し、待合室の中に大雪崩のように散っていく様はかなりの圧巻だった。

一瞬足を止め、どうしようか考えたが、結局すぐに身を翻して玄関へと走る。

「こっこらあっ！　このクソ坊主――ッ！　ちゃんと元に戻してお行き――っ！」

後ろで鬼瓦が憤激しているダミ声が聞こえたが、構わずに病院を飛び出した。

まさか……っ！

予知能力なんてものは一切持ち合わせてはいないが、嫌なことに悪い予感だけは昔からよく当たる方だ。この感が当たってないように、と必死で祈りながら俺は今来た道を全力で戻り出した。

長い坂を下り切ってもまだ怜亜の姿は見えない。焦りがより一層増す。更に走る。必死に走る。次の角を右に曲がった。

「……怜亜ッ！」

くそっ、やっぱり悪い予感が当たりやがった！！

「おいっ怜亜っ！　大丈夫か！？」

人気の無い細い路地。

大量のピンクチラシと賃貸物件情報がベタベタ張られた電柱に身を寄り掛かからせ、うずくまっている怜亜の姿が目に飛び込んできた。

――　十月間近、秋から冬への季節の変わり目、この底冷えする外気温と、乾燥した湿度、そして急激な運動……！　畜生ッ、俺の馬鹿野郎！　何故もっと早く気付かなかったんだ！

側に駆け寄り、もう一度怜亜の名を呼ぶ。

「だ、大丈夫よ、柊ちゃん……。もう治まったから……」

俺の顔を見上げて怜亜が無理に微笑む。その弱々しい笑顔に自分を殴りつけたくなった。

――　軽度ではあるが怜亜はたまに喘息の発作を起こす。

小学生の時、目の前で発作を起こした怜亜を初めて見たあの時の衝撃はまだこの脳裏に鮮明に残っている。背中を大きく波打たせ、首を絞められた狼の遠吠えのようにヒューヒューと喘鳴を続ける、苦しそうなその発作に遭遇した俺達にしてやれることは何も無かった。

全長十センチほどの緑色の容器に詰められた気管支拡張剤。悔しいがあの薬剤だけが、当時の怜亜を呼吸困難から救う唯一の主役（ヒーロー）だった。こいつを噴霧した後、ケロリとした顔で微笑んだ怜亜を見て子供心にホッとしたことをまだ覚えている。

今、怜亜の手の中にあの用具がないかを俺は無意識に探していた。しかし見当たらない。今は持ち歩いていないのか？

もう症状はだいぶ落ち着いているようだが、地面に片膝を着き、小さな背中をさすってやる。昔発作を起こす度に俺達が代わる代わるやっていたように。

「ちょっと待ってろ」

角を曲がる前にあった大きめの自販機に駆け戻る。

良かった、水があった。

本当は白湯があれば一番いいのだが、この状況では白湯をすぐに手に入れるのは難しい。エビアン水を買うと怜亜の所に戻り、差し出す。

「飲め」

「ありがと、柊ちゃん……」

コクン、コクン、と少しずつ水を飲み込む怜亜を見て、やっと俺も落ち着いてきた。

「寒い空気の中を走ったからきっと発作が起きそうになったんだな……」

「ん……そうかもしれない。でもここしばらく発作は起こしてない

のよ？　中学の時に一度だけ。その後は無いわ」
「……怜亜ももう今日は家に帰れ。送ってやるから」
「でも美月と私のバッグ、学校に置いたままだし……」
「後で俺が届けてやるから。ほら」
「え？」
しゃがんで背中を向けた俺に怜亜は目を見開いている。
「背負ってやるから早く乗れ」
「ううん、いい！　だ、だってもう治まったから。大丈夫、自分で歩けるわ」
「いいから早くしろ」
「で、でも柊ちゃん……」
「いいから乗れって」
「……」
だがこれだけ再三言っても怜亜の奴は俺の背に乗ろうとはしない。恐らく俺に迷惑をかけたくないと思っているのだろう。
まったくよ……本当に変わってねぇな。遠慮のしすぎだ。こういう時何事にも常に一歩引いちまう、控えめなこいつの性格に苛立つ。でもどうすればいいんだ？
普段はサボりっぱなしの怠惰な脳細胞に渇を入れる。するとその衝撃で各細胞に積もっていた埃でも吹き飛んだのか、いいアイディアを思いついた。
「いいから従えっ！　これは“　王様（キング）の命令　”　だっ！」
通りに俺の怒声が響き渡る。強い口調でそう叫んだ瞬間、怜亜の表情にハッと驚きの色が浮かんだのを俺は見逃がさなかった。すかさず畳み掛ける。
「まだ覚えてるな！？　あの時の命令権を今使う！　拒否は許さん！」
「で、でも柊ちゃん……」

「うるせぇ！　命令だ！　さっさと乗れ！」
「は、はい……」
もじもじしながら立ち上がるとようやく怜亜はおずおずと俺の背中にもたれかかってくる。
「立つぞ」
ゆっくりと立ち上がった。
つい先ほど美月を背負った時その軽さに驚いたが、怜亜はさらに軽かった。怜亜から漂う香水か何かのいい匂いが俺の身体を包み込む。
「柊ちゃん、ごめんね。迷惑かけて……」
背中から済まなそうな声が聞こえてくる。
やっぱりそう考えていたのか。わざと聞こえない振りをする。

「……懐かしかった。柊ちゃんが今言った王様の命令」

もうあれから四年半も経ったのね、と呟く声が聞こえる。
「ね、柊ちゃん……、私達のクラスの女の子ったらね、柊ちゃんのこと、ケンカ好きな乱暴者で、ぶっきらぼうで、冷たくて怖い人だって言うの。そんなことないのにね。何も知らないのよ。だって柊ちゃんは優しいもん、いつだって」
また俺は聞こえない振りをした。ひたすら黙々と歩く。
「柊ちゃんの背中、とってもあったかい……」
怜亜の片頬が背中に密着したのが分かる。

「……大好き、柊ちゃん……」

そう呟いた言葉を最後に、しばらく経つと背中からすぅすぅと微かな寝息が聞こえ出した。
……寝ちまったのか。でもな怜亜、頼むから背後でそんな事を囁くな。俺はお前が思ってるようないい奴じゃない。

歩きながらそっと後ろを振り返り、俺に全幅の信頼を寄せながらすやすやと心地良さそうに眠っている無邪気な寝顔をしばらく眺める。……ったく幸せそうな顔して寝やがって。

怜亜を家まで届けた後、学校に戻ってこいつらの鞄を持って、もう一度家に行くはめになっちまったな。面倒だが自分で言い出したことだ、仕方ない。

授業はあと一時間で終わりだし、今日はこのままサボッちまおう。

・――――・――――・――――・――――・――――・――――・――――・

その後再び学校に戻り、美月と怜亜のスクールバッグを同じ建物（マンション）内のそれぞれの家に届け、逢魔が時の中を歩いて家路に着く。日が暮れるのが早くなったな。

赤紫のグラデーションに染まった水平線を眺めながらふと思う。

……ミミが占った　【　訪れる二者択一　】　という未来。

あの占いがもし当たっているとしたならば、俺の予想ではたぶんそれは今日のこの出来事なのだろう。

高熱でフラフラの美月を病院に送り届けるのを断ったり、発作を起こしそうになった怜亜を見捨てていれば、俺は数々の悩みから解き放たれ、自由の身になったのかもしれない。

しかし同時に思う。

確かにあいつらに俺は悩まされている。
最近不整脈を打ちっ放しの心臓も正直限界を告げている。
だが、そんな非人道的な真似までしないと得られない自由なのであれば、それならばいっそのこと、俺は今のこの状況を甘んじて受け入れてみよう。その方が数百倍、いや数千倍マシだ。

そう思いながら上空を見上げると、紫の空に浮かぶ星々が「それで正解だ」と言いたげに一瞬強く煌めいたような気がした。

柊兵くんの過激で追憶な週末　<1>

次の火曜日、美月は学校を休んだ。
怜亜も休んでいる。

「柊兵閣下、戦況報告です！　天使（エンジェル）ちゃん達は本日発見できません！」

隣のD組を覗きに行く行為が習慣化してきたシンが、あいつらの出席状況について俺にまくし立てている真っ最中だ。
「あ～あ、それにしても俺はマジで心配ですよ！　美月ちゃんと怜亜ちゃんのことがさ」
また例の芝居がかった大げさな身振りで教室の天井を見上げた後、シンが媚びたような流し目を俺に向ける。
「俺、二人のお見舞いに行きたいなぁ～。……というわけで行ってもいいでしょうか？」
「……なんで一々俺に訊く」
「柊兵閣下の了解を取らないと後が怖いからです！」
「勝手に行けばいいだろ」
「あ～らら！　そうきましたか！」
待ってましたとばかりにシンがニヤリと笑う。
「冗談で言ってみたんだけど相変わらず素直じゃないですねぇ～！
昨日たった一人で二人の天使（エンジェル）を助けた騎士（ナイト）のお言葉とはとても思えないのですが？」

昨日、怜亜に手を引かれて消えた以降の状況を当然のことながらこいつらが訊いてこないわけがない。朝から代わる代わる繰り返ししつこく尋ねられ、結局一部始終を白状させられちまっている状態

だ。

「……シン、お前のその減らず口を今すぐ閉じろ。でないとそのうざったい長髪を全部引っこ抜いてスキンヘッドにしてやるぞ」

「ちょ、止めてくれよ！　俺、この髪に命かけてんだぜ！　これで中々大変なんだぞ、この美しい張りとキューティクルを保つのがさ。これから俺は真実の愛を探さなくちゃいけないっていうのに！」

「じゃあ黙れ」

「了解（ラジャー）……」

渋々とシンは口を閉じ、代わりに窓枠によりかかって腕組みをしていたヒデがしみじみとした口調で語る。

「しかしあの丈夫な美月が風邪を引くとはな……。だが一度折れた骨が再び接（つ）がれると強度が増すように、美月も復活したらさらにパワーアップしてるかもしれんな」

「……恐ろしい事を言うんじゃねぇ、ヒデ」

しかし、確かにそれはありえそうだった。

昨夜、今の状況を拒まずに受け入れるとは決めたが、あいつらの特攻が激化するのだけは勘弁してほしい。

――　そして水・木・金と、平穏だが平坦でもある三日間が過ぎる。

美月は今週一杯休んだようだ。

結局インフルエンザではなく、少々重い風邪だったようで、普段滅多に風邪など引かないから今回の高熱が堪えたのだろう。

怜亜は水曜から学校に来た。

そして「一人で抜け駆けはできないから」、と言って俺の所に一度礼を言いに来ただけでその後は来なかった。どうやらお互いの間で色々と俺に関する誓約があるらしい。その事実を知り、また少々

ビビッている俺。

事件はその最後の金曜日に起きた。

「柊ちゃん！」

体育を受けるためにグラウンドへ移動中、Ｄ組の前を通ると怜亜が飛び出して来た。

跳ねるように飛び出してきたので膝上十五センチのスカートがふわりと大きく持ち上がる。白く細い生脚がかなりの部分まで見え、脳裏をあの救心のパッケージが凄まじいスピードでよぎっていった。

「あのねっ、美月、ほとんど良くなったみたいだから月曜から学校に来るって！」

「そ、そうか。良かったな」

動悸を沈めながらそう返答する。

怜亜の顔色もいい。お前も大丈夫そうだな。

だが内心で一安心した次の瞬間、また新たな恐怖に襲われる羽目になる。

「あ、それとね柊ちゃん、来週からお昼は皆で一緒に休憩室（リフレッシュルーム）で食べようって、楠瀬さんから昨日誘われたの！」

「なっ、何いッ！？」

愕然とする。

……あの野郎、また裏で糸を引いてやがるのか……っ！

覚悟を決めたとはいえ、結局また荒れ狂う海の中に飛び込まざるを得なくなりそうな展開に慄く俺に、怜亜が極上の笑顔で笑いかけてくる。

「だから柊ちゃん、月曜からよろしくねっ」

軽く握った右手を口元に添え、輝かんばかりの笑顔だ。そのあまりの眩しさについ目を逸らしちまった。

……いや、それよりもこいつらが元気になって良かった。今は素直にそう思っておこう。
というか、そっちに意識を集中させないと平静を保てない。

・――――・――――・――――・――――・――――・――――・――――・

週末は結構ヒマしていることが多い。
一年前まではヒデとお互いの家を行き来して下らない話をしたりしていたのだが、ヒデに女が出来て以来、ヒデの週末はその女の為に存在するようなものになっちまった。
ヒデがダメならシン達とつるめばいいのだろうが、シンはいつでもどこでもすぐにナンパに行こうとしやがるし、尚人は尚人で綺麗な年上女探しの旅に出かけることを好む。付き合ってられねぇ。
将矢はというと、あいつの家は蕎麦屋を営んでいて、一人息子の将矢は跡継ぎとして親から過大な期待をかけられている。だから将矢の週末は蕎麦打ち修行でほとんど潰されていた。

今日は土曜日で外は晴れ渡っている。
こうして部屋で一人篭っていることが、とてつもなく不健全な事のような気がしてきた。
……駅前でもぶらぶらすっか。そう考えて出かける支度をしていた時、下で話し声が聞こえてきた。
「あらいらっしゃい！　お待ちしてましたわ！　お久しぶりですわね～！　わざわざお出で下さって申し訳ありませんわね。お元気でした？」

かなり仰々しい、よそ行きの大声が下から聞こえてくる。
普段俺ら家族に話す時とは全然違う、母親のまともな口調とその声色。誰か知り合いが来たらしいな。

「柊兵〜！　ちょっと来なさ〜い！」

なんで俺を呼ぶんだ？　親戚でも来ていてとりあえず挨拶だけはしておけってことか？　しゃあねぇな……。渋々部屋を出て一階に降りる。すると玄関で千切れんばかりにぶんぶんと手を振る長い髪の女が視界に入った。

「柊兵〜っ！！　この間はありがとうね〜っ！！」

……げっ！　美月ッ！？
な、なんでお前が俺の家に来ているんだ！？

「柊兵くん、美月を病院にまで連れて行ってくれたんですってね。本当にありがとう。ちょっと見ない内にあなたも大きくなったわね」
美月の母親が俺に話しかけてきたのでとりあえず生返事をする。
「風間さん、せっかくですからどうぞ上がっていって下さいな。久しぶりですし、積もる話もありますから」
「えぇありがとうございます。では少しだけ……」
やっぱり上がるのか……。で、でも俺には関係ねぇ。今出掛ける所だったしな。
ここはさっさと退散するに限る。とりあえずは一時自分の部屋へ退避だ。

「ねぇ柊兵！　アルバム見せてよ！　中学の時の！」

上着を取りに二階の自室へ戻ろうとした俺の背に向かって美月が

どデカい声で叫ぶ。
「あらそうね、見せて上げなさいよ柊兵。じゃあ美月ちゃんは柊兵の部屋でアルバムを見るといいわ」
——げげっ！！　何だって！？

「お、俺、悪ィけど今から出掛ける所だから……」
そう断ると、母親が俺をギロリと睨む。
「柊兵っ！　あんたはせっかく美月ちゃんが久しぶりに遊びに来てくれたってのに何冷たいこと言ってんの！　いいからそっちの用事は後回しにしなさい！」
「いぇーい！！　やりぃ！」
目の前で美月が元気にガッツポーズをする。
「柊兵の部屋に入るのって久しぶりだぁ～っ！」
と騒ぎながらさっさと二階に上っていく美月の後ろを、ゴルゴダの丘に向けて重い十字架を背負うキリストのような足取りでついて行く。

……そういや、今日は土曜だから『モーニング・スクランブル』は無かったもんな。
ということは、本日の俺の運命は“　神のみぞ知る　”ってやつか……。

・――・――・――・――・――・――・――・――・
――・――・――・

「わぁ〜っ！！　ねぇねぇ柊兵っ！　これって学校祭の写真でしょーっ！？」

うるせぇ……。　通常時の三倍増しのそのハイテンション。俺の中学時代のアルバムを見ている美月のはしゃぎっぷりにはほとほと参っていた。

美月の大声が左の鼓膜から右の鼓膜へと一直線に突き抜けていく中、しかめっ面で「あぁ」と一度だけ頷く。“　復活したらさらにパワーアップしてるかもしれんな　”　と昨日ヒデが言っていた事が冗談ではなくなっていることを、俺はすぐ横でリアルに体感するはめになっていた。

「あーっ！！　この柊兵の黒装束写真、かっこいいーっ！！　ねっ、この写真貰っちゃってもいい！？」

「あ？　印刷してあるものを剥がせるわけ……」

「切り取ればいいじゃんっ！」

美月の右手にはいつの間にか鋏が握られていた。間髪を容れずにジョキッ、と小気味良い音が鳴る。

「かっ、勝手に切るな！」

アルバムの裁断を始めようとしていた鋏を奪い取ると、美月がふくれっ面で抗議してくる。

「いいじゃん一枚くらいー！　もうっ柊兵のケチーッ！！」

拒否をされた美月の両頬が膨らむ。お前は水揚げされたトラフグか。

しかし傍若無人なこのフグは意外と素直に毒気を抜いて元の顔に戻った。

「まっ、いいや！　この間シンにあのラブラブ写真焼き増ししてもらったしー！」

……それを聞いて一気に気が重くなる。
美月が言っている写真とは、先週の昼に俺があの中庭で生贄（モルモット）にされた時のものだろう。将矢が撮ったあの羞恥写真をシンが焼き増ししてこいつらにやったに違いない。
「よーし！　じゃあ次は小学校の時のアルバムに行ってみよー！」
……ちなみにもうこの場の主導権はとっくにこいつに握られている。
本棚の一番下に無造作に押し込めてあった白樺小の卒業アルバムを美月が勝手に取り出すのを、俺は為す術無く見ていることしか出来なかった。
俺らが映っているページを覚えているのか、美月は最初の数ページをまとめて掴み、一気に飛ばす。
「懐かしい〜っ！　ホラ見てよ、柊兵！　皆まだちっちゃーい！　柊兵もあたしも怜亜もヒデも！　……でもさっきの中学のアルバムを見て思ったけどさ、柊兵の写真ってどの写真見ても不機嫌そうな顔してるよねー。たまには笑えばいいのに！」
美月が指をさした場所に小学校時代の俺らが映っている。美月と怜亜が前に、俺とヒデがその後ろに立っている構図だ。昔から写真を撮られるのが嫌いな俺は確かに仏頂面をしていた。
その写真をまじまじと見ていた美月がふと呟く。
「うーん、こうしてみると、あたし結構感じが変わったような気がするなぁ……」
その呟きに、ついアルバムを見ていた視線が反射的に上がっちまった。
カーペットの上にきちんと正座をし、アルバムに目を落としている美月の横顔。
長い睫が何度も瞬きを繰り返している様子が視界に入ってくる。

――　そうだな、確かに変わった。
昔は男と変わらないくらいにまで短かった髪も今は背中を覆い隠すくらいになっているし、身長も伸びている。身体の凹凸も立派なもんだ。
だが四年半の歳月で変わったのは見た目だけだ。コイツ自身はたぶん変わっていない。何も。なんとなくだがそんな気がした。
「怜亜と柊兵はあまり変わってないよね。でもさ、一番変わってないのは断然ヒデだよ！　そう思わない？」
そう尋ねられた俺はふとある事を思い出す。
「おい美月、ヒデの中学の時の仇名、知ってるか？」
「知らなーい！　なになにー？」
インパクトを与えるためにわざと一拍置いてから答えた。

「……若年寄だ」

「あはははっ！　なにそれ～っ！！」
前のめりになって美月が笑い転げ始めた。ほぼ予想通りの反応だ。
仇名の由来は年齢不相応なその落ち着きと少々老け気味の顔からきていたらしい。
「ヒデ、ショックだったんじゃない！？」
「いや、全然だ」
当時その仇名を知った俺がその事をヒデにあっさり教えてやると、当人は至って平静に「上手いこと言うな」と呟いただけだった。昔から、からかい甲斐の無い奴だ。
「おっかしー！　月曜日にヒデに会ったらあたし笑っちゃいそうだよ！」
爆笑の余韻を残しながら次のページを美月がめくる。そしてまたデカい声で叫んだ。
「出ました――っ！！　六年の時の運動会で最後のクライマックス！『六年男子リレー』だぁ！　この時さ、柊兵はリレー選手に選ば

れたんだよね、しかもアンカーで！　アンカーは二周走れるから、結局柊兵は三人抜いて一着でゴールして！　あれは興奮したよ！」
「……お前よくそこまで詳細に覚えてるな」
「へへ～、そりゃあもうっ！　柊兵に関することなら何でも覚えてるよっ！」
　美月は大きく笑い、またそのデカい胸を張る。
　今は服でしっかりとコーティングされているが、向坂のジジィの病院で見た二つの特大マスクメロンを思い出しちまったので慌てて目を逸らす。
「お、お前だってその前の女子リレーでアンカーだったじゃん」
「うん！　ちなみにあたし、何人抜いたか覚えてる？」

　赤のたすきを右肩にかけ、必死にトラックを疾走していたこいつの姿を思い出した。

「……一人だったか？」
「ちが～う！　二人だよ！　ゴール直前のギリギリのところでまた一人抜いたの！　もうっなんで覚えてくれてないのよ～！　最後あんなにスリリングなレースだったのに！」
　顔を紅潮させ、美月が文句をつけてくる。
「じゃあね、じゃあね！　前半のプログラムのハードル競争、あたしは何位だったでしょー？」
「んなもん覚えてるかよ」
「二位だってば！　三つ目のハードルでうっかり足ひっかけちゃったんだよね。この時は怜亜と一緒の組で走ったんだけど怜亜はビリだったよ」
「あいつは体育が苦手だからな」
「では続いて次の質問です！　この午後一番のプログラムの『六年女子のリトミックダンス』、あたしは何に扮して踊っていたでしょうー？」

「知らん」
「冷たぁ～い！　ちゃんと覚えててよー！　あたしはイチゴだよ！　イ・チ・ゴッ！！　」
「そんな昔の下らねぇことまで一々覚えてねぇっつーの」
……質問続きで疲れてきたので母親が持ってきた紅茶をごくりと飲む。
しかしさっきから感じていたが、こいつとは会話がスムーズに進むな。幼馴染とはいえ、女とこれだけ普通に話したのはいつ以来だろうと考える。……まったく記憶に残ってねぇ。

「あ！　これ、柊兵達の『六年男子の棒倒し』！　これもすごく熱い戦いだったよねっ！」
一方の美月のハイテンションはまだまだ続行中のようだ。
「あぁこっちにはヒデがいたからな。あいつに棒持ちを任しておけば安心して敵地に攻め込めた」
「当時のヒデの腕力に叶う男子なんていなかったもんね！　柊兵はすばしっこいから、敵地に攻め込んで上に駆け上って棒を倒す役にうってつけだったし！　怜亜と二人できゃーきゃー応援してたの覚えてる！　ホント懐かしいよね～！」
そう言いながら次のページをめくった美月の手が止まった。そしてそれまでマシンガンのように喋っていた口を閉じ、黙り込む。その開かれているページを見て、なぜ美月のテンションが急激に下がったのかを俺は悟った。
「……あたし、今までの人生の中でこの修学旅行ほど楽しくない旅行は無かったよ」

柊兵くんの過激で追憶な週末　＜2＞

ポツリと呟いた美月に俺も思わず頷きそうになる。
今開かれているページは修学旅行のシーンを集めたページだ。修学旅行は小学校の六年間で最大級の行事のため、紙面は六ページだ。修割かれている。しかしそのスナップ写真の中に怜亜の姿は一枚も無い。この修学旅行の直前に運悪く怜亜は発作を起こしてしまい、急遽旅行の参加を取りやめざるを得なくなってしまったのだ。

「あんなに行きたがってたのに、あの時はきっと怜亜もショックだったろうね……」

――　そうだ。その通りだ。
当時、怜亜が相当な衝撃を受けたのは本当だ。そしてその事実を知っているのはたぶん俺だけだ。
……しかしもうあの時から五年近くも経つからと言って、今更当時の怜亜の気持ちをここで美月に話す気は無かった。だから沈黙を決め込む。

ふぅ、と美月の血色のいい唇から小さな吐息が漏れた。気持ちを切り替えたのか、急に美月は視線を上げて真剣な顔で俺を見つめる。
「そういえば柊兵。あたし柊兵に聞きたいことがあったんだよね」
「なんだ？」
「あのね、あたしが今週休んでいる間、怜亜、柊兵の所に来た……？」
最後の問いかけの時に美月の視線が揺れたような気がしたが、す

ぐにまた真っ直ぐな視線が俺に向けられる。ただの気のせいだったのかもしれない。
「あぁ一度だけ来た。一人だけ抜け駆け出来ないとかなんとか言ってな」
それを聞いた美月はプッと噴き出した。
「もう怜亜ったらそんな事言ってたの～！？　ホント真面目っ子なんだから！　せっかく一人だけのチャンス到来なんだからどんどん柊兵の所に行けば良かったのにさ！」
――　なに？　お互いの間で何か決め事をしているわけでもないのか？
「もしあたしが怜亜の立場だったらさ、休み時間にバンバン柊兵のクラスに突撃してたよ！　でもきっと怜亜はあたしに悪いと思って遠慮したんだね。ホントそういう所っていかにも怜亜らしいよ」
カップに手を伸ばし、美月も紅茶を飲み込む。
「あ、そういえばもう一つ聞きたいことがあったんだ。柊兵、火曜日って怜亜に何かあった？」
「……火曜日？」
火曜は怜亜も学校を休んだ日だ。
「うん、あたし、火曜からずっと休んだでしょ？　で、怜亜が昨日の夜にノートを貸しに来てくれたんだけど、火曜の分だけ取り忘れた、っていうか半分うたた寝しちゃってろくにノートが取れなかったっていうのよ。でもあの怜亜が授業中に寝るなんてちょっと考えられなくってさ」
一瞬だが返す言葉を失くす。
……そうか、怜亜の奴、美月を病院に連れて行く最中に発作を起こしかけて、次の日に休んだ事を話してないのか……。

たぶん美月に自分のせいで、と思わせないための怜亜の気遣いなのだろう。まったく、どこまでもあいつらしい。その気遣いに敬意を表して、ここは怜亜の為に俺も話を合わせてやることにする。
「あぁ、そういや、火曜に俺の所に来た時、あいつ、欠伸ばっかりしてたぜ？」
「へぇ～……、じゃあやっぱりうたた寝したっぽいね。でもあの怜亜がねぇ……」
怪訝そうな顔をしながらも俺の嘘のせいで美月は一応納得したようだ。
コクコクと紅茶を飲みながら次の獲物（アルバム）を物色し始めている。
「あれ？　これは何？」
たった今、白樺小のアルバムを抜いた空間の奥にあった一冊の薄い雑誌に美月が気付き、それを手に取った。
――　うわぁぁぁぁぁっ！！　美月ッ、それに触るなぁ――ッ！！
「わ……すっごーい……！　柊兵ってこういう女の人が好みなの！？」
美月が手にしている本。
それは俺が去年買った某女性モデルの水着写真集だった。
「見るな！」と言いたかったが動揺がデカすぎて咄嗟にその言葉が出てこない。
とにかく無言で奪い返す。
「すっごく胸が大きい人だね、その人！　ちなみに何カップ？」
「し、知らんっ！」
「知らないわけないじゃんっ！　そんなのまで買ってるんだからさ！」
「知らねぇったら知らねぇっ！」
「ふーん、どこまでもシラを切るか……」

さてどうしてくれようと言わんばかりの態度で美月が俺に視線を走らせる。そして何かをハッと思いついたような顔になった。
「そうだ柊兵！　実は私も結構胸大きいんだよ！　知ってた？」
……あぁそれはとっくに知っている。あの向坂のところの鬼瓦ババァのせいでな。

「ちょっと見て見て！」
美月が脱ぎ捨てたGジャンが華麗に宙を舞う。思わず口から「うぉっ！？」と声が出そうになった。
「ほらほらっ！　今の女の人には敵わないかもしれないけど、これだけあるよっ！　どう？」

――　バッ、バカか、こいつ！？
美月の奴、鳩尾の部分にぐいと手を入れて、ゴム鞠ツインズを突き出すように持ち上げて見せてきやがった！

こいつが着ているインナーはピッタリとフィットしているTシャツだったので盛り上がった胸の形がこれ以上無いくらいにまでくっきりと露になっている。その形状を見て瞬く間に顔面が熱くなってきた。こっこれで鼻血でも出たら洒落になんねぇぞ！？
「お、お前には羞恥心というもんが無いのかっ！」
「ん？　いや、もちろんあるけどさー、あたしも胸はそこそこあるんだよ！　……ってとこを、ここでアピールしておこうかなーと思っちゃったりなんかしちゃったんだよねっ」
「すっ、するなっ！　そんなもん！」
「ねぇ柊兵、その女の人って何カップなのー？　知りたーい！　あっそうだ！　その本の中にスリーサイズが載っているんじゃない？」
「のっ、載ってねぇよ！」

必死に写真集を背後に隠す。予想以上にかなりヤバい展開になってきた。
原田柊兵、久々の大ピンチだ。
「いいからちょっともう一度見せてよ！」
「ダッ、ダメだ！」
「後一回！　後一回でいいからっ！」
「ダメだっつーの！」
「みぃーせぇーてぇー！」
美月が立膝で俺の側に移動してくる。
危険を感じ、座ったまま後ずさる。
寄ってくる。
後ずさる。
寄ってくる。
その度に大きく揺れるゴム鞠Ｍａｒｋ？。

目がそこだけに行きそうになるのを何とか堪えながらとにかく必死に後ずさる。
するととうとう美月が強行手段に出てきた。
「いいからとっとと貸しなさっ……あやぁっ！？」
「おわっ！？」
強引に俺から写真集を奪い取ろうとした美月が立膝のバランスを崩して俺の正面にぶつかって来た。
右手を後ろに回していたので支えきれずに俺もその勢いであお向けにひっくり返る。
……いってぇ、もろ後頭部を打っちまった……。
「あたた～っ、ごめんっ、柊兵！」
カーペットの上に両手をつき、俺の上に覆いかぶさるような形に

なった美月が謝る。
その声に目を開けるとチカチカする視界の中央でまたしても二つの物体Xがゆらん、ゆらん、と振り子時計のように大きく揺れていた。
なんとも妖しいその動き。このまま無言で見続ければ、決して解けることのない催眠術にでもかかっちまいそうだ。
「大丈夫だった、柊兵？」
心配そうな顔で美月が俺の顔を覗き込んでいる。
「あ、あぁ」
……どうでもいいがこのシーン、久しぶりだな。約半月前にこれとまったく同じシーンを俺は銀杏高校の芝生の上で体験している。
「エヘヘッ、なんか、この間のあの時みたいだよね！」
どうやら美月も俺と同じ事を思っちまったようだ。急激に嫌な予感がしてくる。
俺の上であの時と全く同じ輝くような笑顔を見せ、美月が普段とは違う声で囁いた。
「……ね、もう一回してもいい……？」
――　きっ、来やがったッ！！
来ると思ったッ！！　焦る。とにかく焦る。
美月が顔を寄せてきた。肩から落ちてきた美月の長い黒髪が俺の首筋にふわりとかかる。
「いいでしょ？」
おっ、落ち着け俺！　確かにあの時のシーンを再現しているようではあるが、シン達に嵌められた時とは大きく違う点が一つある！

俺の手足は自由だ！　ということは、この美月の行動を阻止することは容易に可能だということだ！

「柊兵……」

うわわっ！　美月の奴、目を閉じやがったっ！　勝手に世界に入ってんじゃねぇよ！

まっ待て待て！　とりあえず、退け！！　ここはひとまず退いてくれっつーのッ！！　パニくる思考の中で不意にあの女――、ミミ・影浦の顔が浮かぶ。

おっ、おいミミ！　こっ、この場合の二者択一は、どっちを選択すれば一番最善の道になるんだッ！？

なぜか最近は急に当たらなくなっちまった「愛の十二宮図（ホロスコープ）」だが、今日だけはあのおたふくとおかめの不細工カップルがのたまう運勢を知りたい。

しかし時は待っちゃくれない。ほんのりと紅に染まった唇はためらうことなく俺に目掛けて急降下してくる。ヤバい！　このままだと後二、三秒後には……！

――　その時だ。

「美月ちゃーん！」

と声がし、続けて階下から二階に向かって上ってくる足音が響いてくる。

その後の俺らの行動は早かった。

たちまち俺達の身体は磁石のS極同士に電磁化し、瞬時に分離、即座に起き上がる。

数秒後にノック音がし、間髪いれずに俺の母親が入ってきた。

「美月ちゃん、お母さんが用事があるのでもうお帰りになるんですって」
「あっはい、分かりました！」
そう返事をした美月は立ち上がると部屋の隅に落ちていたGジャンを手に取り、素早く羽織る。そしてにこやかな顔で俺に手を振った。
「じゃ、またね柊兵！　アルバム見せてくれてありがとっ！」
美月はそのままさっさと一階に下りて行ってしまい、間抜けな俺は一人部屋に取り残された。

――　しかし女という生き物はつくづく恐ろしい。
ついさっきまであんなモーションをかけてきやがったくせに、俺の母親が来た途端、シラッとした顔で何事も無かったかのようなあの美月の顔……。

……結局俺はこの後、外出をしなかった。
最近あいつらの特攻が無かったせいでようやく回復してきていた精神力のチャージメーターが、またしても一気に＜ＲＥＤ（ゼロ）＞になっちまったからだ。畜生……。

柊兵くんの過激で追憶な週末　＜3＞

一夜が明け、昨日美月から受けたダメージも回復の兆しを見せてきた。
外も晴れているし、今日こそは駅前でもぶらつこう。そう決めた。

昼飯を食い終わった後、再び支度をする。
今日は何を着ていくか考えていると、また来客が来ている気配がした。昨日といい、珍しく今週は訪問者が多い。
カーキ色のベロアシャツを身につけ、携帯電話と財布を手にする。
そして出かけようと部屋の扉を開けた途端にゴン、という鈍い音が響いた。

「いったぁ～い……」

驚いた。
見知らぬ女が廊下で頭を押さえていたのだ。
丸い眼鏡をかけ、萌黄色のワンピースに白のカーディガンを羽織ったミディアムヘアの小柄な女。見覚えは無かった。
だが妙な既視感（デジャ・ヴュ）を感じるのは何故だろう？
俺が開けた扉に頭をぶつけた衝撃で眼鏡がずれてしまっているこの女の顔を凝視してみた。

「あ、あの、こんにちは。お久しぶりです……」

丁寧にペコンとお辞儀をされたが、駄目だ。相変わらず思いだせ

ない。
……でもなぜこんなにもこいつに懐かしさを感じるんだ？
「お前、誰だ？」
「あ、あの、私、森口果歩（もりぐちかほ）です。覚えてないですか……？」
「お前、果歩かっ！？」
名前を言われてようやく思い出した。
果歩は怜亜の四つ下の妹だ。……とすると今は十二歳か。大きくなったな。
そういや、よく見てみると小学生の時の怜亜によく似ている。眼鏡をかけてはいるが、体つきの細い所や、大きな黒目がちの瞳なんかそっくりだった。
その果歩が眼鏡の奥の瞳をうるうると潤ませながら俺に向かって両手を組む。その表情はこれ以上ないくらいの真剣さに満ちていた。
「あ、あの……、じ、実は、柊ちゃんにお願いがあって来たんですっ」
――おいおい、四つも下の果歩に「柊ちゃん」なんて呼ばれちまったぞ……。
そういえば昔から怜亜が俺の事を「柊ちゃん」と呼ぶから、小さい果歩も真似してそう呼んでいたっけなぁ。
「お願い？」
オウム返しに答えると果歩がコクリと首を縦に振る。そして眼鏡をそっと元の位置に押し上げながらもじもじと体を動かし始めた。
……しかし動きまでも姉にそっくりなんだな、お前……。しゃあない、とりあえず中に入れるか。
「今出かける所だったんだけど、まぁいいや。入れよ」

「は、はいっ。失礼します」
果歩は遠慮がちに部屋に入って来たが、途中で急に足取りを速めて吸い寄せられるように本棚の前に行っちまった。
「わぁ～、本がいっぱいある！」
熱心に上段から順に本の背表紙を見始めた果歩を俺は後ろから黙って見ていた。
小さな頭が忙しく何度も左右を行き交う。どうやら本が好きらしいな。
「柊ちゃんの読むジャンルって随分多岐に渡ってるんですね！」
「そうか？」
「はい！　もうちょっと見てもいいですか？」
「あ、あぁ」

……そう返事はしたが、もし万一、本棚の一番下にあるアルバムに果歩が手をかけたら話は別になる。あの奥には昨日美月に見つかった例の写真集が潜んでいるからな。小学生の果歩には見せられねぇ。
だからもし果歩がその禁断の場所に手を伸ばそうとした場合、後ろから羽交い絞めにして場合によってはそのまま床に組み伏せ、それを断固阻止しなければならん。
俺がそんな危険なラフファイトの決意を固めているとはいざ知らず、果歩は目を輝かせながら本棚に収めてある本のタイトルを読み上げだした。

「えっと、『戦う身体の作り方』に『筋力アップ・トレーニング法』、『灼熱の烈風ファイター』……、そうか、この段は全部格闘技系のご本なんですね。じゃあこっちの段は……」
小さい頭が隣の棚に移動する。
「『ブルースギターコード・おいしいフレーズ特集』、『ザ・ロック・ラプソディ』……、あ、分かりました！　ここは音楽関係のご

本の段ですね？　そして次の段が……エッ？」
驚いた果歩の声が一オクターブ上がる。
「『意外と知らないはず、葬儀のマナーってものを』、『やり直せないから後悔しない遺言書を作ろうよ』、『住宅ローンをゼロに！借り換えないのはバカで負け組』？　……柊ちゃんってこういう世界にも興味があるんですか？」
「そ、それはだな……」
言い訳をしようと思ったが、その小柄な体をさらに小さくかがめて果歩が本棚の中段を深々と覗き込む。
「それにこの、『もう一つのアジアの夜・魅惑のムーディナイト』ってなんだか面白いタイトルですね」

――あ？
『もう一つのアジアの夜・魅惑のムーディナイト』？
それ、読んだ覚えがねぇな……。
俺がそう考えている間に果歩はその本を手に取ってしまった。そして中を見て絶句している。
取り出されたそのカバーを見て、その本がどういう本なのかを思い出した。
「そ、それは、俺の本じゃないぞ！　親父のだ！　ついでに葬儀関係の本の辺りも全部そうだからな！？」
すると果歩は強張った顔をわずかに俺の方に向けて聞き返してきた。
「で、でも、この本がこうやってここにあるってことは、柊ちゃんもこれに興味があったからおじさんの所から持ってきたってことですよね？」
くっ……果歩の奴、痛いところを突いてきやがる……。
果歩が今開いている本は、あっちの国の、まぁ、その、なんだ、

男が遊びに行く夜のスポットを分かりやすく紹介してある本だ。女の顔写真とか、店の場所とか、明快な料金体系とかな。
勤続二十五年祝いだか何だかで、会社が旅費を持ち、親父は去年アジアに三泊四日で旅行をしてきた。その旅行準備期間中に親父が大量に買い込んできた旅行書の中の一冊がこれだ。
艶っぽい題名（タイトル）と、中に綺麗な女がたくさん載っていたので目の保養になるかと親父の本棚から持ち出してはきたが、結局ろくに中を見ずにそのままそこに置きっぱなしにしていた本だ。
「ほとんど見てねぇよ、そんな本！」
「で、でもあちこちにいっぱい折り目がついてますけど……」
「それは俺じゃなくて親父だ！！」

――　おい、親父、随分その本を熟読したらしいな……。

「この中の女の人達、みんな綺麗な人ばっかりですよね。そっか、おじさんはこういうタイプの女性の方がお好きなのですか……」
中のページに目を戻し、果歩が呟く。
エロ本と違い、夜のスポットをただ紹介してあるだけなのでたぶん際どい写真は一つも載っていないはずだ。中に書かれてあるサービス内容や料金体系の意味は果歩にはまだ分からないだろう。それでも小学六年の果歩には充分妖しげで刺激的な本に見えているんだろうな。もし果歩に昨日美月に見つかったあの写真集を見せたら卒倒するかもしれん。
「い、いいからその本、早くしまえ」
「は、はい。あれっ、こっちの段にあるこの厚い本も変わってる……。えっと、『　愛と幸せに満ちた惑星の上で　』……これって星占いの本ですよね？」

――　ヤバいっ！　それはあのチビ女に強引に押し付けられた本だ！

捨てちまおうかと思ったが面倒で結局その本棚に突っ込んでおいたんだった！

「柊ちゃんって星占いにも興味があるんですか……？」

俺を見る果歩の視線が明らかに変わっている。

ど、どうする！？

し、仕方がない、ここは我が身を守るためにスケープゴート作戦でいくしかねぇっ！

「そっ、それも俺の本じゃねぇっ！　お、親父のだ！」

「えぇーっ！？　これもおじさんの本なんですかっ！？」

「そ、そうだ！　親父の本棚が一杯だからそこに突っ込んでるだけだ！」

呆然とした顔で果歩がミミの本に目を落とす。

「柊ちゃんのおじさんがこんな本まで……！」

済まん、親父……！

俺は贖罪の羊となっちまった親父に内心で手を合わす。

たぶん果歩の持つ親父のイメージは今日で大きく変わっちまったはずだ。

必死に住宅ローンの返済を終えた後、後腐れ無く黄泉へ旅立つ為に遺言書を作成する責任感のある男かと思いきや、夜が更ければ妖しげなスポットで艶めかしい女達を侍らせる煩悩の固まりと化し、しかしなぜかその一方では輝く星々に己の運命を重ね合わせる可憐な乙女心も有しているという、意味不明の変態親父のイメージがついちまったに違いない。

もうこれ以上は心臓に悪い。それに果歩に見られたくない本もまだ数冊ある。よって即刻、果歩の行為を止めさせることにした。果歩の手からミミの本を取り上げて乱暴に棚に戻し、要件を再度尋ねる。

「果歩。そんなことよりさっき言っていたお願いってなんだよ？」
すると急に果歩の顔がタコのように真っ赤になった。そしてすがるような目で俺を見る。
「あ、あのですね、今の私には柊ちゃんしか頼れる男性の方がいないんです！　柊ちゃんを頼れる男性と見込んで是非にお願いしたいんです！」
「だから何をだよ？」
「あ、あの、ふ、服を買いに行くのに付き合って欲しいんです……！」
「服？　お前の服をか？」
「違います！　だ、男性のです。ブランド名は……」
果歩が口にしたそのメンズブランドは俺も知っていた。
二十代半ば以降がターゲットのブランドで、メンズ雑誌にもよく取り上げられている。

「で、その服を買ってどうすんだよ？」
すると果歩の顔がますますタコ化し、さすがに俺も気付いた。
そうか、果歩の奴、それを好きな男にやろうとしてるんだな。
「……誰かにやるつもりか」
「は、はい」
「相手は誰だよ」
「た、担任の五十嵐先生ですっ」

担任か……。
その相手が変なオヤジだったりするのなら協力はできねぇと思ったが、一体幾つ離れてるんだ？　かなり無謀だと思うんだがな……。
「そいつ、独身か？」
「も、もちろんですっ！　当たり前じゃないですか！」

何を言い出すのかと言わんばかりの勢いで果歩が俺に噛み付く。
しかしこれから協力を仰ごうとしている相手だということを思い出したのか、慌てて口をつぐんだ。
「ダ、ダメですか、柊ちゃん？」
俺が黙り込んだので果歩がおずおずと確認してくる。
「いや別にヒマだから付き合っても構わないけどよ」
「本当ですか！？」
果歩の声が弾む。
「あぁ良かった……。一人でお店に行く勇気も無いし、かといって他に頼れる男の人もいないし、困ってたんです！　柊ちゃんは先週発作を起こしかけたお姉ちゃんを家にまで運んでくれたんですよね？　お姉ちゃんにその事を後から聞いて、すぐ側に頼れる人がいたって気付いたんです！」
俺が買い物に付き合うのをＯＫしたせいで果歩は急に饒舌になった。よっぽど悲壮な決意で俺の所に来たんだな。
「そうだ！　柊ちゃん、あの晩にお姉ちゃんが言ってましたよ！　柊ちゃんにはいつも色々助けてもらったり、優しくしてもらったりしているの、だから私は柊ちゃんが大好きで、柊ちゃんしか見えてないのよ、って！　……あれっ、どうかしました？」
俺が顔を背けたので果歩がそう尋ねてくる。
「……なんでもねぇ」

妙に照れくさい。
今の果歩を見ているとなんだか小学生時代の怜亜に告白されているような気分になっちまった。

「じゃあさっさと行くぞ」
「はいっ！」
果歩の行きたい店も駅前にあるらしいからちょうどいい。こいつの買い物に付き合った後、そのままそこで別れよう。そう考えなが

ら俺は果歩を連れて一階へと降りた。

柊兵くんの過激で追憶な週末　＜４＞

「今日はポカポカしていい天気ですねっ」

願いを聞き入れてもらえてよっぽど嬉しいのだろう、果歩は勝手に俺の腕に自分の腕を絡め、ニコニコと歩いている。だがさすがに小学生と腕を組んでも微塵も硬直はしないので好きにさせておいた。おそらく傍から見れば仲の良い兄妹あたりに見えているに違いない。

「あのですね柊兵ちゃん」

「あ？」

「今こうして私と柊ちゃんが腕を組んで歩いていることをもしお姉ちゃんが知ったら、どんな顔をするのかすっごく興味あります！柊ちゃんはお姉ちゃんがどんな反応をすると思いますか？」

……知るか。

だが俺の知っている昔のままの怜亜なら、あいつはニッコリ笑って何も言わないような気がした。

怜亜は嫌なことがあっても決してそれを表面に出さない。そして必ず自分が一歩身を引いちまう。慎み深いといえば聞こえはいいが、小学生の頃、俺はあいつのそういう所にイラつくことがあった。

相手を思いやるということも確かに大事なことだとは思う。だがその結果が自分の気持ちを押し殺してばかりいることになるのなら、それは間違いだ。

「……なぁ果歩」

「はい？」

「怜亜は中学の時、発作を起こしたことがあるのか？」

「エッ？」

予想もしていなかった質問だったのだろう、眼鏡の奥の瞳が大きく見開かれる。
「は、はい、中一の時に一度だけありますけど……？」
「……それ以降は無いのか？」
「はい、ありません。それにその時も薬を使ったらすぐに治まりましたから」
「ならいいんだけどよ」
「柊ちゃん、そんなに心配しないで下さい。お姉ちゃんの喘息は小さい頃に比べるとすごく良くなってきているんです」
良かった、怜亜が俺に言った事は本当だったんだな。
美月に嘘をついたように、あの時俺にも嘘をついたんじゃないかと下衆な勘繰りをしたが、どうやら杞憂のようだ。俺にも嘘をついていたのなら正直かなりショックだったので安心する。
「そうだ！　今日帰ったら柊ちゃんがお姉ちゃんのことを心配してたって話しちゃおうっと！　きっとお姉ちゃんとても喜びますよ！」
「いっ、言うな！」
「なんでですか？」
「わざわざそんな事言うんじゃねぇ！」
「本当のことだもん、いいじゃないですか。それとも今の質問はお姉ちゃんのことを心配しているからしたものじゃないんですか？」

ぐっと言葉に詰まる。
こいつ、親父の本の件といい、さっきからなかなか鋭い突っ込みをしてきやがる。怜亜とそっくりなのは見かけだけと考えた方が良さそうだ。ここは強引にでも話題を転換させる必要があるな。
「と、ところで果歩。お前が買おうとしている服は少々値が張ると思うぜ？　小学生がそんな高価なものを男に上げようなんて俺はあまり感心しないがな」
俺のこの意見に果歩の表情がわずかに曇った。

「でも先生よくそのブランドの服を着ているんです。せっかくプレゼントをするなら喜ぶ物をあげたいじゃないですか」
「……何を買うつもりなんだ？」
「ウールのモックニットにしようかな、って思ってます。これからもっと寒くなるから……」
果歩がどこか遠くを見ているような目で呟く。これが“　恋わずらい”　ってヤツか。
「そ、それでですね柊ちゃん、実は今日が先生の誕生日なんです」
「なにっ！？　今日だと！？」
俺の驚きように果歩はうつむく。
「今までなかなか買いに行く勇気が出なくて……。だから今プレゼントを買ったらすぐに先生の家に渡しに行こうと思ってるんですけど……」
恐る恐る、といった様子で果歩が俺を見上げる。その目を見ただけで果歩が次に何を言いたいのかが分かっちまった。
「おい、まさかそれを渡しに行くのにまで付き合えっていうんじゃないだろうな？」
「ダメですか……？」
「告るなら一人で行けよ」
「で、でもプレゼント買っても渡せなかったら意味が無いですよね？　だから柊ちゃんが一緒についてきてくれたら、勇気が出るっていうか、もう絶対後に引けなくなるっていうか……」
やれやれ、果歩のこの頼みまでもＯＫしたら今日一日はたぶんこれで潰れちまうのは間違いない。どうするか……。
「私はお姉ちゃんじゃないから、いくらお願いしたってダメですよね……」
果歩は両肩を落とし、しょんぼりとうな垂れた。そのあまりにもストレートな落胆の様子に、柄にもなく憐憫の情が湧く。
「そういう可愛げのない物の言い方をするな。行くよ、行きゃあいいんだろ」

「本当ですかっ柊ちゃん！？」
「あぁ」
「わぁっ！　ありがとうございますっ！」
果歩が無邪気に抱きついてくる。
「柊ちゃんっ！　私っ、お姉ちゃんが柊ちゃんのことを大好きなのが分かるような気がしてきましたっ！」

――　調子いいなお前……。

「じゃあとっとと買っちまうぞ。時間が無い」
「はいっ！」
その後、俺達は果歩の行きたがっていた店に行き、予定していたモックニットを無事に購入した。ニットのカラーは相当悩んだ末に落ち着いたプラムの色を果歩は選択する。
ところが目的の品を手に入れ、さらに浮かれるかと思ったら、段々果歩の表情が固くなってきていることに気付いた。
「緊張してきてるのか？」
俺の言葉に果歩は神妙な顔で頷く。
「わっ私、男の人に告白するの初めてですし、しかも先生とはだいぶ年齢も離れているから、私なんて相手にもしてもらえないかもしれないと思うと……」
俺の腕に掴まっていた手が少し震えている。
こういう時、なんて言ってやれば果歩の緊張を解きほぐしてやれるんだろうな。女に告白した経験なんて無いからよく分かんねぇ。当たって砕けろ、っていうのも無責任っぽいし、成るように成るだろ、っていうのも興味が全然無い感じが表れているようだしな。なんて言おうか……。
「余計な事を考えずに、真面目にお前の気持ちを伝えればそれでいいんじゃねぇの？」

うわ、なんだか恋愛マニュアル本のテンプレみたいな言葉が出ちまった……。
つくづく自分のセンスの無さを痛感する。しかしまだ十二歳になったばかりの果歩にはこんな言葉でも充分だったようだ。
「そ、そうですよね、私、頑張りますっ！」
そうそう、後は恋愛の神様が何とかしてくれるだろ。

――　ただ憂鬱なことが一つだけある。

俺の直感ではまぁ間違いなく果歩は失恋するだろう。十四も年下の、しかも小学生の教え子と付き合おうとする教師なんていうとは思えない。だから果歩が失恋したら、その後のフォローも引き続き俺がやるってことだよな……。チッ、厄介事のレベルがどんどん上がっていきやがる。これから向かう五十嵐って奴がどこかに出かけていてくれれば助かるんだが……。

五十嵐とやらのアパートは駅前から三駅先の近くにあった。
店で服を選ぶのに意外と手間取ったので時刻はもうすぐ午後四時になろうとしている。陽光はもう西日へと変わり始めていた。
「あのアパートの二階の左端なんです」
果歩が扉の一つを指差す。
今年の正月にクラスの仲間達と年始の挨拶がてら遊びに行ったことがあるらしいので、すでに場所は知っていたようだ。

「じゃあ俺はここで待ってるから行って来い」
「えっ！　一緒に来てくれないんですか？」
「当たり前だろ。横に保護者を立てて告る奴がどこにいるんだよ」
「そ、それもそうですよね……」
果歩はモックニットが入っている包みを胸の前に抱えて深呼吸をする。
「じゃ、じゃあ行ってきます！」
「おう、頑張れ」

……だが恋愛の神様って奴は結構残酷な奴だったんだな。この時舌打ちしたいほどにそう思った。
まだ十二歳の幼い女が一生懸命小遣いを溜めて買ったプレゼントを、初めて好きになった男に渡すチャンスすらも与えてやらないのかよ。

果歩がアパートの真下に行くと目指していた扉が急に開いた。
中から二十代後半の若い男と、セミロングの髪の女がもたれかかるように腕を組み、談笑しながら一緒に出てくる。女はかなりの美人だ。
たぶんこの男が五十嵐という教師だろう。そいつは扉の外に出るとすぐに果歩に気付いた。

「あれ？　森口じゃないか？　こんな所で何してんだ？」

どう見たってこの二人の関係はただの関係じゃないのは果歩にもよく分かったようだ。
果歩が胸の前で抱えていた包み紙がくしゃりと押し潰される音が小さく聞こえる。
五十嵐は軽い身のこなしでアパートの階段を降りてくると果歩の前に来た。

「どうした？　一人で来たのか？」
果歩は返事をしなかった。
……ここまでだな。俺はもたれかかっていた電柱から身を起こすと果歩の後ろに近寄り、その肩に手を置く。
「行こう、果歩」
果歩は頷いた。無言で。
「君は？」
まだ状況が飲み込めていない様子で五十嵐が問いかけてくる。
「こいつの兄だ」
それだけを告げると俺は果歩を引き寄せ、背を向けて歩き出した。
五十嵐は追って来なかった。きっといまだに意味が分からずに戸惑っているのだろう。
「……」
横で果歩が小さく震えている。
せめて告白してから振られれば、辛い気持ちは同じでも思い残すことも無くなったのだろうが、今のはあまりにもタイミングが悪すぎた。

駅に戻る途中で小さな公園の横を通りかかる。
このまま家に帰す前に少し落ち着かせた方がいいだろう。そう思った俺は公園の中に果歩を連れて入り、ベンチに座らせた。
「飲み物買ってきてやる。何がいいんだ？」
果歩は下を向いたまま返事をしない。そうだよな、今は何が飲みたいかなんて考えられる気分じゃねぇよな……。
待ってろ、と言い、果歩のベンチに残すと自販機を探す。少し離れた場所でちょうどオートセンサーが作動し、ライトが点いたばかりの自販機を見つけた。『ＨＯＴ』の欄から緑茶を買う。
転がり出てきた缶はかなり熱かった。時々手から放り投げながら

ベンチに戻ってきた俺は、果歩の五メートル手前で足を止める。

泣いていた。

柊兵くんの過激で追憶な週末　＜5＞

夕闇せまるベンチの後方に細く長く伸びる果歩の影。

小さく揺れている。

微かにだがしゃくりあげる声も聞こえる。

眼鏡を外し、手で顔を覆い、ひっく、ひっく、と両方の瞳から大粒の涙を零し、だがそれでも懸命に泣くのを堪えようと努力しているその姿が痛々しくて、それ以上側に近づけなかった。

眼鏡を外したせいでますます怜亜そっくりに見える。

……いや、もう今の俺には目の前ですすり泣くこの小さな女が怜亜本人にしか見えない。

それぐらい今のこの光景はあの時の光景とよく似ていた。

悔恨の情にかられ、苦い記憶が脳裏に甦る。

……あれは小学六年の修学旅行直前に怜亜が発作を起こした次の日の出来事だった。

出発を明日に控え、怜亜は昼過ぎに学校に出てきた。

「美月、柊ちゃん、ヒデちゃん」

怜亜は笑っていた。笑いながら言った。

「あのね、お医者さんが今回は大事をとって修学旅行に行かないほうがいいっていうの。だから私は修学旅行に行けなくなっちゃった。だから明日からみんなで旅行を楽しんできてね」

「う、うそでしょ、怜亜？」
一緒に行けると思っていた親友が急に行けなくなり、それを信じたくない美月の顔が大きな驚きの後に歪む。今にも泣きだしそうな美月に怜亜は優しく言った。
「私の分まで楽しんできて美月。そして帰ってきたらいっぱい修学旅行の話をして。私も行った気持ちになれるように。……ね？」
美月は泣くのを堪えて何度も頷く。
俺とヒデも旅行先で面白いネタがあったら怜亜に一番に教えようと誓い合う。

――　その日、怜亜は「図書室に用があるから」と言い、俺達に先に帰るよう促した。

「皆が旅行に行っている最中、退屈になると思うから本をたくさん借りようと思って」
俺達も付き合うと言ったが、怜亜に頑なに拒まれた。
「皆は旅行の最終準備があるでしょ？　早く帰って準備して。じゃあ気をつけて行ってきてねっ」
そう最後に言い残し、怜亜は扉の向こうに一人消えていった。
残された俺達は図書室の前で立ち尽くす。
全員が怜亜の胸中を察していた。だからこそ怜亜をこの場に残して帰りたくなかった。

「……帰るぞ」

だがそう最初に言い出したのは俺だった。
歩き出してすぐにヒデの足音が続く。だが美月がついてくる気配が感じられない。
振り返ると美月はまだ図書室の前で立ち尽くしていた。

「美月！」

俺の声はガランとした廊下を向う端まで突き抜け、そのルート上にあった美月の体を貫く。美月の体がビクンと震えた。

「行くぞ！」

「う、うん」

俺の催促で石化が解けたのかようやく美月もその場から離れた。美月は途中で何度も何度も後ろを振り返っていたが、俺もヒデも敢えて何も言わなかった。

その後、校門を出た俺らに会話は一切無かった。

ただ黙々と歩き、それぞれの家路への分岐点に近づくと「じゃあな」「じゃあね」とだけ声をかけあって別れた。誰も「明日な」とは言わなかった。

しかし美月やヒデと別れた後、俺はすぐに踵を返した。走って学校に戻り、真っ直ぐに図書室に向かう。

人気のほとんど無くなっていた廊下には古びた幽霊屋敷のような空気が漂っていた。そのせいなのか、知らず知らずのうちに足音を殺し、気配を消して廊下を進む。

図書室に着いた俺はゆっくりと扉を開けて中を覗いた。

中には怜亜以外誰もいなかった。

……泣いていた。俺の予想通り怜亜は泣いていた。

思えばこの頃から悪い予感はよく当たっていたんだ。

窓際の机に突っ伏している怜亜の小さな背中が、窓から差し込む燃え上がるような紅い夕陽で朱に染まっている。

かすかな泣き声に引き寄せられるように足音を立てずに室内に入り、すすり泣いている怜亜の前に立った。

俺の背が夕陽を遮り、自分の周囲が急に暗くなったことに気付いた怜亜が涙で濡れた顔を上げる。目の前に俺がいたので怜亜の顔が驚愕の表情に変わった。
柊ちゃん、とその唇から小さく涙声が漏れる。

でも俺は。

ただ怜亜の顔を見つめるだけでなんの言葉もかけてやれなかった。
慰めの言葉も、
労わりの言葉も、
何も、何一つも思いつかなかった。
それならせめて元気を出せ、というメッセージ代わりに頭を撫でてやるぐらいのことをしてやりたかったが、それも気恥ずかしくて出来なかった。

ただ黙って見つめるだけの俺としばらく目を合わせていた怜亜が急にまた机に突っ伏する。そして今度は大声で泣き出した。
その胸が張り裂けるような大きな泣き声はあまりにも切なくて、痛々しくて、堪えきれない辛さが伝わってきて、聞いていると逃げ出したくなるようないたたまれない泣き声だった。だがそうさせてしまったのは俺だ。

……結局、あの時の俺の行動はただ悪戯に怜亜を更に悲しい気持ちにさせただけだった。より深い絶望の淵に落としてしまっただけだった。
それが今でも俺の中でこんなにも尾を引いている。
現在目の前で声を殺して泣いている果歩の姿を怜亜に勝手にオーバーラップしている俺は、その思いを苦々しく噛み締めていた。

果歩はまだ泣き続けている。
ゆっくりと側に近づき、缶をベンチの端に置くと隣に座る。
顔を手で覆っていたが、気配で俺が戻ってきたことに気付いた果歩の体がピクン、と反応した。
もう泣くな怜亜……いや、果歩。お前らが泣いているのを見ると、マジで辛い。

手を伸ばし、果歩の小さな頭を優しく撫でてみる。
……だがこれは果歩の為じゃない。
当時の俺が怜亜にしたかったことを、今の俺が果歩を代役にして勝手にやっているだけなんだ。自分が楽になりたい、ただそれだけの為に。

「柊ちゃん……」

いきなり頭を撫でられたので果歩が両手を外し、驚いた目で俺を見る。
……悪ィ、子供をあやすみたいなこんな撫で方じゃ、お前の自尊心を傷つけちまったかもしれねぇな。
「ふぇぇ……っん……」
果歩の目にまた大粒の涙が浮かんでくる。

よし分かった。
好きなだけ泣け、果歩。
気が済むまで泣いていい。泣き終わるまでずっと側にいてやるから。
今日一日が完全に潰れてしまったが、俺はもうそんなことはどうでもよくなっていた。

・―――・―――・―――・―――・―――・―――・―――・―――・

軽く三十分は泣いていたな。

「ご迷惑かけてすみませんでした……」

ようやく涙が枯れた果歩が俺に丁寧に頭を下げた。可哀想に、完全に鼻声になっちまってる。

「気を落とすな。世の中いい男は一杯いる。お前は可愛いから大丈夫だ」

と口下手な俺なりに精一杯慰めてみる。怜亜の時もこんな風に何か言葉をかけてやりたかった、と強く思いながら。

俺に可愛いと言われ、眼鏡をかけようとしていた果歩の頬がみるみるうちに赤くなる。

「あ、ありがとうございます……。しゅ、柊ちゃんってそういうお世辞が言えるんですね、ちょっと意外でした……」

お世辞だと？　いや果歩それは違う、と否定しようとしたが、

「あ、あの、柊ちゃんっ！」

果歩はベンチの上で俺に大きく身体を向けると勢い込んで捲くし立ててきた。

「あのっ、すっごく、すっごく失礼なことだとは思うんですけど、これを貰ってくれませんか！？」

顔の前に本来は別の男に渡されるはずだった包みが差し出された。

返品すればいいだろ、という言葉が喉元まで出掛かったが、果歩の気持ちを考えるとそれは言い出せなかった。
「お店に返すのも、お店の人に迷惑かけちゃうからしたくないし、でもこのまま捨てちゃうのも服が可哀想だから……」
果歩の声のトーンがまた沈む。
だがそれを振り切るように果歩は俺に再度強く懇願する。
「だからお願いです！　これ、柊ちゃんが貰って下さい！」
果歩が思い切り抱えこんだせいで、たくさんの折り皺がついてしまった青色の包み紙をしばらく眺める。果歩の受けたショックがこの折り皺の一つ一つに分散されている。

「お願いです！」

果歩の必死な声が俺を突き動かした。
「……本当に俺が貰っちまっていいのか？」
「はい！　服も喜びます！」
「分かった。じゃあ今着る」
「エッ！？　今着るんですか！？」
「あぁ。開けてくれ」
ここで完全に気持ちの踏ん切りをつけさせるために敢えて俺はそう言った。
俺が包みを開けるのではなく、果歩に開けさせようとしているのもそのせいだ。
包みを裏返し、果歩は少しの間だけそれを見つめていた。やがて店名入りのテープを小さな爪で剥がし出す。

そうだ、それでいい。そして今日限りで忘れちまえ。

中からプラム色のモックニットが出てくる。ベロアシャツを脱ぎ、代わりにモックニットを着ると、上半身はカーキからプラムの色に

変わった。
「あ、柊ちゃんってこの色もよく似合いますね！」
「そうか？」
果歩にはそう言ったが、実は俺も内心この色は悪くない、と思った。プラムなんて今まで選ぶ色ではなかったが着てみるとまた違うもんだな。

外はかなり暗くなってきている。
携帯電話を取り出し、ディスプレイに目をやると時刻は午後五時半になろうとしていた。
「もうこんな時間か……。果歩、お前今日俺の所に行くって誰かに言ってきたか？」
果歩が首を横に振る。
「じゃあ心配しているとまずいから連絡入れろ。これから帰るからって。ほら」
携帯を手渡す。果歩は「すみません、お借りします」と言うと、おとなしく電話をかけ始めた。
「もしもし……あ、お姉ちゃん？　うん。私。……ごめんなさい……。うん、うん……ごめんなさい……」
怜亜が心配していたのだろう。怒られているようだ。あのおとなしい怜亜がどうやって果歩を叱っているのか興味が湧いた。
「うん……。え？　あ、あの、その、え、駅前。……うぅん、一人じゃない。えっとその……今は公園にいて……」
果歩は言いにくそうに言葉を濁している。あの五十嵐という教師との今回の一件は言いたくないのだろう。「貸せ」と言い、俺は果歩から携帯を取り上げた。
「怜亜か？」
「え……？　柊ちゃん？」
携帯の向こう側から驚いた声が聞こえてくる。
「あぁそうだ」

「どうして柊ちゃんが果歩と一緒にいるの？」
「今日俺が駅前でぶらぶらしていたら果歩とばったり会ってな、ヒマだったからそのままあちこち連れ回しちまったんだ。こんな時間まで連絡入れなくて悪かった。俺が全部悪い。叱るなら俺を叱れ。それでこれから家までちゃんと果歩を送るから心配すんな」
「そうだったの……。ごめんね柊ちゃん、果歩が迷惑かけちゃったんじゃない？」
「いや、全然だ」
すると不意に怜亜がくすくすと笑い出す声が聞こえてくる。
「柊ちゃん、果歩とどこでデートをしたの？」
「……まぁ色々だ」
「今度は美月と私も連れて行ってね！」

おいそんな気軽に言うな。返事に詰まっちまう。

「と、とにかくこれから果歩を送っていくからな」
「うん。ありがとう柊ちゃん。じゃあ待ってるね」
「あぁ。じゃあな」
携帯を切ると果歩が唖然とした顔で俺を見ている。
「ど、どうしてですか柊ちゃん……？　柊ちゃんは何も悪くないのに『俺が悪い』って……」
「あぁいいんだ。そういう事にしとけ。怒られるのは一人でいいだろ」
「で、でも怒られるなら私です」
「いや、いい。果歩からこれも貰ったしな」
と言いつつ今着ている服に俺が一瞬目を落とした瞬間、
「柊ちゃんっ！」
と再び瞳を潤ませて果歩が俺の首っ玉にかじりついてくる。

「柊ちゃん！　私っ、お姉ちゃんが柊ちゃんを大好きなの、今日一日で本当に、本っ当によく分かりましたっ！！」
薄暗い公園に涙の乾いた果歩のでっかい声が響く。
姉さんに似てお前も結構切り替えが早いんだな。でも今はそれでいい。
「よし、帰るぞ」
ベンチから立ち上がり、暮れ始めた歩き出す。
何気なく紅い夕空を見上げると、ついこの間の時と同じように白い光を強く滲ませて浮かぶ一番星を見つけた。

――　もし、今日『モーニング・スクランブル』が放映されていて、
あのおたふく&おかめコンビが今日の運勢を発表していたとしたら――。

ふとそんな事を考えた。
もしそうならＴＶから流れるＢＧＭはたぶん運命ではなかったはずだ。
そんなほぼ確信に近い予感が俺の胸の中をよぎっていった。

“　相互親睦　”　しましょう！　<1>

……月曜の朝はかったるい。
ただでさえ気が滅入る曜日なのに、加えて曇天ときている。
しかし今週で九月も終わりか。早いもんだな。
机に頬杖をつき、欠伸をかみ殺しながら何とはなしに校庭を眺めていると、俺らC組の担任、毛田保（もうだたもつ）の甲高い声が俺の許可無く勝手に鼓膜に侵入してきやがった。

「ウフッ、さぁさぁ皆さぁ～ん！　特に男子の皆さんお待ちかねのあの行事が今年もいよいよやってきましたわねぇぇ～ん！」

何度見ても気色悪ィ……。
まだ朝のＨＲが始まったばかりだというのにもううっすらと青髭が伸びてきているその顔に加え、教壇の横で腰を左右にくねらせる毛田の奇怪な動きに、精神不快指数は一気にＭＡＸに達した。
だがなぜかこの毛田の発言の後、男共の勇壮な雄叫びが次々に上がり、教室内に急激に活気が満ち始める。その様子を満足げな締まりのねぇ顔で見回し、再び毛田が口を開いた。
「今から“　フレンドシップ・フェスティバル　”　のプリントを配りますのでぇー、じぃぃ～っくりと、見てちょうだぁぁぁ～～い！」

――　あぁ、なるほどな……。
今年もきたのか、銀杏高の十月の最大イベント、『相互親睦祭典（フレンドシップ・フェスティバル）』が。

影では“　百花の宴　”　やら“　狂乱祭　”　などとも呼ばれているこの祭典は、【銀杏高校友好実行委員会？】が主催するイベントだ。
この祭りは、「教師と生徒、その心の垣根を飛び越え、お互いの距離を縮めあいましょう」という、まぁ言ってみれば一種の無礼講を目指して始まった、触れ合いを高めることが目的の、一日だけの祭典だ。この高校は設立されてまだ歴史が浅いせいなのか、何事にも前衛的でこういう訳の分からない行事が普通に存在していたりする。

ちなみにこの祭典の基本理念は、＜教師と生徒が楽しく過ごせる空間＞、それを生徒側が作り出すことにあるらしい。
前例があまり無い分、少々ぶっ飛んだ企画が飛び出してくる年も過去にあったらしいが、しかしここしばらくは教師と生徒が共に投票する、『校内一美人コンテスト』という、巷でよくありがちな企画を馬鹿の一つ覚えのように毎年開催していたので、

「目新しさが無さ過ぎる」
「今年はもっと斬新な企画を！」

と今年の友好実行委員会は生徒達に懇願されていた。
そしてその熱い声を聞き入れた委員会が、今年の祭典の主要（メイン）企画を恒例の『美人コンテスト』から、『美男（イケメン）を探せ！』という企画に変更する、と発表したのは二ヶ月前のことだ。

――　が、しかし。

その案が発表された途端、わずか数日でその案は怒りに目を血走らせた男子生徒達の暴威のクレーム攻撃であっけなく却下されるこ

とになる。この高校は男が六強、女が四を切る男女比率なので、男の発言力の方が圧倒的に強いのだ。

「壇上にずらりと野郎を並べてどうすんだ！　このタコ！」

「この企画を立てたのは女か？　こんなくだらねぇ企画を立てるヒマがあったらとりあえず水着だ！　水着ショーをやれ！」

「――　いいからとにかく脱げ。
話はすべてそれからだ」

……等、委員会が玄関中央に設置した目安箱には匿名をいいことに、数々の飢えた野獣共の魂の雄たけびがその箱から滝のように溢れ出たとも伝え聞く。

一転して立案を白紙に戻されてしまった男四名、女二名の実行委員達は再び意見調整を始めたがなかなか纏まらなかったようだ。

――　そしてここから目まぐるしく事態は展開する。

その後、委員会の意見は男女に分かれて二極化したらしい。

それぞれに譲れない業（カルマ）を背負った両陣営。会議は時を追う毎に紛糾、やがて両者はお互いを嘲笑うようになる。

膠着状態に耐えかねた男サイドがついに、

「俺達は女生徒（おまえら）達の美しさを心から賛美したいだけだ！」

と心情を吐露するも、

「ハッ、結局あんたらはあたし達のカラダをその腐った目で舐め回したいだけでしょ！」

と冷たくその嗜好性を罵倒。

結果、共に逆上した両陣営は席を蹴り上げ、激しく角を突き合わし、混迷の度合いを大きく増しながら、ついには修復不可能なほどの決定的な軋轢が生じるまでの内紛に発展していったらしい。

――　結果、ここで起きたまさに血で血を洗うような抗争は、敢闘空しく数の論理で女側が負けた。

先月の全校集会で銀杏高校一、冷静沈着な男と言われる友好実行委員長の橋立栄（はしだてさかえ）、奴が壇上で拳を固く握り締めて涙ながらに語ったその姿はまだ記憶に新しい。

「皆さん！　この闘いは男と女、それぞれの感性をお互いが殉教覚悟で必死に貫き通そうとした、【聖戦（ジハード）】でした！！」

その直後に体育館内に男共の野太い声で橋立の名のシュプレヒコールが沸き起こったあの日の情景は、後に銀杏高校の武勇伝の一つとして長く語り継がれていくことになるだろう。

――　その後、敗者となった女の委員二名は「やってられないわ」と委員会を自主的に去った。

残った四名の精鋭達は己らのリビドーを上手く企画にまで昇華することに成功、そして教師達がそのチェックを行う最後の難関、≪審査会≫を昨日無事に突破したというわけだ。

「ほい柊平くん。どぞ！」

前の席のシンから回された祭典内容のプリントに視線を落とす。

【第十二回　銀杏高校　相互親睦祭典（フレンドシップ・フェスティバル）】

祭典概要

・　来たる十月十五日に行われる、今年の相互親睦祭典は本校体育館で行う。

・　各学年、各クラスは最低二名、最高四名までの女子生徒を“仮装給仕嬢（コスプレウェイトレス）”要員として九月二十九日までにすみやかに選出すること。

・　飲食スペースとして開放された体育館内で先生方や我々生徒が楽しく歓談に興じられるよう、選ばれた仮装給仕嬢の皆様には飲み物等を運ぶ重要な役割を任命する。

・　相互親睦祭典中に一人一票の人気投票を行い、見事一位を獲得した仮装給仕嬢には盾と賞金一万円を進呈。

・尚、仮装のジャンルは一切制限無し。
各クラス、各仮装給仕嬢の裁量に委ねることとする。

――以上――

第十二回　銀杏高校相互親睦祭典
友好実行委員会?代表　　橋立　栄

「うおおぉぉぉぉぉぉ――――――っっ！　オレの時代が来たぁぁぁぁ――ッッ！」

ブリーチヘッドをきらめかせて机の上に立ち上がり、拳を作って絶叫しているのは将矢だ。
間髪入れずにクラスの男共の大多数が皆こぞって将矢に習い、絶叫、絶賛、感涙し、この先、その身で体験出来るであろうその至幸に手を取り合い、多くの者が抱き合って酔いしれている。
そんな男共の歓喜の様子に触発され、

「あぁんっ！　皆さんがそんなにやる気を出してくれて先生も、先生も嬉しいいいいいっっ！」
と両腕を自分の体に巻きつけ、教壇の上で一人悶えているのは毛田。……はっきり言って異様な光景だ。
「じゃあ張り切って次に行きますよぅ～！　早速だけどぉ、これからどの女子がこのクラスの代表になるのか、投票を始めますぅ～！
さぁこれから配る用紙に我がクラスの麗しき代表を二名以上選んでこの箱に投票して下さいねぇぇぇ～っ！」
毛田がこう告げた瞬間、

「おおおおおぉぉぉぉぉぉっしゃぁぁぁぁぁぁ――っ！！」

教壇に生徒が怒涛の勢いで群がった。
……ただし、群がっているのは男だけだ。女はほぼ全員、露骨に嫌そうな表情を浮かべてドン引きしている。
「ちょっ、ちょっと！　男子の皆さん！　用紙は今からちゃんと配るから席に座っていてちょうだいっ！」
慌てた毛田が必死に男共を牽制するが、すでに野獣と化している野郎共に人語を理解することなどすでに不可能だ。千手観音の如く、投票用紙の束に群がる無数の手、手、手。

「テッメェーッ！　何人たりとも俺様の前に割り込むんじゃねぇっ！！」
「うるせぇっ！　今年こそオレの野望を成就させるんだぁぁぁぁぁーッ！」
「いいから用紙をををっ、オレにその用紙をををををををを――ッ！」

――　教壇前は阿鼻叫喚、すでに下克上状態だ。
椅子から立ち上がり歩きかけたシンが、俺の方に半身をひねる。
「お？　柊兵くんは投票しないのかい？」
馬鹿らしくて参加する気など起きないので完全無視を決め込む。
俺がそっぽを向いたのでシンは小さく笑い、「そっか」と呟くとあっさりと教壇の方角へ去っていった。
投票後すぐに開票されたようだが、ずっと外を眺めていたので代表に誰が選ばれたのかもよく分からなかった。興味もねぇし、どうでもいい。

……そういや、こういう類のことにはいつもなら将矢と一緒に真っ先に盛り上がるシンも淡々と投票していたな。珍しいこともあるもんだ。

“　相互親睦　”　しましょう！　<2>

私立銀杏高校のリフレッシュルーム。
この場所は学園的にかなり力を入れているらしく、学園紹介のパンフの中でも不相応なくらいのスペースが取られている。
ここのご自慢は、深緑が生み出すマイナスイオンと化学的には同じものを発生させるというオゾン発生器が設置してあることだ。爽やかな空気を充分に堪能できるということなら、怜亜には最適の場所だな。
床や壁、椅子やテーブルは白を基調としたインテリアで、洒落たカフェにいるようだという意見が多い。だがあまりの白色のオンパレードに、一部ではまるで隔離病棟みたいだという意見もあると聞く。

仕上げは室内に流れているクラシックだ。なんでも情操教育の一環らしい。
ここは別の場所にある食堂はがやがやと常にうるさく、券売機や受け渡し口は食い物を求めて群がる昼食難民達で溢れているが、このリフレッシュルームはそんな喧騒とは一切無縁の、良く言えば落ち着いた、悪く言えば取り澄ました場所だ。
弁当持参組は大抵の生徒が教室や校舎外のどこか見晴らしのいい場所で食べるが、中にはこの気取った場所で食事を取る者もいる。クラスは別々だが、でも昼は一緒に校舎の中で食べたいという奴らがこの場所を主に利用しているようだ。

……そして俺も、シンの策略によって今日からこの場所を利用することになっちまった一人だ。
渋々、いつものメンバーとそこへ昼飯を食いに向かう途中、シン

が一人ソワソワしていることに気付く。
「おい、シン。お前さっきから何を浮き足立ってるんだ？」
「柊兵は全然気にならないのか？」
「何がだ？」
「狂乱祭のコスプレウェイトレスの件さ」
「俺、投票しなかったから知らねぇ」
「あー違う違うっ！　俺らのクラスの娘じゃなくてD組だってD組！」
シンは嬉しそうにうざったい長髪を掻きあげながら恍惚の表情を浮かべる。
「D組は間違いなく美月ちゃんと怜亜ちゃんが選ばれるだろ？　二人が一体なんのコスプレするのかな～って考えるだけで俺のこのピュアなハートがトキメくってもんですよ！」

自然に足が止まった。

「……ちょっと待て」
「なんだい？」
「美月と怜亜があんな訳の分かんねぇもんに出るのか……！？」
「もちろんそれは決まりでしょう！　だってD組であの子達より可愛い子なんていないじゃん！　柊兵くんもそう思うだろ？」
う……反論出来ねぇ……。

じゃあ何か、あいつらはこの馬鹿げた仮装大会に出るのか！？
去年の「美人コンテスト」で壇上に上がった女達を下から舐め上げるように見上げ、熱視線を注ぎ続ける男共の飢えた目を思い出した。あんな野獣共の視線渦巻く中に美月や怜亜が放り込まれるのか……。

もしあいつらが選ばれていたのなら辞退しろ、と進言すべきかと考えながらリフレッシュルームに入る。

「柊兵～っ！」
「柊ちゃん！」

美月と怜亜はもう先に来ていた。
それぞれ大きく手を振った後、俺の元に駆け寄ってくる。
「はいは～い！　じゃあ柊兵、まずはこっちに来てー！」
「柊ちゃんの席はここよ。座ってね」
こいつらの手で半ば無理やりに席に座らされた次の瞬間、俺の前にデカい三段重ねの重箱がビッグウェーブの如く一気に押し寄せてきた。
「はいっ柊兵！」
「どうぞ、柊ちゃん！」
「な、なんだ、これは！？」
「柊兵のお弁当だよ！　だって柊兵、今日お弁当ないでしょ？」
「一杯作ってきたからたくさん食べてね、柊ちゃん！」

――　重箱を前にしばし黙考。
確かにこいつらの言う通り、俺は今日弁当を持ってきていない。
今朝、母親から購買で何か買って食べろと言われている。
だが一つ腑に落ちないのは、なぜこいつらがそれを知っているのかということだ。

美月が「じゃーん！」と言い重箱の蓋を開けると、中には絢爛豪華な惣菜が所狭しと詰められている。
それを横から覗き込んだ将矢が、
「うぉー！　すっげーっっ！　昼からこんなに豪勢な弁当かよっ！」
とデカい声で叫びやがったので休憩室中の注目を浴びる羽目にな

っちまった。
あちこちから色んな視線が一斉に自分に降り注がれているのを感じる。一体どんな羞恥プレイなんだこれは。
断固拒否の態度を取ろうとしたが、こいつらが無邪気な顔で嬉しそうに俺の顔を見上げているので情けねぇことにそれを言い出せない。よって違う角度から拒否の姿勢を見せることにする。
「こ、こんなに食えるわけねぇだろっ！」
すかさず美月が無責任な太鼓判を押してくる。
「そんなことないよ！　柊兵なら食べられるって！」
「無理だっ！」
「だいじょーぶだいじょーぶ！　じゃあ元気よく行ってみよー！
あ、柊兵、お茶飲む？」

……おい美月、お前はなから俺の言う事を聞く気が全然ねぇだろ……。

俺と美月のやり取りを見守っていた怜亜が「あのね柊ちゃん」と口を開く。
「残してもいいからとりあえず食べて？　美月と私で今朝の六時から一生懸命作ったの。……ね？」
ここで椅子に座っていたシンが急に立ち上がった。
「いやはや、いつもながら泣かせられるねぇ～、この健気な天使ちゃん達にはさ！　では微力ながらこのワタクシがお手伝いさせていただきましょう！」
シンが給仕（ボーイ）のような優雅な物腰でその重箱フルコースを一段ずつバラして俺の目の前に横一列に綺麗に並べ始めた。そして「ごゆっくり」と耳元で囁くとニヤリと笑う。

そうか、分かった……！
恐らく金曜の夜あたりにこれから俺らとリフレッシュルームで昼

飯を食うことになったとまず怜亜が美月に話し、それを聞いた美月が土曜に俺の家に来た時に今日の弁当を作らないでくれと母親に頼んだんだろう。そしてここまでの一連のシナリオを書いた奴はすべてこいつ――、シンの野郎に違いない……！

「ほら、食べて柊兵！」
「はいっ、柊ちゃん！」

突如、顔面数センチ先に食物が登場する。
美月は鶏肉のレモン煮とやらを、怜亜は小松菜入りの出し巻き卵を箸でつまんで、俺が口を開けるのを待っている。
……この身が今すぐに溶けて蒸発し、大気中に気化できたらどれだけ幸せだろうと一瞬本気で考えた。
そこへ最後のトドメとばかりに、美月と怜亜のピッタリと息の合った「あ～んしてっ！」というハモリ音。
「ほらほら柊兵くーん、早く大きな口を開けて“　あーん　”してあげなくっちゃ！　可愛い女の子を待たせちゃいけないよ？」
俺の向かいに座り、ニヤニヤと笑いながらシンが再び俺を茶化す。

――　いや、ニヤニヤと笑っているのはシンだけじゃねぇ。

ヒデも、尚人も、そしてこの室内にいる他の奴らも全員だ。ただ、唯一、将矢だけからは羨望に似た視線を感じる。畜生……どう足掻いてもこの状況から逃れる術はなさそうだ……。
憔悴しきった顔で口を開けた俺の口中に最初に入って来たのは鶏肉か出し巻きかなんて覚えていない。
口を開ける度に湧き起こる仲間達の冷やかすような歓声。ひたすら耐えるしか無い。
もしタイトルをつけるならこれは本日最大の見世物、怒涛の餌付けショーってとこか？

とにかく今は自分に与えられた役を忠実に実行するしかない。一心不乱に餌をついばむ食用養鶏（ブロイラー）になりきり、次々に与えられる食い物をひたすら咀嚼して嚥下するだけだ。
おかげで美味いか不味いかすらもほとんど分からなかった。

「さーて食事も終ったことだし、美月ちゃんに怜亜ちゃん！　ちょっと聞いてもいい？」

餌付けショーが一段落するのを待ちかねていたように、シンが両手を振って美月と怜亜の視線を自分に寄せた。
「お二人はさ、相互親睦祭典で何のコスプレするの？」
狂乱祭の話題になったので将矢の目が急に輝き出す。
「おぉ！　俺も知りたい知りたい！　教えてくれえええぇぇぇ！」
「あぁ、あれね……」
と怜亜にチラリと視線を送った後、美月が興味の無さそうな声で答える。
「それって来月にやるヘンなお祭りのことでしょ？　でもコスプレはしないよ。あたしも怜亜も」

「なんだってえええええぇぇぇ――！！」

血相を変えたシンと将矢が椅子を蹴倒して立ち上がる。
「うっ嘘でしょ！？　君達が出ないで誰がD組の代表になるっていうのさ！？」
「そうだ！！　それはおかしい！！　絶対にありえねぇよ！！」
「二人がそう言ってくれるのは嬉しいんだけどねー。実は今朝さ、クラス委員長の……あれっ、あの人なんて名前だったっけ、怜亜？」
小首を傾げて怜亜が答える。
「本多くん？」

「あ、そうそう！　その本多って人から頼まれはしたんだ。でもコスプレなんか別にしたくないもん。怜亜も恥ずかしいっていうし、断っちゃったってわけ！」

「ＯＨ……ジーザス……！」

「俺の……俺の時代はここで終わった……」

立ち尽くしたまま天を仰いで悔しそうに呟くシンと、その横で床にガックリと両膝をつき、真っ白に燃え尽きた将矢の様子にたまらず美月が吹き出した。

「あははっ！　ねぇシン、将矢、そんなにあたし達のコスプレを見たいの？」

「はいっ見たいですっ！　もう誰よりも何よりも見たいですっ！　もし美月ちゃん達が出てくれたらさ、俺ら絶対お二人に投票するよ！　なぁ将矢！？」

「するするする！　あったりまえじゃん！！　絶対にするよ！！　だから怜亜ちゃんも考え直してくれって！！」

美月は「ふぅーん」と呟くと俺の方に顔を向ける。

「あのさ、実はウチのクラス、結局女の子の代表がまだ決まってないんだよね。柊兵はさ、もしあたし達が出たら投票してくれる？」

「俺は投票しねぇ」

「なんで？」

「……お前ら、そんな媚びを売るような下らない格好をして男の間をうろつき回って楽しいのか？」

俺のこの言葉に、頬杖をついて俺らを見ていた尚人が横から「ハハッ、柊兵、嫉妬してるんだろ？」と爽やかな笑顔でツッコんできた。

「ちっ、違う！　下らないと思うから下らないと言ったまでのこと

だ！」
「相変わらず素直じゃないなぁ……。ま、それは前から分かってることだけどね」
尚人は小さく声を殺して笑いながら、ジャケットの胸ポケットに差していたボールペンを抜き取り、そのペン先を俺の左隣に座っていた怜亜にスッと向ける。
「さぁ怜亜ちゃん」
「は、はいっ？」
尚人にいきなり名指しを受けて驚いたのか、授業中に不意打ちで当てられた生徒のように怜亜は一瞬背筋を真っ直ぐに伸ばす。
「ホラ、“　柊ちゃん、私、思い切って相互親睦祭典に出てみようかな？　”　って言ってみてごらん。きっと柊兵、真っ青な顔になって必死に止めると思うよ？」

「エッ……！？」

尚人の言葉を真に受け、頬を桜色に染めて俺の方を何度もチラチラと見ながら急にもじもじし始める怜亜。
……ったくなんて単純な奴だ……。俺の読みでは後三秒後には間違いなく言い出すと見た。
するとシンがいきなり俺の背後に回り、今にも全力で抱きつかんばかりの勢いで熱弁をふるい出す。
「なぁ柊兵く～ん！　頼むから君もそんな意固地にならないでさ、俺らの陣営について二人を説得してくれよ！　君がこの計画のキーマンなんだぞ！？」
「断る」
「それに柊兵くんだって本当は見たいだろ？　美月ちゃんのバニーガール姿とか、怜亜ちゃんのメイド服姿とかさ！　きっと“　あぁ、生きててよかった！　”　って心の底から思えるって！　なぁ頼むよ兄弟ッ！」

「お前と兄弟になった覚えはない」
「じゃあ盟友でも朋友でもなんでもいい！　だから頼む、説得に加わってくれって！」
「ねぇシン、あたし今ちょっと思ったんだけどさ」
自分の髪を人差し指に巻きつけながら美月が口を挟む。
「それなら別にお祭りに出なくてもさ、柊兵にだけコスプレを見せればいい話だと思うんだよね」
「へ！？」
呆然とするシンの横で薄笑いを浮かべたヒデが「なるほど。真理だな、美月」と呟く。
「でっしょー？」
とヒデに向かって笑みを見せた後、
「じゃじゃーん！　というわけで柊兵っ！　柊兵は何か見たいコスプレある？　あたし、柊兵のリクエストならどんな格好でもしちゃうよー！」
髪から手を離し、勢い込んだ美月が上半身に付属している例の特上メロン二玉をこっちにグイと寄せてきやがった。
「おっ、お前のコスプレなんて見たくねぇよ！」
「まーたまた遠慮しちゃってさー！」
「してねぇ！」
「場所どこにする？　やっぱ柊兵の部屋？　どうせなら生着替えも見たいでしょ？」
「バッ、バカか、お前は！！」
……しかしこいつは照れとか恥ずかしいとかの観念を持っていないのか……。
右から超接近してくる胸（メロン）をかわすために大きくのけぞると、

「柊ちゃん……」
左隣の怜亜が俺の制服をそっとつまんできた。
「な、なんだ？」
「わっ、私……、フレンドシップ・フェスティバルに出てみようかな……？」

――　おい、今頃きたか。

すると突然ダンッと激しい音が鳴り、白テーブルの表面が震える。
「ちッくしょうッッ……！」
俺らのやり取りを見ていたシンが拳を強く握り締め、テーブルを強く叩いた。
「どうしてっ、どうして柊兵くんばかりが……っ！　よしっ！　俺、やっぱりこれから真実の愛を探すことに決めましたッ！！」

……だからシン、お前のその台詞は一体何度目なんだ。

“　相互親睦　”　しましょう！　＜3＞

今回の祭典の企画が高らかに発表された後、各学年、各クラスの対応はどこも迅速だったらしい。

仮装給仕嬢（コスプレウェイトレス）に選ばれた女子の代表名を三日以内に友好実行委員会に届け出なければならなかったのだが、告知二日目の今日にはわずか一クラスを残し、他はすべて遅滞することなく速やかに登録（エントリー）してきたそうだ。

現在、教壇の前で妖しげな腰使いを披露しながら毛田がそれを熱心に説明している。どのクラスも本気で鼻息が荒そうだ。

いや、そんなことよりもこのＨＲが終わったら即行で教室を出ねぇとな……。

最近、美月（あいつら）と怜亜に帰りまで待ち伏せされている身としては、とにかく迅速に動く事が肝要だ。

「では皆さぁぁ～ん、また明日元気にお会いしましょうねぇぇ～～！」

毛田のこの声と同時に急ぎ足で教室を出ようとした途端、すかさずシンが立ち塞がり、行く手を遮りやがった。

「おやおや柊兵くーん、もしかしてもうお帰りですかぁー？」

「授業が終わったんなら帰るのが当たり前だろうが」

「そんなつれないことを言わないでさ、もうちょっとここでゆっくりしていきなよ？　ホラ、俺と一緒にＵＮＯでもやらないか？」

「なんでお前とそんなモンをやらなきゃなんねぇんだ」

「だってＤ組がまだＨＲ終わってないみたいだからさぁ」

シンは意味ありげに後ろの戸口に視線を送る。

するとそこにはいつの間にか廊下に首を突き出した将矢がスタン

バイしていて、「まだダメだ！」とこちらに向かって両手をクロスさせていやがる。……ったく、こいつら……。
「あ！　柊兵くん！　マジで帰っちゃうのかよ！？　天使ちゃん達はどうするんだ！？」
シンの呼びかけを無視して前の戸口から廊下に出る。そして足早に歩き出した時、

「あぁ原田くん！　いいところで会ったよ！」

と見知らぬ男から話しかけられた。
目の前に立つ、ひょろっとした青白い顔の眼鏡男。全く記憶に無い。
「……誰だお前？」
普段シン達以外で俺に話しかけてくる奴はそうそういないのだが、珍しいこともあるもんだ。
「僕は隣のD組で委員長をやらせてもらっている本多だ。よろしく。で、早速で申し訳ないんだが、君に話しがあるんだ。少々時間をいただけるかい？」
「何の用だ？」
「場合によっては公にはしたくない話になりかねないんだ。だからどこか人気のない場所で話したいんだが……」
こんなウラナリ野郎と物陰で二人きりで話すなんてゾッとしない。
「俺は構わねぇからここでしろ」
「ここで、かい？　ふむ……」
本多とやらは大勢の生徒が行き交う廊下を見渡す。
「まぁ、君がそう言うならいいや。ではまずこれを見てくれ」
そういうと本多は俺に一枚の紙を手渡した。紙面の文字を読んでみる。

【 第十二回　銀杏高校　相互親睦祭典（フレンドシップ フェスティバル）　祭典内容一部追加 】

1．　今回の相互親睦祭典に、男子生徒も「給仕（ボーイ）」として選出することとする。

但し男子生徒は各学年、各クラスから一名ずつのみとする。

※　男子生徒は仮装（コスプレ）不可。全員黒の給仕服を着用すること。

（尚、給仕は投票対象外とする）

2・　会場内の仮装給仕嬢達の身の安全を守るために、「護衛（ガーディアン）兵」を若干名

選出する。

※　護衛兵は友好実行委員会で選出し、対象者に直接依頼する。

――　以上　――

銀杏高校第十二回相互親睦祭典
友好実行委員会？代表　橋立　栄

「……これがどうかしたのかよ？」
「先ほど刷り上ったばかりの友好実行委員会？からの告知文だ」
と本多はその薄っぺらい胸を張る。
「そんなの見りゃ分かる」
「原田くん、僕はD組のクラス委員長だが、友好実行委員会？の一人でもあるんだ」
「だからそれがどうしたってんだよ」
「実は今回の相互親睦祭典を開催するに当たってある障害が出てきてね、その障壁を取り除く為に今回の祭典内容の一部を追加するはめになったのさ。今その打ち合わせが終わったところなんだが……あ、これはここだけの話にしてくれよ？」
そう言うと本多は小声で委員会内で起きた内部抗争の後日談を語り出した。

――なんでも一旦は可決され、開催に向けて順調に動き出した仮装企画（コスプレプロジェクト）が、
「この企画じゃ、あんた達だけ楽しんでズルイ！！　私達にも目の

保養をさせなさいよ！！」
と女子サイドからクレームがついて妨害行為を受けるようになったというのだ。
どうやら友好実行委員会を自主的に去った二名の女子委員が他の女共を扇動し、企画自体を頓挫させようと画策し出したらしい。

当然、残っていた本多を含む委員会の連中は必死にその対応に当たった。
女子生徒共（ゲリラ）に和平協定を求め、委員長の橋立とやらが交渉人（ネゴシエーター）となり、直ちに交渉に入る。
交渉は難航したものの、男側からも見栄えのいい給仕係を出せという女共の要求をほぼ呑んだ形で双方最終的には合意に達し、その後、両者は速やかに和平協定書に調印。
そして急遽全校生徒へ向けて新たなこの告知文が作成されたんだ、と本多は俺に熱く語る。
「……話は分かったけどよ、それが俺とどういう関係があるんだ？」
「フッ原田くん、まだ分からないのかい？　君、鈍いね」

本多のその言い方に脳内の一本目の弦が切れる音がする。
俺の目つきが鋭くなったことに気付いた本多が慌てて両手を振り、
「失敬失敬っ」と謝った。
すかさず二本目の弦が切れる音。
今こいつは間違いなく　＜破滅（デス・ロード）への道＞　を突っ走っている。

「じゃ、じゃあズバリ用件を言わせていただくよ！　あのさ原田くん、君にここに書かれてあるガーディアンになってほしいんだ」
「ふざけんな！　なんで俺がそんなモンをやらなくちゃいけねぇんだ！？」
「だって君、ここに入学して早々にすごい事をやらかしただろ？
たった一人で上級生五人を潰したそうじゃないか。君なら護衛兵に

最適だ。もし君が引き受けてくれたら数名採用しようと思っていた兵隊もたぶん君一人で大丈夫だと思うし」
「断る！」
「そう言わずに頼む、原田くん！　友好実行委員会からだけじゃなく、Ｄ組のクラス委員長としても是非に君に頼みたいんだ。もし君が護衛兵を引き受けてくれたら、風間さんと森口さんが仮装給仕嬢を了承してくれることになっているんだよ」
「何ィーッ！？」

生命の危険を感じたのか、本多の口調が更に早まる。

「わわわっ、原田くん、そんなに凄まないでくれよ！　平和的に行こう、平和的に！　時代はＬｏｖｅ＆Ｐｅａｃｅだよ！？」
「うるせぇっ！！　お前、今何て言ったッ！？　美月と怜亜がコスプレ祭りに出るだと！？」
掴みかかろうとした俺の手を紙一重でかわすウラナリ。
「じっ、実は昨日の朝に風間さんと森口さんに代表を頼んだんだけど引き受けてもらえなくって、そこを何とかって再度食い下がったらさっ、君がコスプレを嫌がっているから絶対に出ないって言うんだよ！　それで僕は閃いたわけさ！　君があの二人を守ればいいんだ、ってね！　あの二人にもさっきこの案を話したら、君がガーディアンを了承したら祭典に出るって約束してくれた。だから頼むよ、原田くん！」
「断るっ！！！」

――　三本目の弦が切れる音。
俺の脳内の弦はギターでは無くベース仕様だ。つまり、残された理性の弦は残り後一本。
覚悟しろ、ウラナリ本多……！！

「よし、分かった！　じゃあ奥の手を出させていただくよ！」
パシンと小気味いい音が鳴る。本多が少々大げさな身振りで両の掌を合わせた音だ。
「この件を了承してくれたら、僕がある物を原田くんに進呈することにするよ。きっと君も大いに気に入ると思うんだ」
「……俺が気に入る物……？」
「あぁ。君を口説き落とすためにさっき一度家に戻って持ってきたんだ。でもそれをここで見せる事は出来ない。もし見つかったら没収されてしまうからね。だからあそこで見せるよ」
本多はすぐ側の理科準備室を指差した。
「さぁ行こう原田くん。今なら丁度誰もいないようだ」

護衛兵になる気などはサラサラ無いが、「俺が気に入る物」というのが何なのかが気になる。
もし本当にいい物なのであれば、ウラナリを締め上げて強引に奪っちまおうかと悪魔の考えを脳裏の片隅に置きながら、本多に急き立てられて俺は理科準備室に入った。

・―――・―――・―――・―――・―――・―――・―――・―――・

誰もいない準備室に入り、中から厳重に鍵をかけた本多は自分の鞄の中から何かを取り出して俺の前に突き出す。
「これだよ。どうだい？　銀杏高の生徒なら喜んで欲しがるはずさ」

すぐ鼻先に広げられたその雑誌を見て思わずあっ、と声が漏れる。
……そっそれは俺も持っているあの例の水着写真集だッ！！
写真集の横から本多がスウッと生白っい顔を覗かせる。
「どうだい？　あれ、なんか反応がおかしいな。……もしかしてもうこれ持っていた？」
沈黙する俺。
すぐ横にあるガラスケースの中に収められている骸骨の標本が俺をじっと見てニタニタと嘲笑っているようで胸糞悪い。
「……あぁそうかもう持ってるのか……。さすがだね、だってこれは」
「言うなッ！」
俺は叫んだ。ビクッと本多の身体が震える。
「でも君が持っているのなら、これは交渉道具にはもうなりえないね……」
残念そうに本多はその写真集を鞄に仕舞いかけたが、不意に俺の方を見てニタリ、と笑う。
……どうやらこの部屋には骸骨が二体いるようだ。
「原田くん、少々頼りなく見えるかもしれないが、これでも僕は用意周到な男として有名なんだよ？　君がこれを持っている可能性も僕はすでに考えていたのさ。今のは去年の発売当時、銀杏高校の男子生徒の間ではかなり話題にのぼった写真集だしね。さぁさぁじゃあ今度はこちらを見てくれ。さすがにこれは持っていないだろう？」
本多が再び鞄を開け、中からもう一冊の雑誌を取り出した。同じモデルが笑っている別の写真集だ。
「ほら、これは彼女がデビューしたばかりの時に作られた写真集だ。こっちは発売当初あまり売れなかったので現在は入手するのがかな

り困難な超レア物だよ？　この間ネットオークションで見かけて競り落としたんだ。特別にこれを君に進呈するよ」
「い、いらん！」
「我慢は身体によくないよ、原田くん」
「いらねぇったらいらねぇ！　俺はもう行くぞ！」
扉に手をかけた俺に地を這うような覇気の無い声が追いかけてくる。

「原田くん……僕はまたまたすごいことを思いついてしまったよ……」

嫌な予感が走る。
「な、何だよ？」
「……君って学園内ではかなりの硬派だと専らの評判だよね？　そんな硬派な男がそっちの写真集を密かに持っていることを、風間さんや森口さん、それにいつも一緒にいるあのお仲間さん達に僕から話したらどうなるだろう？」
「なっなにぃっ！？」
本多の口から忍び笑いが漏れる。
「君の評判は一気に地に落ちるんじゃないかなぁ？　君のことを好きな風間さん、森口さん達もきっとショックを受けるだろうね……」
返答に詰まる俺を、ウラナリの勝ち誇った面が見つめる。
「……さぁ原田くん、この事を黙っていてほしかったら口止め料として護衛兵を引き受けてくれたまえ。そうしたら僕はこの事を忘れて永遠に貝になるよ」

“　そのまま海に帰っちまえ！　”

と叫んでやりたかったが、とにかく堪える。
去年シンからその写真集の話を振られた時、馬鹿馬鹿しい、興味なんてねぇ、と言ったことがある。
だが本多に写真集を持っていることをバラされたら、俺の立場はどうなる？
実際は購入していたことを知られたら、まず間違いなくシンにはいいだけ突っ込まれ、いじられまくるだろう。そんなのは本多の作り話だ、とシラを切りたくても、実際に美月が俺の部屋で見ちまっているし、言い逃れは出来そうにない。

「……急に無口になったね原田くん。拒否の返答が無いということは、護衛兵の件はＯＫとみなすが構わないね？」

畜生ッ……！
ギリギリと血が滲みそうなくらいに下唇を噛む。
不気味に笑う本多の顔の中央に「王手（チェックメイト）」というどデカい文字が透けて見えたような気がした。

“　相互親睦　”　しましょう！　＜４＞

「偉大な柊兵くんに敬礼ッッ！」

その号令で将矢とシンが俺にビシッと敬礼をし、ヒデはニヤニヤと笑っている。

仏頂面で机に頬杖をついている俺に、憎らしいぐらいの爽やかな笑顔で尚人が話しかけてきた。

「柊兵、なんだかんだ言ってやっぱり怜亜ちゃん達のコスプレ見たかったんだね！　狂乱祭で護衛兵（ガーディアン）を引き受けるなんてさ」

「うっ、うるせぇっ！　こっちにも色々と都合があるんだ！」

「どんな都合なのさ？」

「い、色々だ！」

畜生、苛々する……！

あのウラナリ野郎の本多に弱みを握られて脅されたからだ、なんて言えるか！

「まぁまぁ尚人。あまり柊兵くんを追い詰めるなって。せっかく俺らの陣営について美月ちゃん達がコスプレしてくれるように骨を折ってくれたんだ。気が変わって護衛兵を止める、なんて言い出されたら困る。ここは素直に我らの柊兵くんに感謝しておこうじゃないか」

「シンも給仕（ボーイ）に選ばれたしね」

「本当は一般で楽しむ方が良かったんだけどなぁ……。でも選ばれちまったから仕方ない。とりあえずやるさ。それに休憩時間に控え室で美月ちゃん達と話せるかもしれないし！」

俺らC組の給仕係はクラスの女共の投票の結果、シンが選ばれた。ちなみに尚人とかなりの接戦だったらしい。

「そういえば怜亜ちゃん達は何のコスプレをするんだろうね」
「実は俺、さっきD組に行って聞いてきたんだ。二人共同じ格好をするとまでは教えてくれたけど、後は“　当日まで秘密！　”って言って教えてくれないんだよ。だから俺はバニーガールが好きだな、ウサ耳は長めで、とは一応言ってきた。尚人なら何がいいと思う？」
「そうだなぁ……。オーソドックスにOLのコスプレがいいな。あ、その時はオプションでぜひ眼鏡をかけてほしいね」
「来た来た来ましたよ～っ！　それ、もろお前の好みじゃんか！」
「何がいい？　って聞かれたらそりゃ自分の好みを言うよ」
「OLの制服じゃ全然色気がないじゃん！」
「そうかい？　僕は感じるけどね、ものすごく」
「ダメダメ！　尚人の案は却下！」
「別に却下されてもいいけどさ。他に当てはあるしね」
肩を竦め、尚人は余裕たっぷりの表情でそう答えると、すぐ隣で締まりの無い面で話を聞いていた金髪ヘッドに「将矢はどう？」と話題を振る。
「俺かー！？」
将矢は顔中のパーツをさらに緩め、揉み手を始める。
「俺はとにかく超ミニスカートを穿いてくれればなんでもいいっ！とにかくだな、スラリとした綺麗な脚を限界ギリギリのラインまで拝みたいぃぃぃぃ――っっ！」
「ははっ、将矢らしいね。じゃあヒデは？」
「うむ……、悩む所だが着物を推そう」
重々しく答えたヒデに、向かいにいたシンが「すげぇ動きづらそうな物を挙げてきたな……」と呆れた口調で呟く。
「和服はいいぞ、シン。日本女性を一番美しく見せるのは和服だと

俺は常々思っている。それに髪を結って襟元から見えるうなじの色っぽさは最高だ」
「なるほど！」
「あぁその際、後れ毛も数本あってほしいところだな」
「うぉっ！　なかなかマニアックだな、ヒデ！」
「甘いなシン。まだ他にも鑑賞ポイントはあるぞ」

それ以降も俺の横でこの四バカ共はそれぞれが推す最高のコスプレについて延々と語っている。つきあってられねぇ。
しかしこの俺がコスプレ女達の警護をやるはめになるとはな……。
だがウラナリに弱みを握られちまった以上、どうしようも出来ない。
狂乱祭は来週にせまっていた。

・―――・―――・―――・―――・―――・―――・―――・

第十二回狂乱祭……もとい、相互親睦祭典（フレンドシップ・フェスティバル）の開催日が訪れた。訪れちまった。
祭り開始までもう一時間を切っている中、俺は四階の視聴覚室前で壁に背中を預けていた。
一見、この場所でただボーッとしているように見えるが、そうではない。現在、この視聴覚室内では選ばれた仮装給仕嬢（コスプレウェイトレス）達が着替えの真っ最中なのだ。

……で、俺は不審者がこの中に侵入しないように入り口で見張りをしている、というわけだ。しかしつくづく情けねぇ……。
こいつらの着替えが終わったら、体育館のすぐ側にある家庭科室に全員を連れて行くことになっている。そこでウラナリらの友好実行委員会の連中が最後に色々と注意事項を伝え、狂乱祭はいよいよスタートというわけだ。

それが済めば次だ。
友好実行委員会の四名と共に体育館内の見張りをするのが俺の主な仕事らしい。
まず一つ目の任務（ミッション）は、狂乱祭中、コスプレ女達に触るなどの不埒な真似をしようとする輩が現れた場合、それを即時止めさせる。ウラナリからは場合によっては少々手荒な事もＯＫとのお墨付きだ。
そして二つ目は写真撮影も禁止しているので撮影している人間を発見した場合、携帯電話やデジカメで撮影した場合はデータ消去、カメラならフィルム没収。なお、抵抗した場合はこれを力ずくで従わせる。まぁ要は腕力が必要な事態になればすぐに俺が出動する、ということだ。

現在俺の左腕には紺の腕章がついている。
【護衛兵（ガーディアン）】と白抜き文字で書かれた特注の腕章だ。
こんなモンをつける必要は無いと突っぱねたが、周りに俺が護衛兵だと認識させる為に必要だ、とウラナリに押し切られた。あまりの格好悪さに死にたいくらいだ。
……おい、どうでもいいがまだかよ？
退屈のあまり欠伸をかみ殺した時、横で扉が軋む。
「ちょっとちょっと、がーであんさんっ……！」

視聴覚室のドアが小さく開いている。
壁にもたれかかったまま横目でドアを見ると一人の女が隙間から俺を手招きしている。
全員の着替えが終わったら出てくるように言ってあるので女共の着替えが終わったらしい。しかし薄く開いたドアから後続の女共が出てくる気配は無かった。
「……なんだ？」
「いいからちょっと」
――たぶん三年の女だな。真紅のチャイナドレス姿だ。すげぇ色っぽい。出るとこが出て、引っ込むところが引っ込んで、スタイルもかなりのもんだ。こりゃあ今年の狂乱祭はマジで盛り上がりそうだな……。
「いいから早くこっちに来てってば！」
再三の催促に渋々壁から身を起こし、ドアの前にまで行く。女はキョロキョロと廊下を見て俺以外誰もこの場にいないことを確認すると、扉の外に出てきて長い髪を前にかき寄せながらスッと俺に背を向けた。
「上げて」
「なッッ……！？」
驚いて叫びそうになった。
ファスナーは腰の少し上の部分までしかまだ閉じられてない。いきなり視界に飛び込んできた、艶かしい白い彫刻のような背中。スリットは深く、腰近くまで入っている。そしてそこから覗くスラリ

と白い脚……！
……お、おいおいおいおいっ！　後ろから見るとほとんど半裸で、容易に全裸姿が想像出来るじゃねぇかよ！？
「私、身体が硬いのよ。ファスナー上げてくれない？」
――　な、なぁっ、おかしいだろ！？　いくら護衛兵だからってこんなことまで俺がやらなきゃいけないのかッ！？
「なっ、中で他の女にやってもらえばいいだろっっ！？」
「だって皆自分のメイクに夢中なんだもん。それにさ、ライバル達に迂闊に背中なんか見せられないわよ。ファスナー上げるふりして服に裂け傷でもつけられたら困るし」
……＜背中を見せられない＞ってお前はゴルゴ13か！
それに給仕嬢同士でそんな足の引っ張り合いがあるのか？　女って恐ろしいな……。
そ、それより、さっきから非常に気になっているのだが、こいつの背中にブラジャーの紐がまったく見当たらないのだが……。
っつーことは何か？　こいつは今、ブラジャーをつけてないってこと……だよ……な……？
「ねぇ早くぅ～。誰か来ちゃったら見られちゃうからぁ～」
鼻にかかった拗ねた声で女が催促する。
た、確かにここは廊下なのでいつ誰が来るか分からない状態だ。
下の階からは男子生徒の馬鹿騒ぎ声も絶え間なく聞こえてきている。
……や、やってやるしかなさそうだ……。
恐々ファスナーに手を伸ばす。

指が緊張で硬くなっているのが分かる。くそっ今にも指先が痙攣を始めそうだ！

……これはいわゆる世間で言う「役得」ってやつなのか？　そうなのか？

＜人間死んだ気になればなんだって出来るぞ＞という、今は亡き爺さんのありがたい格言をふと思い出し、死人（ゾンビ）になりきってファスナーを掴んだ。

――　南無三ッ！

一気に済ませようと力を入れて上に引っ張り上げたのでファスナーがギギギ、と苦しげな悲鳴を上げる。

「あぁんっ……！　もっと優しくしてぇ……。壊れちゃうぅぅ……」

うわわっ止めろぉぉぉぉ――ッ！

そんな妖しい台詞と喘ぎ声みたいな変な声を出すなぁッ！　焦ったせいで思わずファスナーから手を離しちまったじゃねぇか！！

こ、ここは取り乱したら負けだ。おそらく立て直せなくなる。そうだ、大丈夫だ、落ち着け俺。

動揺を必死に押し隠し、ファスナーを掴んでもう一度リトライ。強張った指でゆっくりと上げる。

しかし不思議なもんだ。こうしてなだらかな白い背中が赤い布の中に段々と消えていくのを目の当たりにしていると、ファスナーを上げるよりも下げる方が人間として正しい行為のような気がしてくる。

「ねぇまだ～？」

「も、もうすぐだ！」
……ふぅ、な、何とか無事に頂上にまで辿り着いた……。
だが寿命が確実に二年は縮んだ気がする。ほっとして額の冷や汗を拭ったのも束の間、

「ちょっと柊兵っ！　あんた何やってんのよっっ！？」

扉の方角から聞き覚えのある怒りに満ちた声が俺の体を貫いた。

“　相互親睦　”　しましょう！　<5>

慌ててファスナーから手を離し、怒鳴り声のした方に目を向ける。そこには着替え終わった美月と怜亜がいた。目の前に立つその姿に息を呑む。こいつらが選んだコスプレは……

……看護士（ナース）だった。

丈がかなり短めの白衣に、薄手の白ストッキングとナースサンダル、そして＋（プラス）マークのついた小さな制帽。どっちも恐ろしいくらいにメチャクチャ似合っている。

「あ、終わったの？　ありがとね、がーであんサン！　さ、次はメイクメイク〜！」

俺を窮地に追い込んだ原因を作ったチャイナ女はさっさと室内へと入ってしまい、代わりに美月と怜亜が俺に詰め寄ってくる。

「何やってんのよ柊兵！！」

「柊ちゃん、ひどい……」

ナース姿で怒り心頭の美月。同じくナース姿で嘆き悲しむ怜亜。

一方の俺は心臓のビートをハイスピードで軽快に刻みながら女に見惚れるという、極めて貴重な体験中だ。

「ファ、ファスナーを上げてくれってあの女に頼まれたんだ！」

「バカじゃないの！？　そんなの断固拒否しなさいよッ！　締まりの無い顔して情けないわねーっ！」

美月が俺の左胸をドン、と掌で突く。……なんだ？　あまり効い

てないが掌底のつもりか？
「あ――っ！！　やっぱりだぁ！　ちょっと怜亜！　怜亜もここ触ってみてっ！！」
「ここ？」
美月にそう促され、怜亜も俺の左胸に手を当ててくる。
「あ……！　柊ちゃんの心臓、こんなにドキドキしてる……！」
「でしょ！？　やっぱりシンの言う通りじゃない！　この陰鬱助平！」

……畜生、なんでファスナーを上げてやったぐらいでそこまで言われなきゃならねえんだよ……。
と、とにかくこいつらの怒りと嘆きをどうにかして静める必要があるな。まずは話題を変えよう。それしかねぇ。

「なっ、なぁ、それ、すげぇ似合ってるな、二人とも」
「エ！？」
「ホント、柊兵ちゃん！？」
「あぁ。正直驚いた」
俺なりの精一杯な必死の褒め言葉にこいつらのテンションが瞬く間に変わる。
「やったぁ～～！！　ほらっ、やっぱこれにして正解だったでしょ怜亜！」
「えぇ！　美月の言う通りね！　柊ちゃんに褒められるなんて思わなかったわ！　嬉しい！」

……おい、しかももう笑ってるぞ？　呆れるぐらいの変わり身の早さだ。本当に単純コンビだな……。

「あのね柊ちゃん」
水に濡れたような黒い瞳で怜亜が俺を見上げる。

「もしコスプレするなら絶対ナースだって美月が言ったの」
「なんでだよ？」
「だって柊ちゃんってナースさんがとっても好きなんでしょ？」
「何ッ！？　誰が言ったんだそんなこと！」
「だって皆でこの間行ったカラオケでシンが唄ってたじゃない！！」
と言うや否や、美月がデカい声でいきなり歌いだした。

「♪　柊兵くんはぁぁ～～同じ白でもぉぉぉぉ～～三度の白米よりぃぃぃぃ～、白衣がぁぁぁ～～、白衣がお好きぃぃぃぃぃ～～！！」

……頭痛がした。
おい美月、こぶしを利かすな。巻き舌すんな。何より廊下のど真ん中で歌うな。
しかしこいつらの俺に関する下らない情報の記憶力には心底呆れるばかりだ。

「皆様ごきげんよう！」

噂をすれば何とやらだ。
廊下の奥からこの下衆な替え歌の作詞家が颯爽とやって来る。
「うわ～！　シン、似合うじゃないその黒服！」
「いえいえ俺なんか全然ですよ。美月ちゃん達の美しさの前じゃ完全に霞んじゃいますって！」
……相変わらず調子のいい奴だ。だが美月の言う通り、確かにシンはこういう格好をさせたらピカ一だな。

「二人共ナースのコスプレにしたんだ？　すっごくいいね！　こんな可愛い白衣の天使がいたら俺、毎日でも病院に通っちゃうなぁ～！」
「ねぇシン！」
「ん？　何、美月ちゃん？」
「今こっちに歩いてくる姿を見て気付いたんだけどさ、シンって姿勢がいいよね！　長身の男の子って柊兵みたいに前かがみ気味に歩く人が多いのに、背筋がピンと伸びてるから歩く姿がすごく映えて見えるよ！」
「それはそれはありがとうございます」
大仰にかしこまり、シンは美月に向かって優雅に一礼した。
「どうしてそんなに姿勢がいいの？」
「んー……」
またしても大げさなジャスチャーでシンは斜め上の空中に視線を泳がせ、
「……小さい頃、親にバレエを無理矢理習わされてね。そのせいだと思うよ」
と答えた。
「へぇ～なんかカッコイイ！　じゃあシンは踊れるんだー？」
「いや、もうとっくに止めているから無理無理。いまさら踊る気もまったくないしね。さぁさぁ、それよりそこの護衛兵（ガーディアン）くん！」
「……なんだよ」
「この白衣の天使ちゃん達をしっかり警護しろよ？」
「うるせぇ」
「大丈夫よ、楠瀬さん！」
両手を後ろに回し、怜亜がニッコリと笑う。
「柊ちゃんが見張っていてくれれば何も怖いことなんてないわ！」
「ま、それは言えてるな。この高校にそんな命知らずなヤツはいないだろうし。じゃあ天使さん達、柊兵くんはまだここから動けなさそうだからさ、俺と一緒に先に家庭科室に行ってない？」

「あっあたしはダメ～ッ！」
美月が胸の前で大きく片手を振る。
「教室にカーディガン忘れちゃったから、取りに戻らなきゃ！　体育館は暖かいけど控え室って寒いもん」
美月と怜亜の格好を改めて見たシンは「そうだね」と頷いた。
「確かにその白衣一枚じゃ寒いかも」
「これで風邪引いたらバカみたいだしね。怜亜は教室に忘れ物はないの？　あるなら一緒に取ってきてあげる！」
「私はないわ。カーディガンも持ってきてるし」
「じゃ怜亜はここに残ってて！　どっちかが見てないと柊兵がまた誘惑に乗っちゃうかもしれないから！」
「へ？　柊兵が誘惑？　なんだいそれ？」
「柊ちゃんたら、さっき先輩のドレスのファスナーを上げてたの……」

ヒュウ、と小気味よい口笛の音が廊下に鳴り響いた。

「柊兵くん、やるぅ！　しっかし最近の柊兵くんは一昔前とは大違いだね！　俺もお株を奪われっぱなしですよ！」
「……いいから着替えが終わったんならさっさと行け、シン」
「はいはい了解です、柊兵閣下！」
そう言うと、シンは伸ばしていた背筋を美月の方に向かって少しだけ折り曲げた。
「それより美月ちゃん、ここから下の階は飢えた猛獣達で一杯だよ？　そんな罪な格好でジャングルの中を一人で歩いたら危険だからさ、忘れ物取りに行くの、一緒に付き合うよ」
「ホント？　ありがと！　じゃあ柊兵、あたしはシンと直接、家庭科室に向かうから！　いいでしょ？」

「あぁ」
「よし、じゃあ行きますか」
エスコートのつもりか、シンが美月の肩にさりげなく手を回す。
「万一、美月ちゃんに猛獣共が襲い掛かってきたら俺が即、撃ち殺しますんでどうかご安心を」
「あははっ！　頼りにしてるね、シン！」

美月とシンは笑いながら並んで去っていき、俺は怜亜と廊下で二人きりになった。ナース姿なのでなんとなく視線をそちらに送りづらい。

「あ、柊ちゃん、ネクタイが曲がってる。ちょっといい？」
怜亜が小さく手招きをし、俺に少し身をかがめろ、という合図をしてきた。目線を脇にずらしながら身をかがめると俺の首元付近を怜亜の白い手が器用に動き、たちまちネクタイの乱れは直っていく。
「はい。これでいいわ」
「サンキュ」と言って身を起こそうとするとすぐ下から「柊ちゃん、この間はありがとう」という小さな声が聞こえてきた。

「この間？」

顔を向けるとナース姿の怜亜が俺をじっと見つめている。
「果歩を家まで送ってきてくれたでしょ？」
「あぁ、あれか。礼を言われる覚えはねぇよ。俺が果歩を引っ張り回したんだからな。それに遅くまで連絡入れなかったしさ。悪かったな、心配してただろ？」
すると俺の左手を怜亜が両手でそっと掴んでくる。一瞬ビクッとしちまった。
「嘘つかなくていいんだよ、柊ちゃん……」

周囲に人はいないのに怜亜が再び囁くように言う。
「果歩があの夜、全部私に話してくれたの。柊ちゃんを振り回したのは果歩だったのね」
……なんだよ馬鹿だな、果歩の奴……。全部怜亜に言っちまったのか。せっかく叱られないようにしてやったのにょ。
「ごめんね、迷惑かけて……」
「果歩を叱ったりしてないだろ？」
「うん」
「ならいい。あいつもあの日はかなりヘビーな体験をしたからな。可哀想だったよ」
「果歩、すごく柊ちゃんに感謝してたわ。柊ちゃんはとっても優しいお兄さんだねって……」
怜亜は両手で握っていた俺の左手を自分の胸の前にゆっくりと引き寄せた。すぐ真下にいるので俺を見上げてる瞳が潤んできているのがはっきりと分かる。それを見た途端にあの懐かしの悪寒、動悸、息切れ、眩暈……。
――ひ、久々に来やがったッ！
俺は、こ、こういう無垢ですがられるような目で見つめられるのが生理的に苦手なんだっ……！
「お待たせ～！　全員終わったよ、がーであんサン！」
視聴覚室の扉が開き、先ほどのチャイナ服の女を先頭に中からどやどやと女共が出てきた。怜亜が名残惜しそうに俺の手を離す。……た、助かった。これで何とか平静に戻れそうだ。

しかし壮観だな……。
さっきのチャイナ女にメイド服の女、バニーガールにレースクィーン、それにスチュワーデス、巫女ときて……、

――　うぉっ！？

ボ、ボンデージまでいやがるじゃねぇかッ！！！
ロウソクに鞭まで持ってやがるがあれは大丈夫なのか！？　学園的に安全圏なのかっ！？

「早く行きましょっ、がーであんサン！」
「お、おう……」
うっかり顔に出ちまった動揺をこいつらに悟られないよう急いで背を向け、女共の先頭に立って歩き出す。早足で歩き出した俺の背後ではピーチクパーチクと朝の雀も舌を巻いて逃げ出すほどの女共の嬌声の渦。

「ねぇねぇねぇねぇ、ちょっと見て見て！　横からブラ見えてない？　大丈夫？」
「あ～ん、調子に乗って丈を短く直しすぎたかなぁ？　しゃがんだらパンツ見えちゃうかも……」
「いいじゃん、見せたって減るもんじゃないし！　サービスサービス！！」
「ここまでコスプレしたからには絶対勝ぁーつ！　誰にも負けないもんねっ！」
「ねぇ、さっきチラッとあなたの下着見たら白だったけど、まさか今もそうじゃないでしょうね？　そのファッションに白じゃ興ざめよ？」
「へっへーん、もちろん取り替えたよ！　ほら見てよ！」
「えぇっ！！　黒ー！？　嘘でしょー！？　その服に合わせるなら

さ、絶対紫でしょ紫！　あなたって美的センス無いわね～！　信じらんない！」

……こっちが信じられねぇよ……。

すぐ前に男（オレ）がいること、こいつら分かってんのか？

――　そっと左肘が引っ張られる。

見ると怜亜が歩きながら俺の制服の肘の部分をつまんでいる。怜亜は何も言わないがその心配げな顔を見れば心の内はなんとなく分かった。

「……品の無い女ってのは嫌だな」

と小声で囁く。

怜亜はコクンと頷き、ホッと安心したように俺の顔を見上げて小さく微笑んだ。

“　相互親睦　”　しましょう！　<6>

――　現在の俺の心境を一言で言えば、「酒池肉林の中で瞑想を続ける若き修行僧」がもっともふさわしい。

体育館の隅に置いた椅子にどっかりと座り、館内の様子を眺める。

胸を揺らし、美脚を見せつけ、大輪の華のような笑顔で各テーブルを給仕して回る際どい格好の仮装給仕嬢（コスプレウェイトレス）達がすぐ目の前を行き交う度に慌てて視線を逸らす。

……どうやら俺はまだまだ修行が足りなさそうだ。坊さんにこの両肩を驚策（きょうさく）で思い切りぶっ叩いてもらい、無念無想の精神を根幹に注入してもらわないと脳内に巣食う煩悩を振り払うことが出来そうに無い。

しかし館内の光景を見ていて思ったが、

【　今日だけは無礼講。だが最低限の節度は常に持つべし　】

という祭典のバックボーンにのっとりつつも、教師と生徒が互いに気軽な調子で楽しげに語り合っている様子はこれはこれでなかなか悪くないもんだな。

あちこちに置かれたテーブル上では会話に花が咲き、各自アルコールを摂取しているわけでもないのに大いに賑わっている。

美月と怜亜も大奮闘中だ。

次々に声をかけられ、一生懸命各テーブルに飲み物を運んでいる。どちらも人気は高そうだ。

続いてシンの姿が目に入る。

洗練された物腰で女が集うテーブルに飲み物を配っている最中だ。数少ない給仕（ボーイ）の中で一番女から呼び止められ、注文を受けている。
お？　あいつ女共から何かメモみたいなものを貰ったな。女の携帯番号か？　爽やかな笑顔でそれを胸ポケットに入れてやがる。
おい、真実の愛を探すんじゃなかったのか、シン。　……まぁ俺には関係ない。放っておこう。

祭りが開始されて早一時間が経過した。
現在の所、大きなトラブルは無い。
スタート時は写真撮影や仮装給仕嬢に絡もうとする輩も何人か出たが、護衛兵の腕章をつけた俺がその場にヌッと現われただけで全員すぐにおとなしくなり、被害を未然に防ぐことができた。ウラナリ本多も「君がいるだけですごい抑止効果だよ！」と一人興奮していた。思っていたより俺は有名人らしい。

「やぁ原田くん、先ほどはお手柄だったね」

館内を巡回していたウラナリがまた俺に近づいてくる。
「別に何もしてねぇだろ」
「いやいや君があの場に現れたからこそのスピーディ解決さ。ふっ、君を護衛兵に推薦したこの僕の眼が正しかったということだね」
こいつ、最後はしっかり自分を持ち上げてやがる！
一瞬ムカツいたが、この骸骨男に手を出すと、例の写真集の脅しを再び喰らいそうなのでここは黙って耐える道を選ぶ。
「ところで原田くん、君のお仲間があっちのテーブルで騒いでるんだ。まだウェイトレス達に直接手は出していないけど、念のために注意してきてくれるかい？」

「なに？」
ウラナリが指さす方角を見ると、テーブルの上に立ち上がってバカ騒ぎしている金髪ヘッドの男がいる。……将矢か。あのアホが。
「頼むよ原田くん。一部のウェイトレス達からもイヤだって苦情が来てるんだ」
「あぁ分かった。行ってくる」
もし将矢がハメを外して厄介事でも起こせば、祭りがスムーズに終らない可能性もある。この下らない役から一刻も早く放免されたい俺としては、面倒だがウラナリの言う通りに動くことにした。
椅子から立ち上がり、将矢達がいるテーブルに向かう。そこでは将矢が双眼鏡を手に、各コスプレ女達を物色している最中だった。
「うひょーっ！　あの娘の脚サイコー！　おーっ！？　やべぇもうちょいで見えそうじゃん！　いいぞ！　屈(かが)め！　もっと屈めええーっ！！」
……お前はサファリパークに野生動物を見に来た観光客か。無言で将矢(アホ)の背後に回り、襟首を掴んで床に一気に引き摺り下ろす。
「いってーな！　何すんだてめぇ！！　……って、何だ柊兵かよ！？」
「何やってんだお前は」
「遠くの娘がよく見えないからこれで見てるだけだろ？　カメラやケータイは禁止でも、双眼(こいつ)鏡の持込みに関しては注意は無かったはずだぜ！　そうだろ！？」
確かに友好実行委員会からの連絡文書には双眼鏡の持込みに関しての記載はなかったと俺も記憶している。しかしルール違反でないとしても、双眼鏡でコスプレ女の身体をズームで見まくるとは決して褒められた行為ではない。ったく、法の網目を上手くかいくぐっ

てせっせと悪事を働くような真似をしやがって。
「お前の言い分も分かるが止めとけ」
「なんでだよーっ！　見るぐらいいいじゃん！」
「コスプレ女達からも苦情が来ている。言う事を聞かなければ力づくで止めさせるがどうする？」
「ぐっ……」
どうやら俺が本気でやるつもりだと分かったらしい。将矢は急にマジな顔になって視線を宙に泳がせた。

「将矢、柊兵の挑発に応じてやったらどうだ？」

熱い緑茶の入った湯のみを手に、ヒデが口を突っ込んでくる。
「ああは言ったが、柊兵の本音は違うはずだぞ」
「それはどういうことだよヒデ？」
尻餅をついていた将矢が立ち上がり、不思議そうな顔でヒデに尋ねる。
「前に柊兵と話したことがあるんだが、俺ら以外でやりあいたくない相手は誰だっていう話になったことがあってな、その時俺も柊兵も同じ相手の名前が出たんだよ。それがお前だ」
「俺！？」
「お前は格闘技の経験がない割りにセンスがあるし、ある程度の距離が保てればお前に負けることはないだろうが、万一懐に飛び込まれたらマジでヤバいよなって話したことがあるんだぜ？」

チッ、余計なこと言うんじゃねぇよヒデ！　将矢の目が輝いてきてるじゃねぇか！
「マジかよ！？　ということはもしかして俺って結構スゴいってことかヒデ！？」

「あぁ、そういうことになるな」
「なんだよ早く言ってくれよ！　俺、お前らには絶対敵わないと思って諦めてたぜ！　よっしゃあ！　そういうことならいっちょマジで柊兵と戦っ……ぶぎゃっ！！」

踵落としが綺麗に決まった。

「見事な不意打ちだね、柊兵！」
足元の床でひくついている将矢を眺め、俺に笑いかける尚人。当たり前だ、ここで乱闘騒ぎを起こしたら祭りが大混乱しちまう。厄介な事になるじゃねぇか。
「でもヒデ、今の話ホントなの？」
「あぁそうだ。お前やシンは気付いてなかったかもしれんが、将矢は強いぞ？　とっておきの武器も持ってるしな」
「おいヒデッ！　なんで将矢をけしかけたんだっ！？」
こいつのせいで危うく将矢とマジでバトルをする羽目になる所だった。だが俺らの中で一番の常識人であるヒデがなんであんなことを言い出したのかが分からん。するとその理由は尚人が代わりに教えてくれた。
「それはね柊兵、コスプレウェイトレスの中に和装の女の子がいないからだと思うよ多分」
「なんだと？」
「だからご機嫌斜めなのさ。そうだろヒデ？」
「……これだけ仮装している女がいるのに、大和撫子がいないなんて考えられるか？　チャイナもメイドもレースクイーンも要らん！」
「最初は巫女の格好をした女の子がいたんだけど、あちこちに飲み物を運んでいる内に具合が悪くなったみたいですぐにいなくなっちゃったんだよ。ヒデはそれからずっと機嫌が悪いんだよね、ハハッ」
……おい、結局はヒデの八つ当たりだったのかよ！？

「でも怜亜ちゃん達がナースになるとは思わなかったよ。どうしてナースにしたんだろうね。柊兵、理由知ってる？」
「知らねぇっ！」
シンの替え歌のせいだと知ってはいるが絶対言わねぇぞ！！
「でも似合うからいいけどさ。柊兵もそう思うだろ？」
これにも返答拒否だ。
そっぽを向いた俺に尚人が「そうそう！」と続きを付け加える。
「さっき将矢が言ってたんだけどね、怜亜ちゃんは色が白いから、ああいう格好をするとＡＶの企画物みたいだなって言ってたよ！」
「……何！？」
こめかみ内部の神経がブチッと切れそうになった感触がする。そこへちょうど近くを通りがかっていたシンが会話に加わってきた。
「おーそれ言ってた言ってた！　さっきの将矢の話だろ？　あいつ、あとなに言ってたっけな、えーと確か、もしＡＶだったら、流れ的には保健室で怜亜ちゃんが“　どうしたの？　具合が悪くなっちゃったの？　じゃあ診察した後お注射しましょっか？　”　となって、なぜか怜亜ちゃんの方が白衣を脱いで、最終的には診察台の上で思いっきり揺れながら“　あぁ～ん！　そのお注射気持ちいいいいいいいい～～！！　”　って叫ぶパターンだって騒いでたな！」

完璧にキレた。

「う～ん……」と目を覚ましかけた将矢の後頭部にもう一度ガッツリと蹴りを入れておく。カエルが潰れたような鳴き声を上げた後、また奴はしばしの休眠に入ったようだ。よし、成敗完了だ。
尚人が「容赦ないなぁ柊兵」と笑い、シンの方を振り返る。
「でもそういうシンも、さっき美月ちゃんのコスプレについて語ってたよね？」

茶化しに入ってきたのに自分に火の粉が飛んできたシンは急に慌てだした。
「俺！？　俺は将矢みたいにあんなエグイ妄想はしてませんよ！？
　ただ、美月ちゃんって肌が小麦色だから、ナース服を着るとその白黒のコントラストが妙にエロイよなって言っただけじゃん！」
　見事シンから言質を取った尚人が嬉しそうな顔で俺に視線を戻す。
「どう柊兵？　こっちの発言はセーフ？　アウト？」
「……アウトだな」
「おおお俺、まだ仕事の途中だから！　では失礼っ！！」

　相変わらず危機管理能力に優れている奴だ。素早くこの場から離脱したシンが再び給仕の仕事に戻っていく。まぁいい。将矢も寝かしつけたしこの場はこれで解決したことにしよう。

「じゃあ俺は戻るぞ。将矢が起きたらもう騒がないように言っておけ」
「了解！」
　尚人が俺に片目をつぶる。
「ヒデもそう腐るな。つーか俺に八つ当たりすんな」
「……確かに大人気なかったな。すまん」
　冷静さを取り戻したヒデは素直に謝るとまた茶を飲み出している。
よし、じゃあ所定の位置に戻るか。
　先ほどまでいた場所に戻り、また椅子に腰を落とす。後は祭典終了までこの隅に陣取り、館内を眺めていればお役御免だな、そう考えていた俺の頭上から声が振ってきた。

「フレンドシップしましょ？　原田くんっ」

……伯田さんだ。

白衣姿の伯田さんが悪戯っぽい表情を浮かべて俺の背後に立っていた。

“　相互親睦　”　しましょう！　<7>

「ガーディアンのお仕事大変ね。でもあなたも少しぐらいは相互親睦の方にも参加しないと。私達とのせっかくの無礼講なのよ？」

伯田さんはそう言いながら手近にあった椅子を引き寄せ、俺の斜め前に座った。

無造作に羽織っている白衣の裾が大きく揺れる。保健室にいる時と同じ格好をしているだけなのに、この祭りのせいで今の伯田さんはコスプレに参加している側に見えちまう。

「でも驚いたわ。君が女の子を守るガーディアンなんていう警護をやるなんてね。私、君の事を誤解していたのかも」

「……」

「この間は風間さんを病院に連れて行ってくれてありがとうね」

「……」

「二日後だったかしら。森口さんが報告にきてくれたんだけど、風間さん、インフルエンザじゃなかったんですってね。良かったわ」

「……」

「もうっ、本当に原田君って無愛想よね！」

仏頂面で相槌すらうたない俺に伯田さんがため息をつく。

「これじゃ全然相互親睦になってないじゃないっ。あなたの友達の楠瀬くんや真田くんはいつも私に愛想がいいわよ？」

んな事言われても困る。

シンや尚人のように気軽にポンポンと話題を振ったりする事が俺にはどうしても出来ない。見かけは同じ人間でも、コミュニケーション能力に優劣は存在するんだと伯田さんに言いたいが、それすらもどうやって言葉にして伝えればいいのか分からないぐらいだ。

「はぁーい！　お待ちどうさま、柊兵！！」

そこへ溢れんばかりの元気一杯の声で美月が小走りに駆け寄ってきた。

どうでもいいが、こいつのナース服の胸元のボタンがかなりきつそうだ。館内を走り回っている内に弾けとばないといいが。本来の役割以上の負荷をかけられながらも、なんとか美月の胸元を必死にガードしている上から三番目のあの白ボタンに若干の敬意を表したい。

「柊兵だけ何も飲み物当たってないじゃない！　もっと早く持ってきたかったけど注文がさばききれなくってさ！　はいどーぞ！！」

「あ、あぁ悪ィな」

美月の手からコーラを受け取る。

「もう風邪はすっかり治ったみたいね、風間さん」

伯田さんに声をかけられ、美月は「はい？」と斜め後ろを振り返った。そして次の瞬間、「あっ」と絶句した美月の顔が強張ったことに気付く。

「どうしたの風間さん？」

「その格好……、あなたは保健室の先生ですか？」

「え？」

伯田さんは一瞬驚いたような顔をした。ポニーテールが小さく揺れる。

「あぁ、風間さんはあの時すごい高熱でぐったりしていたから私の顔を覚えてないのね。そうよ、私は保健室在住の伯田加奈子。よろしくね」

「……」

赤いフレームの眼鏡に手を沿え、軽いギャグを入れた伯田さんの自己紹介も美月の強張った表情を緩ませることは出来なかった。微

笑む伯田さんを美月は無言でじっと見つめている。
美月はしばらく黙り込んでいたが、「柊兵」と俺の名を呼ぶと背を向けたままで言い放つ。

「……あれ、そういう意味だったんだ？」

そう言い終るや否や、美月はこの場から駆け出し、体育館の外へと走り去っていった。
途中で怜亜の腕をつかみ、怜亜も一緒に連れて。

……気付かれちまったかっ！？
慌ててあいつらの後を追って館外へ出ようとしたが、どこからともなく現われた本多に行く手を遮られてしまった。
「原田くん！　どこに行くつもりだい！？　護衛兵の君がここからいなくなったらもし何かアクシデントが起きた時に僕らが困る！」
「うるせぇ！　こっちもアクシデント発生だ！！」
そう叫ぶと本多を思い切り突き飛ばし、駆け出した。すると最後の足掻きか、体育館の床にひれ伏した本多も負けじと叫ぶ。
「原田くん！　君の秘密を話すよ！？」
「勝手にしろっ！　もうバレちまったよ！」

体育館のドアを蹴り飛ばして開ける。一気に流れ込んできた冷気が両頬を撫でた。
目の前に伸びる廊下。あいつらの姿はすでに無い。
どっちだ！？　どっちに行った！？
とにかくまずは前進だ。あいつらを探さなくちゃならねぇ。
長い廊下を突き当たりまで走るとヤマ勘で右に曲がり、コの字型

の進路を今度は左に曲がる。しかし曲がった先に伸びる廊下に人の気配は無かった。逆だったか……！

踵を返し、逆のルートを進む。

こちらの廊下にも人気は無かったが、時間をロスしたせいであいつらはもうどこかに行ってしまったのだろう。

小さく舌打ちをし、とにかく走る。走りながら両側の教室をガラス越しに覗き込んだがどこにもあいつらの姿は無かった。

一階……二階……三階……四階……、駄目だ、どの階にもいねぇ！

となると残るは……

屋上のドアを開けた。

いた。

十五メートル先の屋上の手すりの前に美月と怜亜はいた。

揃いのナース姿に紺色のカーディガンを羽織ったあいつらは、俺が乱暴に扉を開けた轟音に気付き、こちらを無言で見ている。怜亜も何も言わないということは、美月がもう話してしまったのだろう。うぅ、すげぇ気まずい。

屋上でのしばらくの沈黙の後、最初に口火をきったのはやはり美月だった。

「言ってくれればよかったのに！　伯田先生が好きなんだってさ！」

秋風が美月の怒りを含んだ声を続けざまに運んでくる。

「柊兵の部屋にあったあの写真集のモデルの人、伯田先生にそっくりだったよね！？」

――その通りだ。
俺が本棚の奥に隠していたあの水着写真集は、モデルが伯田さんによく似ているということで、去年銀杏高の男子生徒の間で一時噂になった写真集だった。
「そうなんでしょ柊兵！　あんたは伯田先生のことが好きなんでしょ！？　正直に言ってよ！」
「柊ちゃん……」
美月が、怜亜が、俺にどこまでも真っ直ぐな視線を向けてくる。
再び俺達の周囲に沈黙のバリアが張られた。

……好きだったのかもしれないが分からない、なんて言ったら美月と怜亜に逃げていると思われてしまうだろうか。

入学当初の乱闘事件の後、初めて伯田さんと顔を合わせた時は確かに体が硬直し、自分でも伯田さんを強く意識していると思った。
あの写真集の件が校内で話題に上った時も、シン達の前では興味のないフリをし、密かに写真集を買ったりもした。
しかしその後の俺は保健室に行くことは無かったから、伯田さんへのあの緊張が特別な感情のものなのか、それともいつものようにあの人が女で、しかも美人だから緊張しちまっているのかがよく分からなかった。

だが、この間怜亜に連れられて保健室に入り、久々に伯田さんと対面した時、俺はまったく動揺していなかった。
その事から分かったことだが、今現在のみの心境で言えば、俺は伯田さんのことを好きではない。以前はもしかしたら好きだったのかもしれないが、今は好きではない。
だがコミュニケーション能力の低い俺が、その事をどうやってう

まくこいつらに伝えられるんだろう？

「……もう止めましょう美月」

この沈黙の間を乱さない、静かな声が聞こえた。怜亜の声だ。
「私たちが柊ちゃんを責めるのは間違っているわ」
「だってさ、伯田先生のことが好きならどうして最初にちゃんと……」
「ううん。最初に私たちが柊ちゃんに有無を言わせずに強引に側にいったから、だから柊ちゃんもきっと伯田先生が好きなことを言い出せなかったのよ。そうでしょ？　柊ちゃん」
怜亜が俺に向かって微笑む。
その何かを諦めたかのような静かで穏やかな笑顔。その笑顔を見て俺は腹を決めた。

「……違う」

今は言わなくちゃいけない、と思った。
上手く言える自信はまったくねぇけど、こいつらには俺の、今現在の俺の気持ちをちゃんと話すべきだ。
「……た、確かにな、確かにあの写真集は去年俺が自分で買った。伯田さんが好きだったから買ったのかもしれないし、それを確かめるために買ったのかもしれない。それは認める。でも、今は違う。今は伯田さんの側に行っても何とも思わない。思わなくなってる」
口下手な俺なりに精一杯自分の気持ちを説明したが返ってきたのは沈黙のみ。
うぅ、やはり気まずい。

これ以上何を喋っていいのか分からないがとりあえずまだ何か言葉を発しようと口を開きかけた時、美月が真剣な表情と声で言い放った。
「じゃああたし達からはこれで最後の質問にする。これはすっごく重大な質問だよ柊兵！」
美月は怜亜に顔を向け、頷く。すると怜亜も小さく頷き返し、真っ直ぐな目と声で俺に最後の質問をしてくる。

「柊ちゃん、私たちのことが好き？　私たちが側にいても迷惑じゃない？」

……な、なぁ、それ、言わなきゃいけないのか？
ここで返事をしなきゃいけないのか？

……いけないんだろうな……。

……駄目だっ！！
照れ臭くってとても向かい合ってなんて俺には言えねぇ！！
急いでこいつらに背を向け、低い声で「あ、あぁ」とだけ呟いた。
即座に「ホント！？　柊ちゃん！？」「嘘じゃないっ！？」という声が背後から聞こえてくる。
恥ずかしさに震えながらもう一度短く肯定の返事をすると、背後でパタパタと二つのリズムでナースサンダルが鳴る音が聞こえてくる。

「おわっっ！？」
突如背中に激しい衝撃。
美月と怜亜が抱きついてきたのだ。
「やっと柊兵が好きだって言ってくれた～～！！」
「ずーっっと柊ちゃんの側にいるわっ！」
「おいっおまえら、押すな、押すなって！」

――　高校の屋上でナース服姿の幼馴染同級生二名にぎゅうぎゅうに抱きつかれ、困惑している男がここに一人いる。
どんどんと泥沼にはまっていっているような気がするのは気のせいだろうか？

……その後、機嫌を直した美月と怜亜を連れて体育館に戻ったが、祭典はまもなく終了間近で仮装給仕嬢の一位を決める投票もすでに終っていた。
投票の集計はその場で速やかに行われ、壇上で一位が発表される。
栄えある仮装女王（コスプレクィーン）は、俺がチャイナドレスのファスナーを上げてやった池ノ内というあの三年の女の頭上に輝いたようだ。

「あーあ、あたし達じゃなかったね怜亜」
と呟いた美月の声は少々悔しそうだ。
「いいじゃないの美月。別に優勝を狙っていたわけでもないんだし」
「ま、それもそうだね！　それにもっといいことあったしね！」
「えぇ！」
次の瞬間、美月と怜亜が両腕にしがみついてくる。

もうこの逮捕攻撃にはとっくに慣れているが、頼むからこれだけ大勢の人間がいるこの館内では遠慮してくれ。
そう言いたいがどっちもあまりに嬉しそうな顔をしているので言い出せない小心者（チキン）がここにいる。これじゃあのカラオケ店で黙々と働くモヤシ店員を笑えねぇな。

投票結果発表も終わり、演出のために明るさを落としていた体育館内の照明に再び光が戻ってきた。館内が少しずつ明るくなるにつれ視界の幅も広がり、美月と怜亜以外の見覚えのある白衣が視界の中央に入ってくる。
「あら原田くん。風間さんとケンカしたかと思ったらもう仲直りしているの？　しかももう一人、森口さんも増えてるし」
伯田さんが笑いながら近寄ってくると、美月と怜亜は俺にさらにピッタリとくっつき、

「どーも、お・か・げ・さ・ま・で！」
「えぇっ、もうすっかり仲直りですからご心配なくっ！」

と台詞自体はあくまで温和だが、表情にはうっすらと挑戦的な微笑みを浮かべ、強めの口調で伯田さんに言い返している。美月はともかく、怜亜がこういう表情をするのは珍しい。

「そう。良かったわね二人とも」
「はい！」
「えぇ！」

おいおい、伯田さんはまったく気付いていないが、今の会話の間にはビシバシ青い火花が散ってたぞ……。もし側に危険物があった

ら即引火、なおかつ爆発しそうな勢いだ。

「モテる男の子はツライわね、原田くん？　君が女の子にこんなにモテるなんて知らなかったけど」

伯田さんは最後にそう言うと、白衣を翻して保健室の方角に颯爽と去って行った。

よ、よし、これで祭りも無事に終わったか……。

さて、俺も本多にこの護衛兵の腕章を突っ返してくるか、と思った時だ。

美月が俺の右腕をがっしりと押さえたままで上半身を大きく前に倒し、反対側にいる怜亜に向かって目配せをする。

「怜亜っ！」

すると怜亜も「えぇ！」と即座に呼応し、その次の瞬間こいつらの手が俺の左胸にそれぞれ押し当てられた。

「……うん、大丈夫！　伯田先生と話しても全然ドキドキしてない！　さっきの屋上での言葉は嘘じゃなさそうだね！」

「柊ちゃんの心臓の鼓動って、普段はこんなに遅いのねっ」

そしてなぜか拍動のリズムを確認し終わったはずなのに、二本の手はいつまでもサワサワと俺の胸をまさぐり、妖しくうごめきまくっている。……ったくこいつらは……。

「だからお前ら、こういう確認方法は止めろぉぉぉ――っ！！！！」

こうして第十二回　相互親睦祭典（フレンドシップ・フェスティバル）　はここに無事幕を下ろした。

…

……とにかく疲労困憊だ……。

お誕生日おめでとう　<1>

今は昼。
ここは休憩室（リフレッシュルーム）。
両脇には……、

『ハ～ッピバァ～スディ～ディア～』
『柊～兵～！！』　『柊ちゃ～ん！！』
『ハァ～ッピバァ～スディ～ツ～ユ～！！！！』

現在、左右の鼓膜がそれぞれ違った女の声を認識中。他のテーブルで静かに食事をしている連中が皆こっちをチラチラと見ている。

「柊兵～！　お誕生日おめでとう～！！」
「おめでとう柊ちゃん！！」

十月十九日、普段は厳かなクラシックが流れ続けているこの休憩室。その空気を一変させる美月と怜亜のバースディソングのおかげで原田柊兵、本日再び公衆の面前で晒し者だ。

俺の前にはこいつらが昨日二人で手作りしたという、直径三十センチはあろうかという特大ケーキがどんと置かれている。こんなもん、どうやって学校に持ってきて、昼までどこに保管しておいたんだ。大体俺は甘い食い物が大の苦手なのによ。
生クリームをこれでもかとばかりにたっぷりと塗りたくりまくって作られた白い土台の上面には、お約束のチョコレートプレート。しかもそこには『ハッピーバースディ！』＋俺の名前＋ハートマークのどでかい白文字入り。

どっちの趣味だか知らねぇが、コアラ、ヒヨコ、パンダ、ウサギ、アライグマと、メレンゲで出来た砂糖人形が五体、行儀よく横一列に並んでまん丸の純粋な瞳で俺を見上げている。
おかげでケーキに視線を落とすとこいつらと強制的に視線が合っちまう。どういう顔すりゃいいんだよ。

「いやぁ～柊兵くん！　君、十七年生きてきて今年が一番幸せな誕生日だろ？」

向かいに座っているシンが、やに下がった顔で俺の様子を高みから見物している。
よくよく周りを見渡せば、シン以外の他の三人も全員似たような顔をしてやがる。畜生、また俺はこいつらのいい玩具（おもちゃ）かよ……。
「おい柊兵。美月と怜亜に礼を言えよ。こうやってわざわざお前のために作ってきてくれたんだぞ？」
「柊兵はきっと照れているんだよ。嬉しいくせにね。僕には分かるよ」

――　だぁぁっ！　ヒデも尚人も余計なこと言うなっ！

「いいなぁ柊兵は……俺、羨ましいぜ……！」
と、今にも指を咥えそうな勢いで羨望の眼差しを送ってくるのは将矢だ。この晒し者の状況を本気で羨ましがっているこいつの神経が分からねぇ。
誕生歌とＢｉｇケーキの披露が終わると、すかさず怜亜が弁当を差し出してきた。

「柊ちゃん、今日は私のお弁当を食べてね！」

……実は二週間前から俺の弁当を作る料理人（シェフ）は毎日変わっている。

月曜が美月、火曜が怜亜、水曜が母親で、木曜、金曜はまたこいつらが作っている。
このコンビが母親に勝手に頼んで、水曜以外の俺の弁当を交代で作りたいと言ったらしい。料理勉強のために俺に味見人になってほしいとかなんとかうまい理由をつけてな。
わずらわしい弁当作りが週一になると知って母親は二つ返事でOKしやがったようだ。そしてお礼に、と近いうちに美月と怜亜を家に招いて夕飯を食う話もあるらしい。
もう完全にこいつらのやりたい放題に事は進んでいる。私的領域にまであっさりと踏み込まれ、その内にほぼ全エリアをこいつらに侵食されかねない勢いだ。
しかし最近はそれぐらいのことで動じず、今も怜亜から「サンキュ」とだけ呟いて弁当を受け取る余裕の出てきている俺。人間は日々成長する生き物だって事を身をもって実体験中だ。

「今日は柊ちゃんの大好きなものいっぱい作ってきたの！」

俺の面倒を見るのが嬉しくてたまらない、といった様子の怜亜が大型弁当の蓋を開ける。
「うぉー！　今日も豪勢だなー！！」
弁当箱の中身を見て将矢が真っ先に叫んだ。食い物屋の息子のせいか、いつも一番に弁当の中身に反応してくる。
「なぁ怜亜ちゃん、これ何？」
「これはカジキマグロの南蛮漬けよ」
「すっげー美味そう！　なぁなぁ一個でいいから味見させてくれ！」
「えぇ、いいけどここからは取らないでね。これは柊ちゃんのだから。私の分をあげる」
「マジ！？　ラッキー！！」
するとテーブルに頬杖をついて大喜びの将矢の様子を眺めていたシンが、

「あーあ、今日も変わらず天使ちゃんに愛されているなぁ柊兵くんは……」
と溜息交じりに呟く。
「最近シンはあまり柊兵をからかわなくなったよね」
尚人の言葉にシンはさらに大きくふぅ、と息を漏らして続けた。
「最初はからかうのも面白かったけどさ、柊兵くんのあまりの愛されっぷりに段々自分が空しくなってきたんだよ。俺も適当に女と遊ぶのは止めて真実の愛を探そうかなぁ……」
「ハハッまた出たね。シンの口癖」
「いやこの間まではふざけて言ってたけどさ、最近は本気の本気で考え始めてる次第です」
「すごい心境の変化だねシン。女の子漁りに明け暮れていた男の発言とは思えないよ」
「だからからかうのは止めてくれ尚人。俺、マジなんだからよ。……ほら見てみろよ。俺がこんなに落ち込んでいるっていうのにさっさと愛情弁当を食べ始めている男がいるしさ」

シンの嘆きをよそに俺は黙々と弁当を食う。
怜亜のやつ、また腕を上げているな。小学校の家庭科実習で怜亜の料理のレベルが高いことは知っていたが、今はあの頃よりもさらに高いレベルになっていた。今日の惣菜の数々もどれも甲乙つけがたいほど美味い。
「ねぇ柊兵。あたしのと怜亜のお弁当、どっちが美味しー？」

――　なんつータイミングだ。美月、お前は人の心が読めるのか。

「……どっちも」
「いいよ嘘言わなくても。だって自分でも分かってるもん、全然怜亜の方が上だってこと」
「じゃあ聞くなよ」

「一応確認よ、確認！」
照れ隠しなのか、美月は白い歯を大きく見せて俺に向かってウィンクする。
「さぁ柊ちゃん、今度はケーキを食べてね！」
絢爛弁当を食い終わった瞬間、間髪いれずに先ほどのケモノ付き特大ケーキが再び登場しやがった。
「お、おい、まさかこれ、俺一人で食うわけじゃないよな！？」
「うん！　もちろんみんなにもおすそわけするよ！　柊兵は主役だから多く食べてもらうけどね！　だからこのケーキの半分は柊兵の分だよ！」
「は、半分だと！？」
「はい柊兵、口開けて！　あ～ん！」
「柊ちゃん、あ～んしてね！」

――　本日の最大の見世物ＰＡＲＴ？。
別名、【　責任量（ノルマ）の洋菓子（ケーキ）ショー　】。所要時間は十二分ってとこか。
直径三十センチケーキの半分を死に物狂いで食い切り、胸焼けで一気に気分が悪くなっている俺にさらに追い討ちをかける声。
「あ、柊兵！　今日は放課後あたし達に付き合ってね！　渡したいものがあるから！」
「ＨＲが終わったら柊ちゃんのクラスに行くから先に帰らないでね？」
まだあるのか。まだありやがるのか。
いや、この現状を受け入れる事にしたんだろ、原田柊兵。
ここでへこたれてどうする。頑張れ、目一杯頑張れ。

……正直ギブアップ寸前だ。

・――・――・――・――・――・――・――・――・――・――・――・――・

帰りのＨＲ中、外を眺めていた右肩を突付かれた。右隣を見ると、穏やかな笑顔を浮かべたヒデが廊下を指差している。
Ｄ組はもうＨＲが終わったらしい。
美月と怜亜が何やら喋りながら俺を待っている姿がガラス窓の向こうに透けて見える。
……準備万端、ってやつか。

ようやくこちらもＨＲが終わった。
スポーツバッグを肩に担ぎ、廊下で待っているあいつらの所へ行こうとした俺の背中に向かってヒデが声をかけてくる。

「柊兵、お前少し変わったな」

「あ？　何がだよ」
「前に美月と怜亜を助けてやった以降、お前のあいつらへの態度が段々変わってきたと思ってな」
「……そうか？」
「自分じゃ気付かんかな。まぁいつまでも三人仲良くというわけには

いかないだろうが、とにかく今のあいつらは少しでもお前の側にいたいんだ。分かってやれよ、その気持ちをな」
とりあえず「あぁ」と生返事を返しておく。

――だがさすがのヒデも知らないだろう。
非常に馬鹿馬鹿しいが、美月と怜亜はこの日本に一夫二婦制を導入して本気で一生俺とずっと一緒にいるつもりなんだよな。
もしこの馬鹿げた発想をヒデに教えたら、ヒデの奴は一体どんな顔をするだろう。「老成」と誉れの高いこの男もさすがに動揺するだろうな。
そう考えたら思わず笑っちまいそうになった。

「じゃあまた明日な」

ヒデにそう告げ、軽く片手を上げて帰ろうとした時、
「柊兵閣下！　今日のこの後の詳しい戦況を、是非明日我々にご報告願います！」
とシンの声。
このからかいを無視して教室を出ようとしたが急に目の前に将矢が現われ、
「いいなぁ柊兵は……。今夜一気に二人喰いかよ……羨ましすぎるぜ……！」
と赤ん坊のようにリアルに指を咥えながらのたまった。
ったく具体的な理由は分からんが、やはりこいつの発言が生理的に一番癪に障る。そこで恒例の成敗を行った後に教室から出ると、待ちかねていた美月と怜亜が即座に駆け寄ってきた。

「柊兵！　将矢となんかあったの？」
「あ？」
「だって柊ちゃんが難波さんの首に腕をぎゅううっって巻きつけた

後、難波さんってば教室で倒れちゃってるけど……？」

将矢に天誅を加えていた所をこいつらもしっかりと見ていたようだ。かといって裁きを下す原因になった将矢の下世話な台詞をこいつらに言うつもりもない。

「ただのスキンシップだ、気にするな」

とだけ言い、先に歩き出すと「あっ！　待ってよ柊兵！」「待って柊ちゃん！」とすかさず両腕にいつもの重力がかかってきた。やれやれだ。

玄関で靴を履き替えた時だけは両腕も一瞬自由の身になったが、履き終わればまたすぐに両側からW拘束。ま、もう慣れちまったがな。

「柊兵、じゃあ急いで帰ろうっっ！！」

美月のどでかい元気満タンの声が右の鼓膜を刺激する。

「……急いで帰ってどうするんだ？」

「あのね柊ちゃん、まずは一旦それぞれのお家に帰って、着替えた後にもう一度集合するの！」

美月に影響されたのか、怜亜の声もいつもより大きい。

「もう一度集合？」

「そうそう！！　で、まずはあたしだよ！！」

右腕を拘束中の美月がさらに音量を上げて叫ぶ。

「柊兵、あの場所覚えているでしょ？　ほらっ赤比良（あかひら）川のすぐ側にあるあの高台！　あそこのベンチに五時半までに来て！　あたしの時間が五時半から六時までで、六時に怜亜が来たらバトンタッチであたしは帰るから！　各自の有効タイムは限られているんだから遅れたら絶対に許さないからねっ！」

……なるほど。今度は一緒ではなく、別々に攻めてくるわけか。

芸が細かいな、お前ら。

「いい？　柊ちゃん？」

とかすかに目を潤ませて怜亜が俺の顔を覗き込んでくる。

いやいや、だからよ、良いも何ももう決まってることなんだろ？

元々俺に選択させる気なんかはなっから無いだろうが、お前達は。

まず一つわずかな溜息をついた後、次に吐いた分だけの冷たい新鮮な空気を肺に取り入れてからこいつらに返事をする。

「……了解」

「やったぁ――！！」

俺の了承に美月が空いている片腕でガッツポーズ。怜亜は頬を桃色に染めてさらに身体を摺り寄せてくる。もうどうにでもしてくれ。

「柊兵くん見ーっけ！　ははーん、その子達ね！　あなたがつきまとわれて困っているっていう女の子達って？」

突然正面から聞こえてきた聞き覚えのある鈴の声。

校門を出た俺の顔は驚きで固まった。

目の前には……。

「あっあんた！？」

「お久しぶり～♪　……って、まだ一ヶ月くらいしか経ってなかったわね！」

――　ミミだ。あのチビ占い師が俺の目の前に立っていた。

お誕生日おめでとう　＜2＞（前書き）

もうちょいで第一部、完結ですよ

お誕生日おめでとう　<2>

目の前にミミがいる。
どう見たってあいつだ。間違いねぇ。

これが流行りなのか俺にはまったく分からんが、ミミはやたらとヒラヒラしたした生地がたくさんついた服を着ていた。スカートなんかまるで広げた日傘のように膨らんでいる。
確かこいつは前に「若くみられすぎるのも困りものだ」などと言ってたが、そういうおかしな格好をするから余計にそう見られるんじゃねぇのか？

「ちょっと柊兵、誰よこの人？」
「柊ちゃんのお知り合いの方？」

美月が明らかに怪訝そうな表情で、そして美月ほどではないが同じく怜亜も不思議そうな表情で珍妙な格好のミミを共に見ている。
だがミミは自分に向けられているこいつらの不審な眼差しを気にもせず、例の異国情緒を感じさせる微笑を浮かべながら最初に美月、そして次に怜亜を指差した。
「なるほどね！　あちらが活発な方の女の子で、そちらが控えめな性格の女の子ってわけね！」

「あんた誰！？」

ついに美月が俺を経由しないで直接ミミに問い質し始めた。またしても非常にヤバい予感がしてきたのだが。
「私は影浦深美っていう者だけど、でも朝のＴＶでお馴染みの、ミ

ミ・影浦って言った方がよく分かるかしら？」
「えぇーっっ！？」
美月と怜亜が揃って驚いた声を出す。
「嘘ッ！？　あのミミ・影浦なのっ！？」
「モーニング・スクランブルの占いをしている方ですか！？」
自分の名を知った美月と怜亜の反応を見て、ミミの虚栄心は大いに満たされたようだ。得意満面で「そうよっ」と答えた時のこいつの低い鼻が多少高くなったような感じすらする。
しかしこいつらもミミのことを知ってたのか。やはりこのチビっ子はそれなりに有名人なんだな。
するとしばらく口に手を当てて目を丸くしていた怜亜がふと思いついたという様子で、「でもどうして影浦さんが柊ちゃんとお知り合いなんですか？」と尋ねた。
「知りたーい？　ふふっ、じゃあ教えてあ・げ・る！」
そう言うとミミは自分の右手の人差し指をピッと立てて一度俺を指した後、再び指を天に向けて何度もクルクルと旋廻させた。
……この怪しい動き、見覚えがあるぞ。
これはあのおたふく天使野郎が占い発表の前に星付きステッキ片手に必ずやるアクションだ。
半端ないあいつの白塗り不細工面を思い出してまた不快指数が一気に上昇しかけた時、ミミは自信たっぷりにこう言い放った。
「あのねっ、柊兵くんは一ヶ月前に自分が進むべき道を見失い、暗中模索の手探り状態になっちゃったの！　それで私のところに救いを求めてきたのよっ！」

――　おいおいおいおい！　ミミの奴、勝手に話を捏造してやがる！！

「アハハハッ！！　柊兵がミミ・影浦に自分の運勢を占ってもらいに行ったっていうの！？　ウッソだぁ！」

俺の腕にぶら下がり、美月が大笑いをする。そして明らかに小馬鹿にしたような目線でミミを見た。

「そんなの絶対に信じられない！　だって柊兵は間違ってもそんなことするタイプの人間じゃないもんねー！！」

すると美月の言い方と態度がよほど疳にさわったのか、このチビっ子占い師は眉をキッと上げ、口を固くへの字に結んだ。その表情から見てもどうやらかなり気分を害してしまったらしい。

本気でヤバい予感がした時、ミミの反論が始まった。

「ううん嘘じゃないわよっ！　だって私、一ヶ月前にエスタ・ビルで占いをやったんだけど、そこに柊兵くんが一人で来たんだもん！　だから話を聞いたら、活発な性格の女の子と、控えめな性格の女の子につきまとわれてとっても迷惑してるって言ったのよ？　で、これから先、どうしたらその女の子達から離れられるか、って私にすがってきたのよ！　私、ちゃーんと占ってあげたわ！　これが嘘だと思うなら柊兵くんに直接聞いてごらんなさいなっ！」

うわわわぁぁぁぁ――――っっ！！！

ミミの奴、言っちまったぁぁぁぁ――――っっ！！！

……な、なんだ、この思い切り地雷を踏みつけたような感覚は……？

恐る恐る両脇を見ると、美月と怜亜、両方の顔から表情が完全に消えていた。

その光景を見た瞬間、恐怖が凄まじいスピードで背中から這い上

がってくる。
幼い頃、テレビからズルズルと這い出す女の亡霊のＣＭを見た時すら微塵の恐怖も感じなかったこの俺が、今はこいつら二人の能面のような顔を見て本気でビビッている。と、とにかく、今のミミの発言を打ち消しておかないとマズい！！
「な、なぁあんた、それはちょっと大袈裟すぎやしないか？　あの時、俺そこまで言ってないだろ？　な？」
――　おいっミミッ！　お前、仮にも未来を覗ける占い師なら俺の心を今読め！
この目に浮かぶ救助信号（Ｓ・Ｏ・Ｓ）に気付けって！　人の心を見透かせるお前なら出来るだろっ！？

「……柊兵、本当にこの人に占ってもらったんだ……」
「……やっぱり柊ちゃんは私たちに迷惑していたのね……」

ヤバいッ！！　俺も自ら地雷をセットしちまったぁぁぁぁぁ――
――っっ！！！
焦る俺の両腕が急に軽くなる。両腕にかかっていた重力から解放されたのだ。
「……行こ、怜亜」
「……えぇ」
手を繋ぎ、俺の元から去っていく美月と怜亜。
「あ、ちょい待て！　美月！！　怜亜ッ！！」

「わぁ～私の占い当たりそう♪　柊兵くん、良かったわね！　これでめでたく牢獄の鎖から解き放たれるわねっ！」

――　ろっ、牢獄の鎖っておいっ！　これ以上は無いくらいのミミの援護……いや違った、追撃射撃だ……。

おそらくこのミミの声がしっかりと聞こえたのだろう、美月と怜亜の足取りがますます速くなる。

だからこのままじゃマズいってのっ！！

「ねぇ柊兵くん、占いも当たったみたいだし、気分いいから何か奢ってあげる！　どっかに行こ！」

「なに！？」

「私、喉渇いちゃったし！」

と呑気に笑い、俺の腕を取るミミ。

だから待て！

タイムだ！

まずは考えさせろ！

今のこの状況、俺はどう動けばいいんだ！？

「ほら行こ行こっ」

「ちょ、ちょっと待てって！！」

強引にミミの手から腕を振りほどき、ダッシュしかけたが、あいつらの姿はもう見えなくなっていた。あぁ、また悪い予感が当たっちまったか……。

急に取り乱した俺の様子を見たミミが、「柊兵くん、あなたもしかして……？」と驚いた声を出す。

今頃気付きやがって。もう遅せぇよ。

「だ、だってあなた、この間は私にあの子たちが迷惑だって言ったわよね？」

「……」

あぁ、そうだ。

あの時確かに認めたさ。

でもあの時、俺はすぐに肯定しなかった……いや、出来なかったという方が正しいか。

そして肯定した後に分かったんだ。

実はあいつらを本気で迷惑だと思っていなかったことにな。でもミミには分かるわけねぇよな、そんなこと。

「……ところであんた、なんでこんな所にいるんだ？」

偶然にしてはタイミングが良すぎる。

「もちろん柊兵くんに会いに来たのよ。確か今日お誕生日でしょ？あの後どうなったかな～って思ってね」

「はぁ？　あんたもヒマな人だな……。だけどなんで俺がこの高校だって分かったんだ？」

「だってこの間会った時、柊兵くん学校帰りだったでしょ？　実は私もここが地元なの。だからその制服ですぐに銀杏高校の生徒だって分かっちゃったのよ」

「へぇ、あんた、ここが地元だったんだ」

「うん。でね、柊兵くんの名前ももう知ってるから、今ここから出てくる生徒さんを使って柊兵くんを呼び出そうとしていたところだったの。そしたらちょうど柊兵くんが女の子に絡まれながら歩いて来たからさ、及ばずながら引き離すことに協力しようと思ったんだけど、どうやら余計なことだったみたいね……。ごめんね」

「いや、あんたのせいじゃない。元はといえば全部俺が悪いんだ」

自嘲気味にそう言い放つ。

「でも何とかしなくっちゃ。どうしよっか？　私が嘘をついてたって言ってあの子たちに謝ろっか？」

「いやいい。俺が何とかする」

ミミの申し出はありがたいがこいつは何も悪くない。
腕時計に目を落とすと時刻はもうすぐ四時になろうとしていた。
四時か……。
下げていた目線を少しだけ上げ、視線をこのチビっ子占い師に戻した。

「あんた、喉渇いてるんだろ？　茶に付き合うよ」
「えっいいの！？　あの子たちを追わないで！？」
よほどビックリしたんだろうな、ミミの細い目が今は倍くらいに見開かれている。
「いいんだ、五時過ぎまでは時間が空いてる」

五時まで時間を潰そう。
ミミと共に歩き出してから俺はそう決めた。
これはかなり分の悪い賭けのようなものかもしれない。だがさっきの約束通り、あいつらは約束の時間にあの場所に来るような気がする。
普段から悪い予感以外はあまり当たらない俺だが、今回はあまり信憑性のないこの自分の勘を信じてみることにした。

お誕生日おめでとう　＜3＞

……しかし女っていう生き物はどうしてこうも判で押したように甘い食い物が好きなのだろうか。

女体内部の仕組みにはあまり詳しくないが、こいつらの体内のDNA文字列には「常時甘味を摂取せよ」という特別指令でも別枠で書き込まれているのか？

「うわ～美味しそう～！」

現在、優に二人前はありそうなどデカいパフェが俺の前に悠然と鎮座し、己の存在感をこれでもかとばかりに威風堂々とアピールしている。見ているだけで胸焼けがしてきそうだ。

そしてこの雄大な甘味白山の向こう側には「これから至福の時を満喫いたします」と言いたげなミミの顔。ちっこい耳掻きみたいなスプーンでうず高く盛られた生クリームをパクパクと頬張り始めている。

あぁそういや俺も、今日の昼に休憩室（リフレッシュルーム）で美月と怜亜手製の特大ケーキをしこたま食べさせられたな、と回想し……本気で胸焼けがしてきた。

「なぁ、あんたさ、これ本当に一人で全部食いきれるのか？」

かなりのハイペースでパフェを食べ続けるミミに内心呆れつつ尋ねると、

「うん、全然ヨユー」

という涼しい答えが返ってきた。どうやらまったくもって無問題らしい。

なんでもこいつは『らぶパフェ』という名称のパフェで、どうやら恋人同士でつつき合うのが正式な食い方らしく、店員の手によって俺の前にも二本目の耳掻きスプーンは一応配膳されている。

だが甘い食いもんが苦手な俺は、この“甘味の総オーケストラ”、もしくは“キング・オブ・スイーツ”と呼べるようなこの物体を、しかもチビ占い師と一緒に食う気は無い。

……どうでもいいがミミの奴、さっきは「喉が渇いた」とか言ってなかったか？

コーヒーを啜りながら上目遣いでミミを眺める。

しかし何度見ても二十六には到底見えねぇ。その珍妙なファッションと、にこやかな顔でパフェを食っている容貌は、どうみても十四、五歳ってとこだ。

次にカップ片手に周囲を見渡してみる。

ミミの一押しだというこの店。

ここは甘い食い物が有名な店らしく、周囲の八割が女の客だ。男も若干いることはいるが、全員女連れで来ている。

……待てよ。ということは、俺とミミも傍から見ればそういう関係に見られてる、っていうことか……。

相手はまるで中学生みたいな容姿ときて、しかも俺らのテーブルには言葉に発すれば即悶絶しそうな名称の甘味物（パフェ）まで乗っかっている。あくまで第三者から見た場合だが、不自然な点は何も無い。……そう見られるのは激しく迷惑だが。

「なに見てるの？　柊兵くん」

店内を観察していた俺の様子に気付いたミミがパフェを食う手を一旦止めて笑いかけてくる。

「別に」
「ふ～ん…。あっそういえば私、柊兵くんに聞きたいことあったんだった！」
「なんだよ？」
「あのね、この間あげた私のアレ、読んでくれた？」
「あ？　あぁ、角で思い切りぶん殴れば凶器にもなりそうなあの占い本のことか？」
「何よその例え！　しっつれいね～！　ちゃんと読んでくれたんでしょうね！？」
「……いや」
「え～なんでよ～！？　せっかくタダであげたのに～！　自慢じゃないけどあの本、結構いいお値段がするのよ？」
「別にくれなんて頼んでないだろ。あんたが勝手に押し付けていったんじゃねぇか」
「相変わらず素直じゃないわね……」

ミミは軽く口を尖らせるとまたパフェに向き直った。そしてガラスの器をクルクルと回しつつ、盛り上げられたクリームの横っ腹に豪快に風穴を開けていく。
おいおいなんだその食い方、木こりじゃねぇんだからよ。最後はこっちに倒れてこないだろうな。

「じゃあさ、当然出生天宮図（バースチャート）なんか作ってないわよね？」
「作るわけねぇだろ」
「やっぱりね……。じゃあやっぱり私が作ってあげる。あの後出生時刻は調べてくれた？」
「アホか」
「調べてないの！？　もう～じゃあまた作れないじゃないの～！
……あ！　ねぇ柊兵くん、ケータイ持ってるんでしょ？　今お母さんに電話して出生時刻を聞いてみてよ！」

「やなこった」
「ケチ」
続いてサク、と言う音。
パフェ側面に添付されていたウェハースをミミがかじった音だ。
「なんでそんなに俺の出生天宮図とやらを作りたがるんだよ」
「ん、占い師としての純粋な興味！」
「あんた、本当にヒマなんだな……」
心底呆れた口調でそう呟くと、ミミは手にしていたウェハースを一気に食べきり、慌てたように話を続けだした。
「だってね、私のところに来る人って、当たり前だけど占いをある程度は信じている人でしょ？　だから柊兵くんみたいに占いを信じていないのに占いを気にするタイプも珍しいわ。普通は鼻にも引っ掛けない態度で終わっちゃうもんだけど」
「違う。俺もつい最近まで鼻にも引っ掛けてなかった。でもこの間もあんたに言ったが、マジであの九日間の的中率は凄かったんだ」
「そんなに？」
「あぁ例えば、【　仲間の協力でいい事が起きる　】って出ると俺の仲間があいつらに加担して俺を嵌めたり、【　今日は何も進展が無い　】って出ればあいつらはまったく姿を現さなかったりとかな。偶然にしてはあまりにもピタッと当たりすぎてた。……あぁ、でもよ、そういやあんたの朝の占い、最近は全然当たらなくなったぜ？」
「……嫌ねぇ、占っている本人の前でそんなに嬉しそうに言わないでよ」
ブルーベリーの粒を二粒同時に口にいれ、ミミは不満げな声を漏らした。だがすぐに表情を変えて興味津々の瞳で俺の顔を覗き込んでくる。
「ねぇねぇ！　ちなみに柊兵くんはお友達にどうやって嵌められちゃったの～？」

――生贄（モルモット）にされて美月（あいつら）と怜亜にのしかかられたシーンが脳裏に華麗にフラッシュバック。

「どっ、どうでもいいじゃんか、そんなこと」

「あらっ？　やだっ赤くなってるぅ～！　隠すの下手なのねっ。分かりやすいわぁ、柊兵くんって！　なんか可愛いっ」

……十七の男に向かって“　可愛い　”　だぁー！？

……いや、危ねぇ危ねぇ。

俺は例の題目、“　こいつは二十六歳　実は俺より年上　”を心の中で唱えた。

だが俺がこうして必死に怒りを抑えていることなど露知らず状態のミミは、パフェ内に散らばっているヘーゼルナッツを耳掻きスプーンで熱心に寄せ集めつつ、「でもさぁ～」と呑気な口調で話を続けている。

「でもさぁ～柊兵くんはさぁ～、お友達の協力もあったんだろうけど、ああやってベタベタくっつかれる内にあの子達のこと好きになっちゃったんでしょぉ～？　だってさ、どっちもとっても可愛かったもんねっ！」

「ちっ、違うっ！」

「あらそうなの？」

「たっ、ただ俺はっ、今の自分の状況に対し見苦しく足掻くことを止めようと思っただけだっ！」

「あらあらあらあら～！　とうとう達観しちゃったんだ？　そうそう、確かお釈迦様の教えでそういうのあるわよね！　“　苦難の

状況に置かれても、これはこれで寧ろ良い事なのだとその事実を受け入れなさい　”　ってさ！　じゃあ原田柊兵くんは、弱冠十七歳にして解脱の境地、というものにすでに達してしまったということなのね？　ふふっ、すっごぉぉ～～い！　あたし尊敬しちゃうなぁ！　ご利益があるようにあとで柊兵くんを拝ませてもらおーっと！」

……こめかみ内部でビキビキと神経が切れたような音がする。こいつ、完全に俺をバカにしてるじゃねーか！　俺をいじるのはシンだけでたくさんだっつーの！

……いや待て待て待て待て。

落ち着け落ち着け。いいか、二十六、二十六なんだ。

そうだこいつは二十六、二十六、二十六、二十六、二十六、二十六、二十六……。

だが心を静めるためにこうして内心で必死に題目を唱えている最中も、目の前の二十六歳の口は休む事がない。

「あのさあ、これは完全に私の個人的な興味なんだけどね、柊兵くんはあの女の子達のどっちが好きなの？」

もちろんこの質問には完全無視を決め込む。

「ふーんノーコメントかぁ……。でもなんとなくどっちかは分かったけどねっ！」

「かっ、勝手に決めつけんなっ！」

するとミミは「あらっ？」と言い、パフェのてっぺんからずり落ちてきていたサクランボを手に取るとそれをパクリと口に咥え、俺に向かって意味深に笑う。

「ワタクシ、こういうことを見抜く力は優れていることをお忘れ？」

お誕生日おめでとう　＜４＞

小さな口の隙間から覗く艶やかな赤い実に一瞬ドキリとする。

俺の目の前でサクランボを咥えたミミの顔。

その顔だけは十四、五歳の顔では無かった。これは間違いなく大人の女の顔だ。

チビのくせに妖艶な色香を急に振り巻き出したミミは、「んふっ」と口の中でこもったような笑い声を上げる。

「それに元々男の人ってさ、女性に比べて自分の気持ちを隠すのがとっても下手っぴさんが多いしね。柊兵くんなんか完全にそんなタイプよ？　本人は隠しているつもりでも周りには思いっきりバレバレなの。だから勘の鋭い女の子なら柊兵くんの気持ちなんてあっさり読まれちゃうと思うな」

「俺の性格を勝手に分析すんなっ！」

「ふふっ、図星だから焦ったんでしょ？」

「だから違うっての！」

「ちなみに私の予想がどっちの女の子か言ってみていい？」

「い、言わなくていいっつーの！」

俺の気持ちが周囲に丸分かりだなんてこいつのハッタリだとは思うが、ここは一先ず必死に拒絶しておいた方が良さそうだ。

「あぁそうそう！　今日柊兵くんに会うつもりだったからプレタポルテだけど天秤（リブラ）座の男性のここ一ヶ月の恋愛運を占ってきたわ。……でも実はあまりいい占いが出なかったのよね……。しかももうなんとなく当たりはじめていそうだし……」

「いいって、もうあんたの占いは！」

「プレタポルテだからいいじゃない。気軽に聞きなさいな。それに

ね、もしこの先避けられないアクシデントが起こったとしても、それに対処するための心の準備がある場合と無い場合では、その後の展開は大きく変わるものよ。そうでしょ？」
「ぐ……」
「それに聞いておくことでアクシデントへの対策が立てられるかもしれないし、上手くいけばそれを回避できるかもしれないんだから！　自分の運命をより良い方向に導く為にねっ」

耳掻きスプーンから手を離し、ミミが居住まいを正す。

「……いい？　今月後半から来月前半にかけての天秤座男性の恋愛運は、気流に例えると乱気流。浮き沈みが激しいわ。災難が降りかかる暗示が出たから、冷静に対処しないと行き違いになってすべてがご破算になっちゃうかもしれない。だから意中の女の子がいる場合はここでしっかりと掴まえておくこと。港とか海とか、水の関係する場所がラッキーポイントよ。そして最も重要な事は、ちゃんと自分の気持ちを素直に相手に話すこと。隠し事をせずにね」

……なるほど。
ミミの言う通り、【　災難が降りかかって行き違い　】　というのだけはもう当たっていそうだな。で、その災難をもたらしたのは張本人ってのは、今俺の目の前にいるあんただと思うんだが？

「だっだからさっきも言ったろ？　あんたの朝の占いはもう当たらなくなってんだ。新たにまたそんなもんを聞いたって何の対処にもならねぇんだよ」
「ねぇ柊兵くん。そうやって占いが当たる、当たらないだけに固執しないで、今日家に帰ったら私の本を読んでみてよ？」
自分の占いを否定し続ける俺に不安を感じたのか、ミミの声のトーンが少しだけ落ちている。そして寂しそうな顔で俺を見た。

「……確かに柊兵くんの言うように占いは万能ではないわ。必ず当たるものではないし、気休めにしかならない時もあるかもしれない。……でもね、それはそれでいいと思わない？　それを信じて未来に大きな夢や希望を持ったり、過ちを犯さないように努力することはとっても素敵なことだと私は思うんだけど？」

ぐっ……、急にしおらしくなるんじゃねぇよ！　何か俺一人が悪者みてぇじゃねぇか！！

「……ま、まぁ、あんたの言いたいことは多少分かる」

「でしょっ！？」

珍しく俺が肯定したせいか、ミミは声を弾ませて本当に嬉しそうに笑った。そしてその満面の笑みの前で両手を合わせる。

「だって誰だって笑って生きていきたいじゃない？　わざわざ辛い気持ちを抱えたがる人なんかいないわ。占いって、心に抱え込んでしまったネガティブをポジティブに変換することの出来る、たくさんの切り替え手段の中の一つだと思うの。私はそう思ってるわ」

小休止のつもりなのか、ここでミミが一つ深呼吸をした。

目の前で俺に向かってにこやかに微笑むこのちびっ子占い師は、その鈴のような声色に穏やかさをプラスしてさらに俺に語りかけてくる。

「柊兵くん、たまには星空を眺めてごらんなさい。私達の住むこの青い星が幾つもある太陽系の惑星の一つだってこと、もちろん柊兵くんも分かっていると思うけどね、でもそれだけの認識だと思うの。ね、柊兵くんは感じたことがあるかしら？」

「何をだよ？」

「夜空に浮かぶたくさんの惑星や満点の星々。それらは全て私達を中心に回っているってことをよ」

「……」
「だからね柊兵くん、星占…」
「……でもよ、星占いってやつは“　星が俺らの運命を決める”っていうだろ？　そこが気に食わないんだよな」
「エッ？」

ミミは俺のこのいきなりの発言に少し驚いたようだ。
一瞬細い目を大きく見開いて俺をまじまじと見た後、思い直したようにニッコリと笑う。

「じゃあ柊兵くん、一つ教えてあげる。占星術（アストロロジー）っていうのはね、≪天体≫、つまり“　アストロ　”と、≪学問≫、“　ロジー　”という意味を合わせたものなの。だから意味合いは【　占星術　】というよりは【　人文天文学　】といったほうが本当は近いのよね。計算や理論を使い、天体の運行と私達地上の人間生活の様々な現象を追求していく立派な学問の一つなのよ。だから決していい加減なものじゃないわ」
「別にいい加減だなんて言ってないだろ」
「でも一ヶ月前にエスタ・ビルで会った時は言ってたじゃない。“　占いなんて胡散臭いものの代名詞だ　”って」

一瞬だけ返答に窮し、ミミから視線をずらす。
すると喋る事に夢中になり放置時間が長すぎたせいだろう、パフェ中央に豪快に盛られていた三つのアイスが大規模な雪崩を起こし始めているのが視界に入ってきた。そいつを横目に渋々と返答する。

「……あ、あの時とはまた少し考え方が違ってきてる」
「えっホント！？」
「……あぁ。多少はな」
「多少かぁ～。……でも良かった！　柊兵くんの偏見が少しは緩和

されて！」

溶け始めてきたアイス群を救護するため、ミミが　救（耳かきスプー）助　道具（ン）を再び手にした。それを使った迅速な救助活動により、三つの塊はどんどんとその姿を消していく。

それらの塊がガラスの器内からあらかた消滅した後、ミミは「あとこれで最後ね」と前置きしてまた続きを話し出した。

「あのね、占星術は誕生した時の惑星の位置によって性格が、そしてその後の惑星の運行状況で未来の運命が分かる、という考えが前提なの。だから柊兵くんの言うように“　星が運命を決める　”って私達占星術に携わる者は言うわ。でもね、前にも言ったけど、星が告げるそれぞれの運命は決して絶対じゃない。あくまで星々は私達が幸せな未来を歩いていけるように導いてくれる指針。進路を予測し、次に自分はどう行動すればいいのかを考えさせてくれる“　運命の語り手（フェイトテラー）　”　なのよ」

「……ふーん……」

「あ、それよりそろそろ時間大丈夫？」

店内の壁にかかっていた時計が視界に入ったのか、ミミが心配そうな声を上げる。

五時五分か……そろそろ行くか。

「あぁ、じゃあ俺行くわ」

立ち上がり、店員の手によってテーブルの隅に控えめに置かれていた伝票を手にしようとした瞬間、僅差でミミに奪われた。

「ダ～メ！　私が奢るって言ったでしょ？　罪滅ぼしの意味もあるしね。それに私のほうがあなたよりもずっとお姉さんなんだからご馳走して当然よ」

「……それ、つい忘れちまうんだよな」

「もうっ相変わらず失礼ね！　まぁいいわ。それより柊兵くん、携帯の番号教えてよ。番号交換しましょ！」
「ハ？　なんでだよ？」
「なんでって……だってもう私達お友達じゃない！　友人なのにお互いの連絡先も知らないなんておかしいじゃないの」
「友人とはちょっと違うと思うがな……」
「何よー！　私に携帯番号教えるのイヤなんだ？　ふーん、あっそうっ！」

漫画のコマに例えるならばプン、と擬音がつきそうな子供っぽい仕草でミミがそっぽを向く。

「別に嫌ってわけじゃないけどさ……」
「じゃあ教えて！　今すぐ！」
「あ、あぁ……」

結局ミミの強引さに負けてケー番やメアドを教え合っちまった。どうも俺はこういう押しの強いタイプの前だといいように流されてしまう傾向にあるようだ。情けねぇ。

「よし、これで登録ＯＫ、っと！　ねっ柊兵くん、たまにはメールでもしましょうね！　あ、それと一応教えておくわ。あと二ヶ月ちょっとで今年は終わっちゃうけど、今年の天秤座のキーワードはね、【　何事もあるがままに　】　よ。じゃあ、あの娘たちの誤解を解くの、頑張ってね！」
「あぁ」
周囲に気を配ったのか、まだ三分の一近く残っている巨大パフェの前でミミが俺に向かって小さく手を振る。
「柊兵くん、あなたに大宇宙（マクロコスモス）のご加護がありますように」
俺も軽く片手を上げ、「じゃあな」と呟き、外に出た。

先ほどよりもかなり気温が下がり始めている。
その冷たい外気を思い切り吸い込み、肺に充満していた店内の甘ったるい香りをすべて吐き出した。……行くか。

もし指定された場所に美月と怜亜がいなかったら、あいつらの家に寄ってみよう。
そう決めて俺は赤比良川の高台へ向かった。

お誕生日おめでとう　＜5＞（前書き）

※次回で第一部は完結です

お誕生日おめでとう　<5>

――　懐かしいな。
ここは昔あいつらやヒデとよく遊んだ場所だ。
かなり水位が下がっている赤比良川を高台から眺め、感慨にふける。

最近の日の落ち方は本当にあっという間だ。
上空の色はハイスピードで鮮やかな薄紫色に染まり、もうすぐ夜風に変わろうとしている川風がまるで急かすように俺の髪を何度も揺らし続ける。

時刻は午後五時二十七分。
すでに二十分以上待っている。
あいつらから指定されたベンチには誰もいなかった。
あれだけ「遅れるな」と騒いでいた美月が来ないということは、どうやら賭けは外れたらしい。

制服のポケットに突っ込んでいた携帯電話が鳴った。これはメール着信のコール音だ。
もしかしてあいつらか……？
かすかな期待と共に取り出してみると、ディスプレイはついさっきまで一緒にいたチビ女からのメールが届いている事を告げている。
おい、またお前かよ……。

一応開いて読んでみる。
前半は美月や怜亜と無事に仲直り出来るようにと心配している内

容で、後半は先ほど甘味喫茶で予言した俺の今年の運勢とやらをご丁寧にも簡潔にまとめてやがる。どうでもいいが本当にヒマな奴だ。
だがこうして再度有難迷惑なアドバイスをしてくれたはいいが、肝心のあいつらがこないんじゃ、なんの意味も無い。

軽い溜息をついた後、空しさを抱えつつベンチ中央の空席に座った。
そして穏やかに流れる赤比良川の流れを見下ろした瞬間に子供の頃をふと思い出す。
そういや、昔は台風シーズンになる度にこの川の辺りには絶対に近づくなと親からきつく言い聞かされていたっけなぁ。だが幼かった俺はそんな注意など話半分で、その豪流めがけて薄っぺらい石で水切りをしたらちゃんと水面を弾いて点々と飛ぶのだろうかと下らないことを考えてワクワクしていたような気がする。
そこまで回想していた時、頭上に何かが降ってきた。

「うぉ！？」

そいつは軽かったので痛くは無かったが、純粋に驚いた。
反射的に頭上に一瞬乗ったその物体を掴んだが、ふわふわと柔らかい。目の前に持ってきてみると、その柔らかい物体の正体は、銀色の二つの袋を青いリボンで一つにまとめた包みだった。

「それ、あんたの誕生日プレゼントだから」

振り返ると美月が怒ったような顔で、そして怜亜が寂しそうな顔で、俺の後ろに立っていた。二人とも制服姿のままだ。
包みを放り投げたのは性格からいってたぶん美月だろう。
「怜亜と話し合ったんだけど、あたし達が何日もかけてせっかく作ったからとりあえず渡しておく。焼くなり煮るなり捨てるなり勝手

にして。もうあたし達、柊兵にはつきまとわないから。迷惑かけてごめん。じゃあねっ」
早口、しかもほぼ棒読みに近い口調でそう言うと美月は俺に背を向け、怜亜も「さよなら、柊ちゃん」と俺に最後の挨拶をし、共に帰って行こうとする。

「ちょっと待てお前ら！　とりあえず話を聞けって！」

俺の強い制止に二つの足音は同時に止んだ。
上半身だけを器用にひねらせ、美月が俺を見る。
「嘘つき男が何か言いたい事でもあるわけ？　迷惑だったあたし達にさ」
美月の声が硬い。怜亜は何も言わない。
現時点で俺が得られているのはこのひたすらに重いプレッシャーだけだ。
「まっ、まぁ、その、色々とな…」
「色々？　例えば何よ？　例を挙げてみなさいよ」

……このままこいつらの足を止める何かいい話題は無いか？
髪を掻きむしりたい衝動を抑えつつ、必死に考えてみる。

あぁ、そうだ。
そういえばこいつらに聞きたかったことが一つあったな。
俺は二人の幼馴染を代わる代わる見ながら言った。

「な、お前らの星座って何座なんだ？」

俺のこの台詞の後のこいつらの顔は面白かった。傑作だ。
まさに放心、“　虚をつかれた　”って顔だった。
だがよく分かるぞ。
なんせこの俺の口から「お前らの星座は何だ？」だもんな。
もし俺とミミが知り合いだということをこいつらが知る前の状態なら、俺がイカれちまったと思われたかもしれない。

この珍妙な問いかけの後、俺らの間にしばしの膠着時間が訪れる。
たぶんそれは時間にすればほんの数十秒のことだったのだろう。
しかし今の俺にとってはまるで数十分の出来事のように感じた。
早くこの沈黙状態から脱出したかったが緊張しているせいで口の中がカラカラに乾き、次の言葉が出てこない。
しかも次に何を言えばいいのかも皆目分からないときている。情けねぇ限りだ。

「柊ちゃん…」

もしかすると俺のこの心境が伝わったのかもしれない。
俺の名を呼び、凍結状態から一番先に離脱して俺を開放してくれたのは怜亜だった。

「柊ちゃん……、それ、影浦さんから聞くように言われたの？」
怜亜は華奢な両腕を軽く身体の前でクロスさせ、言いにくそうに告げる。
「いや違うっ！　ただの興味本位だっ！」
慌ててそう釈明し、顔の前で二度大きく手を振る。
このままこの場を終わらせたくないと必死になったせいか、この動作はシン並みのオーバーアクションになっちまった。
「な、なぁ、大体考えても見ろよ。お前達の誕生日を俺はちゃんと覚えている。あの占い師に言えば、お前達の星座が何かなんてわざ

わざ聞かなくてもすぐに分かることだろ？」
「え！？　ウソ！？　柊兵はまだあたし達の誕生日を覚えてるの！？」
どうやら美月も正気に戻ったようだ。唖然とした表情はそのままだが、急に勢い込んで尋ねてくる。
「あぁ、覚えてる」
「じゃあ言ってみてよ！」
「あぁ言う。これから言うから二人ともとりあえず隣に座れ」
「……怜亜、どうする？」
「うん……」

美月と怜亜はお互いの顔を見合ってしばし躊躇していたが、結局ベンチの側に揃ってやって来ると俺の隣にそれぞれ座った。
……が、あのカラオケボックスの時よりも俺との間隔はかなり離れている。
しかし相変わらず本当に分かりやすいな、お前達は……。

さて、何から切り出そう。
まずはこいつらの誕生日からだな。

「怜亜が二月二十九日で、美月が六月六日だ。そうだったよな？」
「そうよ。柊ちゃん、覚えていてくれたのね……！」
「驚いた！　柊兵ってば本当に覚えてたんだっ！」
硬かったこいつらの声にわずかだが喜色が混じり始めたのを俺は聞き逃さなかった。
何とかここで上手く畳み掛けねぇとな……。

「ところでこれは何だ？」
手の中にある二つの包みの中身を尋ねてみる。

「開ければ分かるわよ」
美月が答えたので両方の包みを開けてみた。
中には黒と灰色の毛糸で編んだ、手袋とマフラーがそれぞれ入っていた。
手袋は手の甲だけを覆う指出し型で、マフラーは少々長めに出来ている。

「見れば分かると思うけど、グローブ担当は私。で、マフラーは怜亜。でもさ、私は編み物初トライだって事を念頭に置いてよね。時間的都合及び精神的疲労により、指先部分は省略させてもらったから」

美月の言うとおり、確かに手袋は網目の大きさに多少のバラつきがあった。
だがほつれてきたり、はめる時に網目の隙間にうっかり指を突っ込んでしまうようなレベルではなさそうだ。
「こういう事が大の苦手なお前がよくこんなの作れたな」
「うん、怜亜に教えてもらって必死にやった。でもどうしても間に合わなかったんだよね。だからここ最近は学校にまで持ち込んで、休み時間に家庭科室で必死にラストスパートかけてたんだけどダメだった」
川面を見つめたままで美月が呟く。
そうか、それでここしばらくお前達は休み時間に教室にいなかったんだな……。
もう一度手袋に目を落とす。
小学校の時に家庭科の成績が万年アヒル型だった美月にしては上出来だ。
「サンキュー、美月。ありがたくいただくよ」
「……」

今度はマフラーに視線を移す。
一目の狂いも無く綺麗に揃った網目だ。市販品と比べても少しの遜色も無い。
身体が弱かったせいでインドア派だった怜亜は料理や裁縫が昔から得意だったからな。

「怜亜、これサンキューな。お前は昔からこういうのが得意だもんな。暖かそうだ」
「……え、えぇ……」
マフラーを巻き、手袋をはめる。
「どうだ？　似合うか？」

しかし引き続き両サイドからの返事は無かった。
そうか、これじゃまだダメか……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7976x/

私たちに しときなさい！

2011年12月9日00時56分発行